918.6
0764o
0(s)
00690651

折口信夫全集

第五卷

中央公論社

918.6 *
0764o
0(5)

大正六年頃

國會圖書館
41.3.30

690651

口譯萬葉集（下）

目次

口譯萬葉集（下）

巻第十一……三
巻第十二……七四
巻第十三……一二八
巻第十四……一七五
巻第十五……二一一
巻第十六……二五一
巻第十七……二九〇
巻第十八……三四七
巻第十九……三八八
巻第二十……四四四

口譯萬葉集（下）

萬葉集　卷第十一

相聞

□旋頭歌

2351 新室(ニヒムロ)の壁草(カキ)苅りに、いましたまはね。
草の如寄り合ふ處女は、君がまにまに』

2352 新室を蹈む鎭(シヅ)め子が、手玉(タマ)鳴らすも。
玉の如照りたる君を。うちにと、まをせ』

2353 泊瀨(ハツセ)の齋槻(ユツキ)が下(シタ)に、吾が隱せる妻。
茜さす照れる月夜に、人見てむかも』

2351 今度新しく立てた此家の祝ひに、臨席して下さい。そして外圍ひの草を刈るのを、お手傳ひ下さい。こちらには、澤山の處女達が、草のやうになよ〳〵としてをりますが、どれでも、あなたのお心任せになさることが出來るのですよ。

（新築の祝ひに、主人から客へ寄せた招待のやうにして、その席で歌うたものだらう。次の歌も亦。）

2352 此新築の家では、災難のないやうに、蹈んで鎭める巫女(ミコ)達が、手につけた玉を鳴し乍ら、躍りまはつて居ることだ。その玉のやうに、光り輝いた立派なお客が入らつしやつた。どうか内へお這入り下さい、と申し上げよ。

2353 あの泊瀨の山にある神木の槻の木の下に、自分の行くまで待たせて、隱れさせてあるいとしい人を、ひよつとすると今頃、月の光りで、人が見つけては居まいか。

2354 健男(マスラヲ)の思ひ猛(タケ)びて、隱せるその妻。
天地に照り透るとも、顯れめやも』
2355 息の緒に吾が思ふ妹は、早も死ねとや。
生けりとも、我に寄すべく、人の言はなくに』
2356 狛(コマ)錦紐の片へぞ、床に落ちにける。
明日(アス)の夜し來なむといはゞ、取りおきて、待たむ』
2357 朝戸出の君が足結(アユヒ)を濡す露原。
凪(ト)く起きて、出でつゝ我も、裳の裾濡れな』
2358 何せむに、命を、もとな、長く欲りせむ。
生けり雖(トモ)、吾が思ふ妹が、易く逢はなくに』
2359 息の緒に我は思へど、人目多みこそ。
吹く風にあらば、數々(シマ〳〵)會ふべきものを』
2360 人の親の處女子(スメ)坐(ヲ)るて、神籬山邊(モルヤマベ)から。
朝な〳〵、通ひし君が來ねば、悲しも』
2361 天(アメ)なる一つ棚橋。いかで、行かむを。
若草の妻許(ガリ)と言はゞ、足結(アユヒ)固めむ』
2362 山城の久世(クゼ)の若子(ワクゴ)が愛(ヲ)しといふ。吾(ア)を。
あふさわに、吾(ア)を欲しといふ。山城の久世』
右十二首、人麻呂集に見えて居る。

立派な男が、一心不亂に決心して隱して、盜み出しておいたそのいとしい女は、譬ひ美しくて、天地間に誇り通る程であつても、隱れ場處が、人に知れる氣遣ひはあるものか。
命懸けで自分が思ひこんでるいとしい人は、私を早く死んで了へ、と思うてゐられるのか知らん。生きて居た所で、私に離かうとは、あの方はいうてもくれないから、しやうがない。
舶來の錦の下裳の紐の片方が、寢床の傍に落ちたことだ。
(ありはせなんだか、と男がいふに答へて、女が)さあそんなに返して欲しくば、明晩來る約束をなさい。さうすりや、しまうておいて、待つてをります。
朝歸りに、表へ出たあの方の足結ひの紐を濡す、その露の一杯降つた原に、どれ、早く起きて出て行つて、君の歩いた跡を歩いて、上裳の裾を濡して見よう。
何の爲に長生きがしたい、と理もないことを思はうか。いつまで生きてゐた所で、竝み大抵で、いとしい人と會へないのに。

なくに』
2359 息の緒に我は思へど、人目多みこそ。
吹く風にあらば、數々(シマ〳〵)會ふべきものを』
2360 人の親の處女子(スメ)坐(ヲ)るて、神籬山邊(モルヤマベ)から。
朝な〳〵、通ひし君が來ねば、悲しも』
2361 天(アメ)なる一つ棚橋。いかで、行かむを。
若草の妻許(ガリ)と言はゞ、足結(アユヒ)固めむ』
2362 山城の久世(クゼ)の若子(ワクゴ)が愛(ヲ)しといふ。吾(ア)を。
あふさわに、吾(ア)を欲しといふ。山城の久世』
右十二首、人麻呂集に見えて居る。

一所懸命で、自分は思ひこんでゐるが、會ひに出かけないのは、人目が多いからだ。一層吹く風であつたら、逢ふことが出來ようのに。(會ふ時の拙いのを怨んだ女に、與へた歌。)
親達が娘を居させて、ぢつと守つて居るといふではないが、神籬山の邊(アタリ)の道を、朝々毎に通つて歸つたあの方が、あの朝、歸つたきり來ないので、悲しいことだ。
いとしい人の所へ行くのなら、足結ひの紐を固めて、しつかり準備して行かう。道に危い只一本の棚橋がある。それも妻の許へ行く爲だといふなら、是非とも越えて行かうよ。
あの山城の久世から通はれる、久世の若殿さんが、自分を手に入れたい、と仰つしやるのだけれども、一體久世は、曲つた人間が多いから、若殿の言も、つひ好い加減に、自分を手に入れたい、というて居られるのだ。其に違ひない。

2363 岡崎の回みたる道を、人な堅りそね。
ありつゝも、君が來まさむ避き道にせむ』

2364 玉簾の小簾の隙きに、入り通ひ來ね。
たらちねの母が問はさば、風と申さむ』

2365 うちひさす宮路に會ひし人妻故に。
玉の緒の、思ひ亂れて寢る夜しぞ多き』

2366 まそ鏡見しがと、思ひし妹に逢へるかも。
玉の緒の絶えたる戀ひの繁き此頃』

2367 海原の道に乘れゝや、我は戀ひをり。
大舟のゆたにあるらむ、人の子故に』

右五首、古歌集に見えて居る。

2363 此岡の崎のぐるつと廻る道を、遠いからとて、近道をつけるな。その儘にしておいて、あの方が入らつしやる間道にしよう、と思ふから。

2364 玉を雜ぜて拵へた簾の隙き間からでも、戀しい人は這入つて入らつしやればよい。お母さんが、若しも、今、音のしたのは誰だ、と聞き咎めなさつたら、あれは風ですよ、とお答へしませう。

2365 御所の表門通りで行き會うたあの人は、人妻であつた。それでその人の爲に、あれこれと煩悶して、床に就く晩が多い。

2366 （見たい〳〵と思うて居たいとしい人に、やつとの思ひで會うたことだ。其爲に。）一時中絶して居た煩悶が、此頃は又絶えず起つて來ることになつた。

2367 自分は焦れて居るが、ちようど自分の體はまるで、海上の航路に乘りかゝつて居るからか、こんなに、心持ちが動搖して居るのだらう。他人なる人の爲に。

□正しく心緒を述べた歌

2368 垂乳根の母が手離り、かく許りすべなきことは、いまだせなくに

2369 人の寢る熟寢は寢ずて、はしきやし君が面すらを、欲りし嘆くも

2370 戀ひ死なば、戀ひも死ねとや。玉桙の道行く人の、言も告げなく

2371 心には千重に思へど、人に言はず、吾が戀ふる妻を、見むよしもがも

2373 いつとはも戀ひぬ時とはあらねども、夕方まけて戀ひは、術なし

2374 かくしのみ戀ひや渡らむ。玉きはる命も知らず、年は經につゝ

2375 我ゆ後、生れむ人は、我が如く戀ひする道に會ひこすな。ゆめ

2368 お母さんの手許を離れてから、こんなにやる瀬ないことは、まだ一度も經驗がない。戀ひは苦しいものだ。（幼稚な心持ちを發揮した傑作。）

2369 衆人の寢る熟睡はせずに、可愛いゝあの方の顏だけでも見たい、と思うて嘆息をついて、起きて居ることだ。

2370 こんなに焦れて居るのに、焦れ死ぬなら勝手に焦れ死ね、といふお積りかして、まるで通りすがりの路傍の人のやうに、ものも言つておこして下さらない。

2671 心中では、繰り返し〳〵幾重にも思うて居るが、人には話さずに、自分の焦れて居る人に、どうぞ逢ふ手段があれば好いが。

2373 何時と言うて、焦れて苦しくない、と言ふ時はないけれども、その中でも、日暮れ方に焦れて居るのは、やる瀬ないものだ。

2374 こんなに許り焦れ續けて居ようか。命が、今日明日も知れない程になつた。戀ひはじめて、年がたち〳〵した。

2375 自分は、戀ひをする道に迷ひこんで、こんなに苦しんで居る。自分より後に、世の中に生れて出る人は、自分のやうに、そんな道に、決して出くはしてくれな。（佳作。）

2376 健男(マスラヲ)の現心(ウツシ)も吾はなし。夜晝と言はず、戀ひし渡れば

2377 何せむに、命續ぐらむ。吾妹子に戀ひざる先に、死なましものを

2378 よしゑやし、來まさぬ君を何せむに、飽かずてわれは、戀ひつゝをらむ

2379 うち渡す近きわたりを徘徊(タモトホ)り、今や來ますと、戀ひつゝぞをる

2380 はしきやし誰(タ)が障(サフ)れかも、玉桙の道に忘れて、君は來まさぬ

2381 君が面(メ)を見まく欲りして、此二夜、千年の如く、我が戀ふるかも

2382 うちひさす宮路に、人は充ち行けど、吾が思ふ人は、只獨りのみ

2383 世の中は、常かくのみと思へども、

2376 立派な一人前の男らしい正氣を、自分はなくして了うた。夜晝と言ふ區別もなく、焦れ續けて居るので。

2377 何の爲に、命を續けて居るのだらう。一層あの人に逢はない先に、死んだ方がましだつたのに。

2378 入らつしやらなければ、お出でにならずともかまはぬ。其に何の爲に、何時迄飽きもせず、私は焦れて居ることだらう。

2379 あの方は、今頃は、きつと、此近邊を徘徊(ウロツ)いて入らつしやつて、もうかれこれ、入らつしやるだらう、と焦れて居る。

2380 一體誰が、邪魔をして居る爲であるか。こちらへ來る道を忘れて了うて、それで、やつてお出でにならんのだらう。

2381 あの方のお顏を見たく思うて、此二晩といふものは、まるで千年も經つたやうに思はれる程、一所懸命に思ひつめて居ることだ。

2382 御所へ通ふ大通りを見ると、人が一杯通つて居るけれど、たゞ獨り自分が思つて居る人の外には、心を移すやうな人も通つて行かない。

2383 世界といふものは、かういふ風に悲しいものとは諒めて居

かつ忘らえず。尙戀ひにけり

2384 吾が夫子(セコ)は幸(サキ)く在(イマ)すと、偶(タマ〳〵)も我に告ぐなる人の、來ぬかも

2385 あら玉の五年經れど、我が戀ふるしるしなき戀ひの、止まず怪しも

2386 巖すらゆき徹(トホ)すべき健男(マスラヲ)も、戀ひとふことは、後悔(ノチク)いにけり

2387 日竝(ケ)べば、人知りぬべみ、今日の日の、千年の如くありこせぬかも

*

2388 立ち居する業(ワザ)も知らえず思へども、妹に告げねば、間使(マ)ひも來ず

2389 ぬば玉の此夜な明けそ。あからひく朝行く君を、やれば苦しも

2390 戀するに、死にするものにあらませ

るけれども、又片方に、忘れて了ふことが出來ないで、思ひ出されて諦め切れずに、焦れて居ることだ。

2384 あのお方からは、お便りは望まれない。せめて時折りでも、あの方は達者で入らつしやる、と私に告げる所の、使ひでもやつて來てくれゝば好いが。（便りせぬ男にやつた歌。）

2385 焦れ始めてから、五年もたつたけれど、何の效果も現れて居ぬ。戀ひの止まず續いて居るのが、不思議なことだ。

2386 岩が前に立ち塞つても、その岩を突き貫いても、通つて行く立派な男でも、戀ひと云ふことには、始終思ひ切り悪く、後悔して許り居ることだ。

2387 幾日も〳〵重ねて出逢うてゐる中に、人に悟られるだらうから、都合よく逢うた此時が延びて、千年程の長さになつてくれゝば好い。さうすれば、ゆつくりと逢うて居ることが出來るのに。

2388 呆(ボン)やりとして、樣々な爲事も訣らなく忘れて了ふ程、思ひこんで居るけれども、いとしい人に告げないから、使ひもやつて來ないことだ。

2389 今夜の晩が、何時迄も明けずに居てくれ。朝出かけて行く方を、行かして了へば、後が、辛くてかなはないから。

2390 戀した爲に、人は死ぬものであつたならば、今頃自分は、

ば、我が身は、千度死にかへらまし

2391 たまさかに昨日の夕見しものを。今日の朝に、戀ふべきものか

2392 なか〳〵に見ざりしよりも、相見ては、戀しき心まして思ほゆ

2393 玉桙の道行かずしてあらませば、懇ろ、かゝる戀ひには遇はじ

2394 朝影に我が身はなりぬ。玉かぎる仄かに見えて去にし子故に

2395 行けど〳〵逢はぬ妹故、久方の天の露霜に、濡れにけるかも

2396 たまさかに吾が見し人を、如何ならむよしを持ちてか、又一目見む

2397 暫しくも見ねば戀しき吾妹子を、日に日に來れば、言の繁くに

千遍許りも、生き代り死に代りしたことだらう。

2391 やつとの思ひで、幾日振りに、昨晩會ふことが出來たのに、今朝はもうこんなに、焦れてをらねばならんのか。

2392 會はないで居た時分よりは、却つて會うてから、戀しい心が募つて、思ひこまれることだ。

2393 あの時に、あの道を歩いて、あの人に出會した爲に、こんなしみ〴〵と辛い戀ひに出會したんだが、若し、あの時行かなかつたら、こんな戀ひにも遭はなかつたであらうのに。

2394 自分の姿は痩せて、しよんぼりとして了うた。僅か逢うた許りで、行つて了うた人だのに、其人の爲に。

2395 幾ら逢ひに行つても、逢うてくれない人だのに、其人の爲に、空から降つて來る、冷い秋の水霜に、濡れしほたれたことだ。

2396 偶、自分が出逢うた人に、どんな手段を以てすれば、まう一目會ふことが出來るだらうか。

2397 一寸の間でも逢はないでゐると、戀しい愛する人であるが、それかと言うて、毎日々々逢ひに行けば、人の評判がうるさいことだらう。

2398 玉きはる世迄定めて、頼めたる君によりてぞ、言の繁けく

2399 あから引く肌も觸れずて、寢たれども、心異にしも、我が思はなくに

2400 いで如何に、ねもころ〴〵に、利心の失する迄思ふ。戀ふらくの故

2401 戀ひ死なば戀ひも死ねとや、吾妹子が、吾家の門を過ぎて行くらむ

2402 妹があたり遠くし見れば、あやしくも我はぞ戀ふる。逢ふよしをなみ

2403 玉久世の清き川原に、禊ぎして齋ふ命も、妹が爲こそ

2404 思ふより、見るより、人はあるものを、一日隔てゝ忘れて思へや

2405 垣ほなす人は言へども、狛錦紐解き

2398 何時々々迄もと約束をして、私に信頼さして居たあの人の爲に、こんなに評判がうるさく立つて居ることだ。

2399 此頃は互ひに肌も觸れずに、寢てるけれども、心で別に、お前のことを思ひかへてゐない。

2400 さあなぜこんなに甚く、しみ〴〵と、しつかりした心さへもなくなる迄に、思ひこんでゐるのだらう。それは戀ひの爲だ。

2401 いとしい人が、自分の門を行き過ぎて行く。あれは、焦れて死ぬならば勝手に焦れて死ね、といふ積りなんだらう。

2402 いとしい人の家の邊を、遠くから見て居ると、不思議な程、戀しくなる。逢ふ手段がないので。

2403 玉のやうに美しい久世川の、さつぱりした川原で、禊ぎをして、體を清めて、災難のないやうに祈るのも、誰の爲か。偏にいとしいお前の爲である。

2404 思へば直樣、會ふと言ふやうな訣ならば、一日離れてをつても、辛抱をしてをらうのに、さうでなければ、怎うして忘れる所か。

2405 人の評判は、垣のやうに自身の身の周圍をとり巻いて居る

開(ア)けし、君なけなくに

*

2406 狛錦紐解き開けて、夕だに知らざる
命戀ひつゝあらむ

2407 百(モ)さかの舟漕ぎ入るゝ、や占(ウラ)さし、
母は問ふとも、その名は言はじ

2408 眉根掻き、はなひ、紐解け、待てり
やも。何時しか見むと思へる吾君(ワギミ)

*

2409 君を戀ひうらぶれ居れば、くやしか
も。我が下紐を結ぶ手も、たゞに

2410 あら玉の年は果つれど、敷栲の袖交(カ)
へし子を、忘れて思へや

2411 白栲の袖をはつ〳〵見てしから、か
かる戀ひをも、我はするかも

が、下袴の紐を解いて、打ち解けて、逢つたお方がおいでに（ならぬ、といふ訣でない。）なるんだから、案じることはない。

2406 日暮れ迄、保つか保たないかの命を持ち乍ら、舶來の美しい下袴の紐を開けて、焦れて居ねばならぬか。

2407 手を變へ、品を更へ、占ひを立てゝ見て、男の名をあれか此か、と母が問うて見ても、ほんとうの名は、決して言ふまい。

2408 早く自分に逢ひたいと思うて、あなたは、眉根が痒くなつて掻き、嘘をしたり、下裳の紐が自然と解けたりして、此は自分に逢ふ前兆だ、と待つて入らつしやるか知らん。あなたよ。

2409 あの方に焦れて、悲觀して居るにつけ、自分が結ぶ下袴の紐も、實際、かの人に逢うたのではなく、たゞ空解けして、逢へると思うた心も、無駄になつたのは、殘念だ。

2410 年は、段々死ぬるに近づいて來たが、袖を交して寢た人を、夢にも忘れようか。

2411 白栲の著物の袖を、僅か許り見たゞけだのに、その爲に、かういふ戀ひを、自分はすることだ。

2412 吾妹子に戀ひてすべなし。夢に見む
と我は思へど、ねむらえなくに

2413 故もなく、我が下紐ぞ解けしむる。
人に知らゆな。直(タヾ)接に逢ふまで

2414 戀ふること慰めかねて、出でゝ行け
ば、山をも、川をも知らず來にけり

□物に寄せて思ひを陳べた歌

2415 處女らが領巾布留(ヒレフル)山の瑞垣(ミヅガキ)の、久し
き時ゆ思(モ)ひ來(コ)し。我は

2416 千早振る神の持たせる命をし、誰が
爲にか、長く欲りせむ

2417 石ノ上布留の神杉神さびて、戀ひを
も、我は更にするかも

2418 如何ならむ名に負ふ神に手向けせ
ば、我が思ふ妹を、夢にだに見む

2412 いとしい人に焦れて、遣る瀬ない。せめては、夢にでも見ようと思ふが、寢つかれない。

2413 何と云ふ根據もなく、自分の下裳の紐が解けて來る。これはあの人が、自然と解けさすのである。きつとあの人も、私のことを思うてゐるに違ひない。併し直接出會ふまで、人に知られるな。

2414 焦れてゐる胸の中を、宥め靜めることが出來ないで、家を出て、ぶら〳〵やつて來たが、その間、山を越えたり、川を越えたりするのも訣らないで、やつて來たことだ。

2415 娘達の袖ではないが、布留の山の神の玉垣が、昔からあるやうに、長い間を、私は思うて居たことだ。

2416 神樣が司つて入らつしやる我々の命をば、どうぞ長くあるやうに、と祈つて願ふのは、誰の爲であらうか。他(ホカ)の人の爲ではない。皆あなたの爲だ。

2417 石ノ上の布留の社の、神の木の杉ではないが、神さび、年寄つて、又改めて、戀ひをすることだ。

2418 評判通り德の高い、どういふ神樣に、捧げ物をして祈つたら、せめて夢にでも、焦れて居る人に逢ふことが出來るであらうか。

2419 天地といふ名の絶えてあらばこそ、
汝(イマシ)と、我と逢ふことやまめ

*

2420 月見れば、國は同じく、山へなり、
愛(ウル)はし妹がへなりたるかも

2421 來る道は、石蹈(イハ)む山のなくもがも。
吾が待つ君が馬躓(ツマヅ)くに

2422 石根(イハネ)蹈み重る山はあらねども、逢はぬ日まねみ、戀ひ渡るかも

2423 道の後深津(シリフカツ)島山。暫(シマ)しくも君が面(メ)見ねば、苦しかりけり

2424 紐鏡、能登香(ノトカ)の山は誰が故ぞ、君來ませるに、紐あけず寢む

2425 山科(シナ)の木幡(コハタ)の山を、馬はあれど、徒(カ)歩(チ)より、我が來(ク)。汝(ナ)思ひかねて

2419 天地は元より、天地間にあらゆる名の附いてゐる、様々のものがなくなつた時には、自分と、お前との二人の出會ふことも、やめることになるだらうが、そんなことのない限りは、人が何と言うても會はう。

2420 月を見ると思ふが、此月を同じ國で見て居乍ら、たゞ山が隔つてゐる許りで、可愛い〳〵人が隔つて、逢はれないことだ。（傑作。）

2421 私の待つて居る、あの方の入らつしやる道には、岩の上を通る山がなければ好い。さうでなければ、あの方の馬が躓くから。

2422 岩の上を通らねばならぬ、重り合うた山はないけれども、逢はない日が多くて、焦れ續けて居ることだ。

2423 遥かの地方の果てなる、深津の島山ではないが、暫らくでもあの方の顔を見ないので、辛いことだ。

2424 能登香山ののとかといふ語は、解くなといふ意と通じるが、それは、誰に向つて言うたのだ。此方は、戀しい方が入らつしやつたのに、どうして、下裳の紐を解き廣げないで寢ませうか。

2425 自分は馬は持つて居るが、お前を思ふ心が辛抱し切れないで、馬に乘れば、人に悟られるから、そつと地べたを歩いて來た。山科の木幡の山道をば。

2426 遠山に霞棚引き彌遠(イヤトホ)に、妹が面(メ)見ずて、我が戀ふらくも

2427 此川の瀬々のしき浪、しく〳〵に、妹が、心に乘りにけるかも

2428 千早人宇治の渡りの速き瀬に、逢はずありとも、後(ノチ)も我が妻

2429 はしきやし逢はぬ子故に、徒らに、此川の瀬に裳の裾濡れぬ

2430 此川の水泡(ミナワ)逆(サカ)捲き行く水の、言(コト)は反(カヘ)さじ。思(モ)ひ染めたれば

2431 賀茂川の後瀬(ノチセ)靜けく、後も會はむ。妹には我よ。今ならずとも

2432 言に出でゝ言はゞゆゝしみ、山川の激(タギ)つ心を堰(セ)き敢(ア)へてけり

2433 水の上に數かく如き我が命、妹に會

2426 遥かの山に、霞が懸つて居るやうに、いとしい人とかけ離れて、非常に遠くに居る爲に、戀しい人の顔も見えないで、焦れて居ることだ。

2427 此川の瀬毎に、間斷(シキリ)なく打つ波のやうに、始終いとしい人が、自分の心に乘りかゝつて居て、物を思はせることだ。

2428 今は、激しい危險な場合だ。かういふ場合は、會はずとをつて、將來は必、會ふことにしよう。我が妻よ。

2429 可愛い、逢うてくれない人なのに、其人の爲に、わざ〳〵、川を渡つて會ひに出かけて、無駄に、下裳の裾を濡したことだ。

2430 此川に水の泡を逆捲いて、流れて逝く水が飜るやうに、語をば飜しはすまい。自分はお前に、深く思ひついて居るんだから。

2431 賀茂川の下の瀬が靜かなやうに、人目のうるさい今は避けておくが、將來會ふことにしようと思ふ。今會はないでも、いとしい人には、自分ときまつて居る。

2432 口に出して言うたら慰まらうが、言ふのは、憚りがあるので、山の川のやうに、激して興奮してゐる心をば、堰き止めて、もちこたへて居ることだ。

2433 水の上に文字を書くやうな、はかない自分の命をば、神に

はむと、うけひつるかも

2434 荒磯越え、外行く浪の外心、我は思はじ。戀ひて死ぬとも

2435 近江ノ海。沖つ白波知らねども、妹許とはゞ、直に越え來む

2436 大舟の香取の海に碇下し、如何なる人か物思はざらむ

2437 沖つ藻を隱さふ波の五百重波、千重しく〳〵に、戀ひ渡るかも

2438 人言は暫しぞ。吾妹。綱手引く海より益して、深くし思へば

2439 近江ノ海。沖津島山おくまへて、吾が思ふ妹が言の繁けく

2440 近江ノ海。沖漕ぐ舟に碇下し、隱るる君が言待つ。我ぞ

2441 隱り沼の下ゆ戀ふれば、術をなみ、妹がな告りそ。忌むべきものを

2442 大土も採れば盡くれど、世の中に盡きせぬものは、戀ひにしありけり

2443 隱り所の澤の泉の、岩根ゆも通して思ふ。我が戀ふらくは

2444 白檀磯邊の山の常磐なる、命なれやも。戀ひつゝをらむ

2445 近江ノ海。沈透く白玉知らずして、戀ひつるよりは、今ぞまされる

2446 白玉を纏きてぞ持たる。今よりは、我が玉にせむ。知れる時だに

2447 白玉を手に纏きしより、忘れじと思ひしことは、いつかやむべき

2448 白玉の間開けつゝ貫ける緒も、括り

2441 心の底で焦れて居るのが、遣瀬ないと言うて、いとしい人よ。私の名を言ふことをばするな。それは、愼まねばならぬことだ。

2442 此大地の土も、段々採つて行けば、終にはなくなるが、幾らしてもなくならないのは、此戀ひといふ感情である。

2443 籠つた所の澤に、湧き出す泉のやうに、岩をもつき通す位に、自分は思うて居ることだ。此焦れ心は。

2444 岩濱のいつ迄も變らぬ、石のやうな命でありたいものだ。さうして何時迄も、戀ひ續けてをらう。

2445 近江の湖水に、沈んで透いて見える白玉ではないが、知らないで、見ぬ戀ひに憧憬れて居た時分とくらべて見ると、會うた今の方が、ひどくなつてゐる。

2446 自分は、白玉を手に卷きつけて持つてゐる。此からは、其玉を自分の物にしよう。そのやうに、せめていとしい人と、初めて顏を見あうた時でも、すぐ。

2447 白玉は、手に卷きつけることが出來たからというて（妻にしたからというて）、その後は、前々から忘れまい、と思うてをつた人をば、忘れて了ふやうなことがあらうか。

2448 間隔をおいて緒に貫いてある白玉も、括り寄せて見れば、

寄すれば、後あふものか

2449 香具山に雲居たな引き、おぼゝしく
あひ見し子らを。後戀ひむかも

2450 雲間よりさ渡る月の、おぼゝしくあ
ひ見し子らを、見むよしもがも

2451 天雲の寄合ひ遠み、逢はずとも、あ
だし手枕、我は枕かめやも

2452 雲だにもしるくし立たば、慰めに見
つゝしをらむ。直接に會ふまで

2453 青柳葛城山に立つ雲の、立ちても坐
ても、妹をしぞ思ふ

2454 春日山雲居隱りて、遠けども、家は
思はず。君をしぞ思ふ

2455 我故に言はれし妹は、高山の峯の朝
霧、過ぎにけむかも

ぴつたりと一つに會ふやうに、自分と續ひ人も、離れてを
つても、後には會ふことが出來ることだ。

2449 香具山に、雲が長くかゝつて居る樣に、漠然ととりとめず
に、遇うたいとしい人であるのに。何時迄も焦れてることだらう。

2450 雲の間を通つて行く月のやうに、ぼんやりと、とりとめな
く出會うた、いとしい人に、會ふ手段があれば好いが。

2451 君と私とは、空の雲が一つに歸する、遠い地の果てに、距
れて遠くをる爲に、會はないでをつても、他の人の手枕を
枕としようか。

2452 遥かに離れて居ても、せめて雲だけでも、はつきりと立つ
て居るのが見えたら、それを心宥めの種にして、あの邊に、
お前がをるのだと眺めて居よう。直接に出會ふ迄。（此歌と
前の歌とは、問答歌である。）

2453 葛城山に立つて居る雲ではないが、何かにつけて、いとし
い人のことが思ひ出される。

2454 私は、遠くやつて來た。春日山は雲に隱れて了うて居る程
遠いが、家のことは考へずに、たゞ、あなたのこと許り考
へてゐる。

2455 自分の爲に、彼是と評判せられたいとしい人は、高い山の、
峯の朝霧のやうに、なくなつて了うたことだらう。

2456 ぬば玉の黒髪山の山草に、小雨降り
頻き、しく〳〵思ほゆ

2457 大野らに小雨降り頻き、木の下によ
りより寄り來。我が思ふ人

2458 朝霜の消なば消ぬべく思ひつゝ、い
かで、此夜を明しなむかも

2459 吾が夫子が濱行く風の彌速に、早言
なさば、彌逢はざらむ

2460 遠妻のふりさけ見つゝ偲ぶらむ、此
月の面に、雲な棚引き

2461 山の端にさし出づる月のはつ〳〵
に、妹をぞ見つる。後戀ひむかも

2462 吾妹子し吾を思はゞ、まそ鏡照り出
づる月の、影に見え來ね

2463 久方の天照る月の隱れ行く、何に準
へて、いとしい人を思ひ浮べて居た

2456 黒髪山の山の上の草に、雨が降りしきるやうに、後から後
から間斷なしに、いとしい人のことが思はれる。

2457 廣い野原に雨が降り通しに降る爲に、木の陰に人が寄るや
うに、より〳〵（折り〳〵）は、私の所へ立ち寄つて下さ
い。私の思うてゐる人よ。

2458 朝霜のやうに消え入りさうに思ひ乍ら、どうして今晩は、
明すことが出來ようか。

2459 濱邊を吹いて通る風の、非常に速いやうに、そんなに周章
てゝ、あなたが、私との間の關係をつけよう、となさつた
ら、一層會へなくなりませう。

2460 遠方に居るいとしい人が、ずつと遥かに見やつて、自分の
ことを思うて居るだらう、と思はれる此月の面に、雲よ、
かゝるな。

2461 山の上にさし上つて來る月ではないが、極、僅か許り、い
としい人を見たことだ。此から後、定めて焦れることだら
う。

2462 いとしい人が、私を思うてゐてくれるならば、照つて出て
來る月の樣に、幻にでも、會ひに來てくれゝば好いが、其
容子も見えぬ。

2463 空に照つて居る月に準へて、いとしい人を思ひ浮べて居た

へて、妹を偲ばむ

2464 三日月の爽(サヤ)かに見えず、雲隠(ガク)り見まくぞ欲しき。うたて、此頃

2465 我が夫子(セコ)に我が戀ひをれば、我が宿の草さへ、思ひうら枯れにけり

2466 淺茅原(アサヂフ)の小野に標(シメ)さす空言(ムナゴト)を。如何なる日にか、君をし待たむ

*

2467 道の邊(ベ)の、草深百合の、後(ユリ)とへば、妹が命を吾(ア)は知らめやも

*

2468 水門(ミナト)にまじれる草の、蔭草(シリクサ)の人皆知りぬ。我が下思ひ

2469 山ちさの白露重み、うらぶるゝ心を深み、我が戀ひやまず

のであるが、其月さへも隠れて了うた。何を戀しい人に擬して、心を慰めませうか。

2464 三日月の様に、はつきりとも顔を見ることも出來ないで、其が雲に隠れたやうに、見たくてならんことだ。嫌なことだ。幾日以來。

2465 戀しいお方に、自分が焦れて居ると、ちようど秋の頃で、自分の屋敷の草迄が、主人の思ひ患うてゐるのに倣うて、疲れて了うたことだ。(佳作。)

2466 茅花(ツバナ)の生えた荒れ果てた野に、標を引いて自分のものとした所で、何もないのだ。そのやうにあなたの言も、根も葉もない、出たらめの御語なのだ。何時になつたら、ほんとうにあなたをば、お待ち受けすることが出來ませうか。

2467 道傍(バタ)の生え茂つた草の中に、咲いて居る百合の花ではないが、ゆり即、將來逢ふことにしようと言うて入らつしやるが、それ迄、お前の命がもつだらうか。恐らく生きて入らつしやる中に、逢ふといふ時機があるとは、私は考へられません。

2468 川口の草中に雜つて生えて居る蔭草(シリクサ)ではないが、世間の人が皆、もう知つて了うたことだ。自分の心の底で、思うて居ることを。

2469 山ちさの花にかゝつて居る露の重さに、萎れて、しよんぼりして居るやうに、自分の心の底迄も、悲しい心が滿ち渡つて、焦れる心が、とまらないことだ。

2470 水門にさ根這ふ小菅、忍ばずて、君に戀ひつゝ、ありかてぬかも

2471 山城の泉の小菅(スガ)、おしなみに、妹が心は、我が思はなくに

2472 うち渡す神籬(ミモロ)の山の岩菅(イハホスガ)。ねもごろ、我は片思ひぞする

2473 菅の根の懇ろ君が結びたる、我が紐の緒を解く人はあらじ

2474 山菅の亂り戀ひのみせしめつゝ、逢はぬ妹かも。年は經(ヘ)につゝ

2475 我が宿の軒に羊齒(シダ)草生ふれども、戀ひ萱草(ワスレ)、見れど、まだ生ひず

2476 內田(ウツタ)にも稗は許多(アマタ)にありと云へど、選(エ)らえし我ぞ、夜獨り寢る

2477 足引きの名に負ふ山菅おし伏せて、

2470 川口に根を張つてる菅が、土の下迄這入りこんで居るやうに、自分も心の底に隱してることが出來ないで、いとしい人に焦れて、生きて居られさうにも思はれないことだ。

2471 私を思うてくれる、いとしいお前の心持ちは、並み一通りには、思うてゐない。

2472 遠くに見える神籬山の岩に、生えた麥門冬ではないが、勤卽、くよ〳〵と自分は、片思ひをして居ることだ。

2473 菅の根ではないが、しんみりとあなたが結んで下さつた、私の下裳の紐は、あなたの外に、誰も解く人がありますまい。誰にも、許すことではありません。

2474 自分に、こんなに心をかき亂すやうな、戀ひ許りをさせて置いて、逢うてくれない人であるよ。長い間、立ち〳〵して。

2475 自分の屋敷の軒には、羊齒が生えて居るけれども、戀ひを忘れるといふ萱草は、幾ら見ても、生えて居ない。

2476 村の中の田には、稗が澤山植わつて居るが、其中で、抜き捨てられた稗のやうに、いとしい人の心にかなはなかつた自分が、晩に獨り寢ることだ。

4677 此山の麥門冬は、評判通りの立派なものだ。それを伏せて

君し結ばゞ、會はざらめやも

2478 秋柏潤和川邊の小竹叢の、人には逢はぬ君にたへなく

2479 さね蔓後も逢はむと、夢にのみ誓ひ渡りて、年は經にけり

2480 道の邊の樴の花の、いちじろく、人皆知りぬ。我が戀ひ妻は

2481 大野らのたづきも知らに、標結ひてありかてましゞ。我が戀ふらくは

2482 水底に生ふる玉藻の、うち靡き心を寄せて戀ふる。此頃

2483 敷栲の衣手かれて、玉藻なす靡きか寢らむ。吾を待ちかねて

2484 君來ずば、かたみにせむと、我が二人植ゑし松の木。君を待ち出でね

結んでおくやうに、あの方が私を、自分の物とおきめになつたならば、逢はずに居ませうか。

2478 潤和川の川べりに生えて居る、篠竹ではないが、さつぱりと會うてくれない、人のことを思うて居ると、たまらない。

2479 今は會へないでも、將來必逢ひたいものだ、と思ひながら、せめて夢だけでは會はせて下さい、と神に祈り續けて、年月はたつたことだ。

2480 道傍に咲く、樴の花ではないが、著く目立つて、私の焦れて居る戀ひ人を、人が悟つたことだ。

2481 大きい野原の、方角もつかぬやうな廣い所に、標をつけてゐるやうな、取りとめのない思ひに、焦れて居る私の戀ひを思へば、堪へられないことだ。

2482 水の底に生えて居る藻ではないが、そちらの方へ心が向いて、片寄つて、幾月以來焦れて居ることだ。

2483 自分と袂を分つて別れてから、いとしい人は、自分を待ちかねて、玉藻の樣に、なよ〳〵として、寢て居ることだらう。

2484 若しあのお方が、歸つて來られぬやうになつたら、身代りに眺めてをらうと思ひ乍ら、あの方と二人で、自分が植ゑた松の木よ。名も松といふからは、戀しい方を待ち屆けて呼び出してくれ。

2485 袖振るが見ゆべき限り、我はあれど、その松が枝に隱りたりけり

2486 茅渟海の濱邊の小松、根深めて、我が戀ひ渡る。人の子故に

2487 奈良山の小松の末の、うれむぞは、我が思ふ妹にあはずやみなむ

2488 石の上にもとほる樫の、心いたく、何に深めて思ひそめけむ

2489 橘の下に我立ち、下枝とり、なりぬや。君と、問ひし子等はも

2490 天雲に羽うちつけて飛ぶ鶴の、たづたづしかも。君しまさねば

2491 妹に戀ひ、いねぬ朝明に、鴛鴦鳥の此從飛び渡る。妹が使ひか

2492 思ふにし餘りにしかば、鳰鳥の足濡

2485 私があなたを呼んで振つて居る袖が、見えるだけの所にをりますのですが、その松の木が、邪魔をして枝に隱れて、見えないのでせう。（此は、前の歌と、問答歌である。）

2486 茅渟の海の海岸に、生えて居る小松ではないが、根深く心の奥から、私は焦れ續けて居るその人も、思へば他人であるのに、その人の爲に。

2487 奈良山に生えて居る、小松のうれ（卽、梢）ではないが、うれむぞ（どうして）、心に思うて居るいとしい人に、會はないで思ひとまらうか。

2488 石の上に、ぐる〳〵と根を這はしてゐる、樫の木ではないが、こんなに迄、深く心を痛めて、考へにしみついて居ることだらうか。

2489 橘の木の下に自分は立つて、下枝をとつて、手に持ちながら、さあ、此枝に實がなつて居るやうに、お前さんと私との間柄も、なり立つでせうか、と問ひかけて見たいとしい人は、どうして居ることだらう。

2490 雲に密接して、羽をうち乍ら飛ぶ鶴ではないが、（たづ〳〵しく）いとしいことだ。あなたがお越し下さらないので。

2491 いとしい人に焦れて、眠られなかつた明け方に、鴛鴦が、自分の家の邊をば、ずつと飛んで行く。これは、いとしい人の使ひであらうか。

2492 自分の心に思ひ餘つて、辛抱し切れなくなつたので、鳰の

し來しを、人見けむかも

2493 高山の峯行く鹿の友多み、袖振らず來ぬ。忘ると思ふな

＊

2494 大舟に眞楫繁貫き漕ぐ程に、甚戀しも。年にあらば、如何に

2495 垂乳根の母が養ふ蠶の繭籠り、隱れる妹を見むよしもがも

＊

2496 肥人の額髮結へる染木綿の、染めし心は、我忘れめや

2497 隼人の名に負ふ夜聲、いちじろく、君が名告らせ。夫と頼まむ

2498 劍大刀兩刃の鋭きに、足蹈みて、死にも死になむ。君によりてば

やうに、足を濡して、川を渡つて來たのであるが、人が見つけたゞらうか。

2493 あの時、あなたが入らつしやつたのは知つて居ますが、高い山の峯を通つて行く鹿が、伴を澤山つれて居るやうに、伴が多かつたので、見咎められてはと思うて、合圖の袖振ることもしないで、やつて參りました。決して、忘れて居るとは思うて下さるな。

2494 海路の旅へ出るとて、大きな舟に櫂を澤山插して漕いで行く中にも、非常に戀しくて爲方がない。此が若しも、一年逢へなかつたらどうしよう。

2495 お母さんが餌をやつて、育てゝ入らつしやる蠶が、繭の中に籠つて居るやうに、家に籠つて、少しも顏を見せないいとしい人を、見る手段もないか知らん。（序歌の母が、單に蠶許りに留らず、自然に、母の懷子である、といふ心地を表して居るのが、面白い。佳作。）

2496 肥の國にをる土人の、額の髮を結んで居る、染めた布ではないが、深く浸みこんだ心持ちをば、私が落しはしようか。

2497 薩摩隼人の評判通りの、御所の御門で、夜犬吠えの聲を出して、宮中を警戒して居る、そのやうに、はつきりと、あなたの名を仰つしやい。さすれば、私の夫と信頼しよう。

2498 刀の兩刃のついた、鋭い刃の上を蹈んで、死ぬことも厭はずにしよう。戀しい人の言ひつけならば。

2499 吾妹子に戀ひし渡れば、劍大刀名の惜しけくも、思ほえぬかも

2500 朝鏡向ふ黃楊櫛古りぬれど、何しか、君が見るに、飽かざらむ

2501 里遠み、うらぶれにけり。まそ鏡床の邊さらず、夢に見えこそ

2502 まそ鏡手にとり持ちて、朝な〳〵見れども、君は飽くこともなし

2503 夕されば、床の邊さらぬ黃楊枕、何しか、汝が主待ち難き

2504 解き衣の戀ひ亂りつゝ、浮き草のうきても、我は戀ひ渡るかも

2505 梓弓引きて緩さず、あらませば、かかる戀ひには遇はざらましを

2506 言靈の八十の衢に夕占とふ。占、ま

2499 いとしい人に焦れ續けて居るので、自分の評判がどうならうと、名譽を惜しうも思はないことだ。

2500 二人かういふ關係になつてから、古くなつて居るが、其にどうして、あの方は幾ら見ても、見飽きがしないのだらう。

2501 いとしい人の住んで居る里の遠さに、逢はれないで、自分は、しよんぼりと衰へて居る。どうぞ夢にでも、寢床の邊に始終會ひに來てくれ。

2502 鏡を手にとり上げて見る樣に、毎朝、あの方を見て居乍ら、十分だと滿足して、見たことがない。

2503 日の暮れになると、寢床の邊を離れないで、竝べて置く黃楊の枕よ。どうして、お前を枕としなさるお前の主なるあの人を、待ちをふせることが出來ないのであらう。

2504 ほどいた著物のやうに、心亂れて焦れつゝ、その上、心は定らず動搖し乍ら、自分は、焦れ續けて居る。

2505 梓弓を引くやうに、心を引き締めて緩めないで居たら、人を思ふといふやうなこともなく、こんな戀ひに、出くはす氣遣ひもなかつたのだ。油斷して居たから、こんなことになつたのだ。

2506 四通八達の辻に出て、行人の詞に潛んだ、不思議な力をば、

さに告れ。妹に逢はむよし

*

2507 玉桙の道行き占に占へば、妹に會はむと、我に告りつる

○問答

2508 皇祖の神の御門を畏みと、侍ふ時に逢へる君かも

2509 まそ鏡見ともいはめや。玉かぎる岩垣淵の隱りたる妹（右二首）

2510 赤駒の足掻速けば、雲居にも隱れ行かむぞ。袖振れ。吾妹

2511 隱國の豊泊瀬路は、常滑のかしこき路ぞ。戀ふらくは、ゆめ

2512 美酒の神籬の山に立つ月の、見が欲し君が馬の、足音ぞする（右三首）

夕占によつて、自分は問はうと思ふ。どうぞ、占ひが實際通り、どうか託宣を下して下さい。いとしい人に會へるということを。（あへるかあへないか、判斷する占ひを、更にあへるやうに、告げてくれというたのが、眞情だ。）

2507 往來の人の言で、占ふ辻占によつて、占うて見た所が、いとしい人に會へよう、と私にお告げがあつた。

2508 御先祖代々の神樣をお祀りしてある、宮の畏れ多さに愼んで、お附き添ひ申してゐた時に、出會うて契り交した、お方であることよ。（此は、齋宮或は、賢所などに仕へて居られる、高貴の女性の歌と思はれる。）

2509 その宮にお祀りしてある、眞澄の鏡ではないが、どんなことがあつても、會うたことがあると言はうか。心中に深くこめて、思うてゐるいとしい人を。

2510 自分の乘つて居る赤駒の足どりが速いから、今の間に、遥かに遠く見えない空と、地の果て迄も隱れて行くであらう。袖を振つて居てくれ。いとしい人よ。

2511 泊瀨へ通ふ道は、何時もすべ〳〵した危い道であります。焦れて會ふ爲に、此道を來るといふことは、決してなさいますな。

2512 神籬山に出る月のやうに、見たく思ふ御方の、馬の足音が聞えて來る。

2513 ○ 鳴神の光りとよみてさし曇り、雨さへ降れや。君は留らむ

2514 鳴神の光りとよみて降らずとも、我は止らむ。妹し止めてば（右二首）

2515 ○ 敷栲の枕とよみて、夜をも寢ず思ふ人には、後も會ふもの

2516 敷妙の枕は、人に言とへや、その枕には苔生しにたり（右二首）

右、百四十九首、人麻呂集に見えて居る。

2517 □正しく心緒を述べた歌

垂乳根の母に障らば、徒らに、汝も、我も、事なすべしや

2513 雷が光つて、邊を動すやうな響きがして、雨迄が降つてくれたら好い。さうすれば、いとしいお方は、おとまり下さらう。

2514 そんなに雷が、騷しく鳴つたり、光つたりせなくても、いとしいお前が、止めてくれさへすれば、止らうに。

2515 夜も寢入らずにゐる此枕が、こんなに音がするのは、焦れて居る人に、將來會へる證據だ。

2516 お前の方の枕は、お前にものを言ひかけたかも知れません。其枕は古い枕で、苔が生えてゐる位だから。（女が枕に寄せて、怨み言を述べたに對して、男は、只枕のことを噂するやうに詠んだのである。）

2517 お母さんに邪魔をせられたならば、二人の間も、無駄なものとなつて了うて、お前さんと私の間のことも、續けて行くことは出來まい。

2518 吾妹子が我を送ると、白栲の袖漬づ
迄に泣きし、思ほゆ

2519 奥山の眞木の板戸を押し開き、しゐ
や、出で來ね。後は何せむ

2520 苅り薦の一重を敷きてさ寢れども、
君とし寢れば、寒けくもなし

2521 杜若匂へる君を、いさゝめに思ひ出
でつゝ、嘆きつるかも

2522 怨みむと思ひて、夫なはありしかば、
外にのみ見し。心は思へど

2523 さにづらふ色には出でず、尠くも、
心の中に我が思はなくに

2524 我が夫子に直接に會はゞこそ、名は
立ため。言の通ふに、なぞ、そこ故に

2518 いとしい人が、自分を送り出すとて、白栲の衣の袖が、ぼとぼとになる程、泣いたことが思はれる。

2519 奥山の檜の板で拵へた戸を、押し開いて出て來て、開けて下さい。あゝ今、門に私が來て待つてゐる、この好い時を外しては、後になつて、役に立たんではありませんか。

2520 只一重の蓆を敷いて、寢ては居るのだが、いとしい方と寢てゐるから、冷いとも思はない。

2521 美しいお方を、どうかすれば、一寸した間にも、不圖思ひ出して、溜め息つくことである。

2522 今度會うたら怨みを言はうと、いとしい方をば、恨んで思うて居たので、心には、戀しく思ひながら、會うた時には、知らぬ顏に見過したことだ。

2523 竝みや大抵には、心の中に思うて居るのではありませんが、顏色には表さないのです。

2524 いとしい方に、直接に出會うたなら、名が立つのも、評判になるのも、當り前だ。併し、音信を通はすことに依つて、評判が立たうとは思はなかつたが、何故そんなことの爲に、評判が立つたのであらうか。

2525 懇ろに片思ひすれか、此頃の我が心
どの、生けりともなき

2526 待つらむに至らば、妹が嬉しみと、
笑まむ姿を行きて早見む

2527 誰ぞ、この我が宿に來呼ぶ。たらち
ねの母にころばえ、物思ふ我を

2528 さ寢ぬ夜は、千夜もありとも、吾が
夫子が思ひ悔ゆべき心は持たじ

2529 家人は道もしみゝに通へども、我が
待つ妹の使ひ來ぬかも

2530 麤玉の岐部が竹垣、編み間ゆも、妹
し見えなば、我が戀ひめやも

2531 我が夫子がその名告らじと、たまき
はる命は捨てつ。忘れ給ふな

2532 おほならば誰が見むとかも、ぬばた

2525 しみ〴〵と物思ひをする爲か、今日此頃の自分の心持ちが、生きて居るやうにも思はれない。

2526 待つて居るだらう頃に、向うへ行き著いたら、いとしい人は、嬉しいことだと嫣乎するだらう。その姿を出掛けて行つて、早く見たいものだ。

2527 自分の屋敷の表へ來て、我が名を呼ぶ人がある。それは誰方か。（此は、その男を知り乍ら、故意とさう言うたのである。）母さんに誰々と逢うてはいけない、と叱られて物思ひをして居るわたしを、呼び立てに來るのは、誰樣です。

2528 一つに寢ない晩は、幾晩と重つても、あなたが殘念がられるやうな、薄情な心は起しますものか。安心して下さい。

2529 家にをる人達の道をば、しげ〴〵と、數々往來して居るけれども、それはどうでも好い。自分の待つてゐるいとしい人の使ひが、早く來れば好いが。

2530 麤玉郡の岐部の里の家々の、門に編んだ竹垣の編み目からでも、いとしい人が顏を見せたら、それだけでも滿足して、こんなに焦れはしようか。

2531 あなたの其名前をば、人にはいふまいと思うて、命は捨ててかゝつて居ます。どうぞ、私の心持ちを忘れて下さるな。

2532 竝み大抵な思ひなら、誰が見てくれる、といふ心積りで、

まの我が黒髪を靡けて居らむ

2533 面忘れ、如何なる人のするものぞ。
我はしかねつ。續ぎてし思へば

2534 あひ思はぬ人の故にか、あらたまの
年の緒長く、我が戀ひ居らむ

2535 おほかたのわざとは思はず、我が故
に、人にこちたく言はれしものを

2536 息の緒に妹をし思へば、年月の行く
らむ判別も思ほえぬかも

2537 たらちねの母に知らえず、我が持て
る心は、よしゑ、君がまに〳〵

2538 獨り寢と、薦朽ちめやも。綾席緒に
なる迄に、君をし待たむ

2539 あひ見ては千年やいぬる。否諾かも、
我か然思ふ。君待ちかてに

此髪を解いて、ばら〳〵にしてをりませうか。あなたに見せたい許りであります。

2533 よく、餘り思ひこんで居ると、ふと顔を忘れるといふが、それは、どんな人がするのであらうか。自分は、續け樣に思うてゐるので、面忘れすることもない。

2534 思ひ合うても居ない、片思ひの戀ひ人であるのに、その人の爲に、年來長く、自分が焦れて居らねばならんのか。

2535 お前の心は、竝み大抵のことゝは輕くは思はない。自分の爲に、うるさく評判せられた身だから。

2536 命懸けで、いとしい人を思ひこんで居るので、年月の經つて行く別ちさへも、訣らないことだ。

2537 お母さんには悟られないで、自分が隱して持つてゐる心は、表れてもかまはない。只あなたのお心任せに、どうでもしませう。

2538 獨り寢た所で、疊の心の薦迄は、腐つて了はないだらうけれど、綾に織つた蓆が、蘭がなくなつて、緒許りになつて了ふ迄も、獨り待つてをらねばならんか。

2539 出會うて一晩居る間は、千年も過ぎ去つて了ふやうな心持ちがするが、さうだらうか。さうではなからう。實際はさうではなくて、私だけがさう思ふのだらう。いとしい方を待ちかねて居る爲に。

2540 振り分けの髪を短み、若草を髪に手
擧らむ、妹をしぞ思ふ

2541 たもとほり往き多武の里に、妹を置
きて、心空なり。土は蹈めども

2542 若草の新手枕を枕き初めて、夜をや
隔てむ。憎くあらなくに

2543 我が戀ひしことも語らひ、なぐさめ
む。君が使ひを待ちやかねてむ

2544 現には逢ふよしもなし。夢にだに間
なく見えこそ。戀ひに死ぬべし

2545 誰そ彼と、問はゞ答へむ術をなみ、
君が使ひを歸しつるかも

2546 不意に至らば、妹が嬉しみと笑まむ
眉引き、思ほゆるかも

2547 かく許り戀ひむものぞと思はねば、

2540 振り分けた髪が短いので、若草をば添へ毛として、取り擧げて居る所の、幼い戀ひ人が思はれる。

2541 多武の里に、いとしい人を殘して置いて來たので、土を蹈んで歩き乍ら、心は上の空になつて居る。

2542 初めて共に寢た人の手枕をし始めて、その後可愛いのに、幾晩も會はずにをることが出來ようか。

2543 いとしい方からも、自分に逢ひたいといふ知らせが來るだらう。それよりも先に、自分が焦れて居たことを話して、あの人の心を慰めようか。それとも、あの人の使ひの來るのを待つて居ようか。

2544 正氣では會ふ手段がない。せめて夢になりと、會ひに來て下さい。さうでなければ、焦れて死んで了ひませう。

2545 あれは誰だ、と人が見咎めて問うたら、答へる手段がないといふので、待ちに待つた使ひが來たのをば、知らない振りをして、歸して了うたことだ。

2546 此から思ひがけなくやつて行つたら、いとしい人が嬉しいことだ、と莞爾する顏の容子が、思はれることだ。

2547 こんなに迄會はれないで焦れる、とは思つて居なかつたの

妹が手もとを枕かぬ夜もありき

2548 かく迄も我は戀ひなむ。玉づさの君が使ひを、待ちやかねてむ

2549 妹に戀ひ我が泣く涙、敷栲の枕とほりて、袖さへ濡れぬ

2550 立ちて思ひ、坐てもぞ思ふ。紅の赤裳裾曳きいにし姿を

2551 思ふにし餘りにしかば、術をなみ、出でゝぞ行きし。其門を見に

2552 心には、千重にしく〳〵思へども、使ひをやらむすべの知らなく

2553 夢のみに見てすら、甚戀ふる吾は、現に見てば、まして如何にあらむ

2554 あひ見れば、面隱さるゝものからに、つぎて見まくの欲しき君かも

で、會うて居る時分には、戀しい人の手をさへ、枕として寢ない晩もあつたことだ。

2548 こんなに迄、自分は焦れて居ねばならんのか。いとしいお方の使ひを、待ちかねてをらねばならんのか。

2549 戀しい人に焦れて、自分の泣いて居る涙が、餘り甚いので、枕さへ濡れ通つて、袖さへも、ぼと〳〵になつた。

2550 何事をするにつけても、思ひ出される。あのいとしい人が、赤い下袴の裾を曳いて、歸つて行つた姿が。

2551 思うて堪へて居ることが出來なくて、やる瀬なさに、せめては其門だけでも見よう、と思うて出かけて行つたことだ。

2552 心には幾重にも〳〵間斷なしに思うて居るのだが、使ひをやりたいにも、やる手段が訣らないことだ。

2553 夢に見て居る許りでも、こんなに甚く焦れて居る自分が、若し正氣で居る間に會うたならば、どんなに焦れるだらう。

2554 實際會うて見ると、恥しくて、自然と顏を隱したくなつて來るのに、それに、續け樣に見たい、と思ふ戀しいお方よ。

2555 朝戸を遣り早くな開けそ。あぢさはふ見が欲し君が、今宵來ませる

2556 玉簾の小簾の垂簾をもちかゝげ、寢は寢さずとも、君は通はせ

2557 たらちねの母に申さば、君も吾も、會ふとはなしに、年ぞ經ぬべき

2558 愛はしと思へりけらし。忘るなと、結びし紐の、解くらく思へば

*

2559 昨日見て今日こそ間。吾妹子が多く續ぎて見まく欲しきも

2560 人もなき古りにし里にある人を、愛くや、君が戀ひに死なせむ

2561 人言の繁き間洩りて、會へりとも、八重に我が上に言の繁けむ

2555 夜が明けても、朝戸を早く繰らないやうに、注意してくれ。幾ら見ても見飽かぬ君が、今夜、お出でになつたのだから。

2556 自分の寢屋にかけた、玉を貫き交へた簾の、垂した簾を持ち上げて這入つて來て、譬ひ寢ることはせなくても、通ふことは是非して下さい。

2557 あなたは、お母さんに話して、二人の間をば明ら樣に承認を得ようと仰つしやるが、若しお母さんに言うて御覽なさい。あなたと私とは、逢ふといふことなしに、何時迄も居なければならんでせう。

2558 人が自分のことを思うて居る時には、下袴の紐が解けるといふが、今紐の解けたのを考へると、今あの人が自分のことを忘れな、というて結んだ紐が解けたのを見ると、きつと自分をいとしいと思うてゐるに違ひない。

2559 昨日出會うて、今日は間日である。どうか、續け樣にあひたいことだ。

2560 あの人は、こんなに、人も住まなくなつた寂れた里に、住んで居るのだが、可愛くも自分に焦れる爲に、死にはせられないか知らん。

2561 人の噂のうるさいその隙き間を考へて、會うても何れ見つけられて、幾重にも〳〵自分の上に、評判がうるさくかゝることだらう。

2562 坊人のことあげする妻を、荒垣の外（ヨソ）には我が見む。憎からなくに

2563 人目守（モ）る君がまに〳〵、我さへに夙（ハヤ）く起きつゝ、裳の裾濡れぬ

2564 ぬば玉の妹が黒髪。今宵もか、我なき床に靡きて寝（ヌ）らむ

2565 花匂（グハ）し、蘆垣越しに只一目あひ見し子故、千重に嘆きつ

2566 色に出でゝ戀ひば、人見て知りぬべみ、心の中の隠（コモ）り妻はも

2567 あひ見てば、戀ひ慰むと、人は言へど、見て後にぞも戀ひまさりける

2568 大方に吾し思はゞ、かく許りかたき御門（ミカド）を、退（マカ）り出でめやも

2569 思ふらむ其人なれや、ぬば玉の夜毎

2562 近邊の人が、彼此と自分に云ひ寄せて、噂をするいとしい人を、單に噂だけとして、知らない顔で通らうか。可愛ゆく思うてゐるのに。

2563 人の知らない間を窺うて、歸るあの方の通りにして、自分迄が、早く寢間を出て、送り〳〵して露の爲に、下袴の裾がいつも濡れてることだ。

2564 いとしい人の眞黒な髪が、今夜自分の居ない獨り寢の寢床に、いとしい人の體が、なよ〳〵して居るのと、同じやうに、絡み合うて寢ることだらう。

2565 蘆垣をしてある家に住んで居る、花のやうに美しい、只一目見たゞけの人であるのに、その爲に、繰り返し〳〵、ため息をつくことだ。

2566 色に出して焦れたならば、人が知りさうなので、心の中に隱して居る、戀しい人よ。

2567 會うて見たら、少しは焦れる心が、のんびりすると人はいふが、會うた後に、自分の方は焦れる心が、激しくなつたのである。

2568 好い加減に思うて居る位なことなら、こんなに出難い御所の御門を退出して、お前さんに會ひに來ようか。（此は、宮中に宿直して居る人の、作つたものと見える。）

2569 此頃毎晩、あの方が夢に會ひに入らつしやる。自分を思つて居る人でありさうもないのに、そして益、自分の心を苦

に、君が夢にし見ゆる

2570 かくしのみ戀ひば死ぬべみ、たらちねの母にも告げず、止（ヤ）まず通はせ

2571 健男（マスラヲ）は、ともの騒ぎに慰むる心もあらむを。我ぞ苦しき

2572 欺（イツハリ）も似つきてぞする。何時よりか、見ぬ人戀ひに、人の死にせし

＊

2573 心さへ奉（マダ）せる君に、何しかも、言はぬを言ひしと、我が盜まはむ

＊

＊

2574 面（オモ）忘れだにもえすやと、手握（タ）りて打てどさはらず。戀ひの奴は

＊

しめられることだ。

2570 こんな風に許り焦れて居たら、死にさうに思はれるから、どうぞ、お母さんにも告げないで、私の方へ通うて下さい。（此は、男から女に與へたもの。）

2571 立派な男の方といふものは、仲間の交際の騒しさに紛れて、心の安まる氣分のする時もあらうに、女は、さうは行かぬから、術ないものだ。

2572 あなたの仰つしやることは嘘だ。併しその嘘もほんとうらしう言はれる。昔から何時どんな人が、逢はれない人に焦れて死んだ、といふことがありますか。嘘を仰つしやい。（此は、前の歌と、問答歌らしい。）

2573 私は私の心迄も、差し上げて居ますあなたに、どうしてあなたが、言ひもなさらないことを仰つしやつた、と好い加減な、ごまかしを致しませうか。（言はぬを言ひしとは、男が女に約束したのを、後に男が、それは嘘だというたのに對して、あなたは仰つしやつたに違ひありません。どうして、あなたの言を盜むやうなことをしようか、と答へたのである。）

2574 こんなに思ふのは、此憎い戀ひといふ野郎の爲業だ。せめて懲しめに毆つてやれば、顔だけでも忘れるだらう、と握り拳で毆つても、そんなこと位では妨げられずに、どしどし詰めかけて來ることだ。戀ひといふ野郎は。

2575 めづらしき人を見むとぞ、左手の弓
取る方の、眉根掻きつれ
2576 人間(ヒトマ)洩り、蘆垣越しに吾妹子をあひ
見しからに、言ぞ、さね多き
2577 今だにも面(メ)な乏しめそ。あひ見ずて
戀ひむ年月久しけまくに

*

2578 朝寢髮我は梳(ケヅ)らじ。愛(ウツク)しき君が手枕
觸りてしものを
2579 夙(ト)く行きて、いつしか君をあひ見む
と、思ひし心今ぞなぎぬる
2580 面形(オモカタ)の忘るとならば、あぢきなく男
じものや、戀ひつゝをらむ
2581 言にいへば耳にた易し。尠くも、心
の中に我が思はなくに

2575 久しく會へなかつた、あの方に會へるか、と思ふ。弓持つ方の手、卽左手の方の眉の根が、痒くなつて掻いたから。
2576 人の、心を許して居る間を窺うて、蘆垣を隔てゝいとしい人を見た、と言ふだけだのに、その爲に人の評判が、實際うるさい程、ひどく立つた。
2577 やつと此頃、屢、會ふことが出來るのだ。せめて今だけでも、稀々にしか、顏を見ることが出來ない、といふ風にはならないやうにありたいものだ。自分が遠くへ行つたら、此後會はないで、焦れて居る月日が、久しくあるであらうのに。
2578 朝寢床から起き出でた儘の髮を、私は何時迄も櫛の目入れずにおかう。あのいとしいお方の手枕が觸つた髮だのに、解いて了うては殘念だ。
2579 早く出掛けて行つて、どうか早くあの方に出會うて、顏を見ようと思うて居た心持ちも、かうして會うた今、穩やかに靜まつて來たことだ。
2580 あきらめようと思へば、顏の形も忘れて了ふことが出來る位なら、こんなにつまらなく、男たるものが焦れて居ようか。
2581 口に言うて見れば、何でもなく耳に聞えるが、併し心の中では、一寸やそつと、思うて居るのではない。深く思ひこんで居るのだ。

2582 あぢきなく、何のしれごと。今更に
童(ワラハ)ごとする。老い人にして
2583 あひ見ては、幾何(イクバク)にしもあらなくに、
年月の如、思ほゆるかも
2584 健男(マスラヲ)と思へる我を、かく許り戀せし
むるは、辛(カラ)くはありけり
2585 斯くしつゝ、我が待つ效(シルシ)あらぬかも。
世の人皆の常ならなくに
2586 人言の繁けき君に、玉梓(タマヅサ)の使ひはやら
ず。忘ると思ふな
2587 大原の古りにし里に、妹をおきて、
我はい眠(ネ)かねつ。夢に見えこそ
2588 夕されば、君來まさむと待ちし夜の
なごりぞ。今も寢ねかてにする
2589 あひ思はず君はあるらし。ぬば玉の

2582 自分があの人を思うてゐるのが、つまらない馬鹿なことだ。こんなに老人になつて居乍ら、今更改めて、子どものするやうな、戀ひなどをしようか。
2583 お會ひ申さなくなつてから、まだどれ程にもならないのに、もう歲月が、長く立つたやうに思はれる。
2584 立派な男だと思うて居る自分を、こんなに迄焦れさゝうといふのは、むごい爲方だこと。
2585 かうして辛抱して、待つて居るかひがあつてくれゝば好いが、世間の人凡てが、始終變らずにをる、といふ訣でないから、あの人の心も、變りはすまいか。
2586 人の評判が、かれこれとうるさいあなたの所へ、又使ひをやれば、評判になると思うて、やらずにをるのです。忘れて居ると思うて下さるな。
2587 寂れ果てた大原の里に、いとしい人を殘して來たので、自分は眠るにも眠られないでゐる。せめて、夢に見えてくれ。
（此は、藤原宮に移つて後の歌だ。）
2588 もう逢はれない、といふことは訣つて居るのだが、それでも、夜は眠ることが出來ない。これは日暮れになると、何時もあの方が、お出でになると待つて居た、その影響で、今でも眠つかれないのだ。
2589 私が思ふやうに、あの方は思うて居て下さらないに違ひな

夢にも見えず。うけひて寢(メ)れど

2590 岩根蹈む夜道は行かじと思へれど、
妹によりてば、忍(シヌ)びかねつも

2591 人言の繁き間(マ)洩ると、會はずあらば、
終には子等が面忘れなむ

2592 戀ひ死なむ後は何せむ。吾命(ワギノチ)の生ける日にこそ、見まく欲りすれ

2593 敷栲の枕動(トヨ)みてい寢(ネ)らえず、物思(モ)ふ今宵、早も明けぬかも

2594 行かぬ吾(ワ)を來むとか、夜も門さゝず、
あはれ、吾妹子待ちつゝあらむ

2595 夢にだになどかも見えぬ。見ゆれども吾かも惑ふ。戀ひの繁きに

2596 慰もる心はなしに、かくしのみ戀ひや渡らむ。月に日(ヒ)に日(ケ)に

い。夢になりと見せてくれと祈つて寢ても、夢にさへ會うて下さらない。

2590 岩の上を通つて行く夜道を歩いて行くまい、と思ひ乍ら、いとしい人の爲には、辛抱し切れなくなることだ。

2591 人の評判のうるさい其隙き間を待たう、と會はないでをつたら、その間にとう〳〵、いとしい人が、自分の顏を忘れて了ふかも知れない。

2592 死んで了うた後では、何の役に立たうか。自分の命が存して居る間にこそ、會ひたく思ふのだ。(遺憾なく單純化が出來て、強烈な熱情が表れてゐる。傑作。)

2593 逢はれないで、寢て居るのに、枕は音を立てゝ鳴つて居る。それは、會へるといふ知らせなのである。それで心が迷うて、眠られない。今晩は早う、夜が明ければ好い。

2594 行くことの出來ない自分を、來るだらうと思うて、可愛やいとしい人は、門も閉(シ)めずに、待つて居るであらう。

2595 何故夢にさへ姿を現さないのだらう。それとも、餘り甚く焦れて居る爲に、私の目がちら〳〵して、その姿が見えないのか知らん。

2596 靜まつた心持ちも無く、月日を經る毎に、彌(イヨ)、深く、こんなに焦れ續けねばならんのか。

2597 如何にして忘るゝものぞ。吾妹子に
戀ひはまされど、忘らえなくに

2598 遠かれど君をぞ戀ふる。玉桙の坊(ホト)人皆に、吾戀ひめやも

2599 效(シルシ)なき戀ひをもするか。夕されば、
人の手枕(マ)きて寢なむ子ゆゑに

2600 百代しも千代しも生きてあらめやも。我が思ふ妹をおきて嘆かむ

2601 現にも、夢にも吾は思(モ)はざりき。古りたる人に玆に會はむとは

2602 黒髪の白髪迄と、結びてし心一つを、
今解かめやも

2603 心をし君に奉(マヅ)すと思へれば、よし、
此頃は戀ひつゝをあらむ

2604 思ひ出でゝ哭(ネ)には泣くとも、著(イチジロ)く人

2597 どうしたら、忘れられるであらうか。いとしい人に焦れる心は、募つて行くが、忘れるといふことはない。

2598 戀ひに遠近の區別はない。それで遠いけれども、自分はあの人に焦れて居る。幾ら近くても、近いあたりの、近所の人達のどれにも、自分が焦れようか。

2599 あれは人妻だ。それに自分は、かひのないことに焦れて居る。日暮れになると、他人の手を枕として寢る人であるのに、その人の爲に、焦れて居る。馬鹿なことだ。(情熱を包藏して、曲折のある表現をしてゐる。傑作。)

2600 人間は、千年も萬年も生きて居る筈はない。それに、自分の焦れて居る人に會ひもしないで、其儘にさし置いて、嘆息(イキ)をついて、辛抱して居るべきであらう。

2601 正氣には固より、夢にさへ思ひがけなんだことだ。今になつて、古く別れたお前さんに、再捺りを戻して、又會ふことにならうとは。

2602 黒髪が白くなる迄變るまい、と誓ひをかけた私の此心一つをば、どうして今になつて、反古にしませうか。

2603 自分の心をば、すつかりいとしい人に差し上げた、と自分は思ひこんで居るのだから、譬ひ逢へないでも、不足には思はないで、會へる時迄、待つてをらう。

2604 思ひ出して聲を出して、泣くことは泣いても、目立つて、

の知るべく、嘆きすな。ゆめ

2605 玉桙の道行きぶりに、思はぬに、妹をあひ見て戀ふる頃かも

2606 人目多み、常かくのみし候(サモラ)はゞ、何れの時か、我が戀ひざらむ

2607 敷栲の衣手離(カ)れて、吾(ア)を待つとあるらむ子等は、面影に見ゆ

2608 妹が袖別れし日より、白栲の衣片敷き、戀ひつゝぞ寢る

2609 白栲の袖はまよひぬ。吾妹子が家のあたりを、息(ヤ)まず振りしに

2610 ぬば玉の我が黒髪を引きぬらし、亂りかへりて、戀ひ渡るかも

2611 今更に君が枕を枕(マ)き寢めや。我が紐の緒の解けつゝ。もとな

嘆息(タメ)などは、決してせないやうにしてくれ。

2605 道を歩く出會ひがしらに、思ひがけなく、いとしい人に會うて見て、幾日以來焦れて居ることだ。

2606 人目が多いので、何時もこんな風に、その隙き間を窺うて待つて居たら、何時になつたら、出會ふことが出來て、焦れないやうになるんだらう。

2607 此頃は離れて會はないので、自分を待ちに待つとて、いとしい人が焦れてをるだらう。それが幻に見える。

2608 いとしい人と袖を分つて來た日から、自分の著物を敷いて許り寢て、焦れ通しに、焦れて居ることだ。

2609 白栲で拵へた自分の著物が、此頃は綻(ホツ)れて來た。いとしい人の家の邊へ向けて、始終振つて居た爲に。

2610 自分の黒々とした髪を、ぬる〳〵ともどける儘にしておいたのと同樣に、自分の心が非常に亂れて、焦れ續けて居ることだ。

2611 今となつては、改めて、あのいとしい方の手枕を枕として、寢ることが出來ようか。出來ないのにきまつて居るのに、自分の下袴の紐が、思ひやりなく解けることだ。

2612 白栲の袖觸りてより、吾が夫子に我が戀ふらくは、止む時もなし

2613 夕占(ケ)にも占(ウラ)にも宣(ノ)れる今宵だに、來まさぬ君を、何時とか待たむ

2614 眉根掻き、したいぶかしみ思へるに、古人(イニシヘ)をあひ見つるかも

右の歌、異本には、「眉根掻き、誰をか見むと思ひつゝ、け長く戀ひし。妹にあへるかも」とある。

2615 敷栲の枕を枕(マ)きて、妹と吾が寢る夜はなくて、年ぞ經にける

2616 奥山の眞木の板戸を音激(ヤ)み、妹があたりの霜の上に寢ぬ

2617 足引きの山櫻戸を開けおきて、我が待つ君を、誰かとゞむる

2612 白妙の著物の袖を觸れ合うてからといふものは、自分のあの人に焦れる心は、息む間もないことだ。

2613 辻占に問うて見ても、今夜會へると出、占ひにもさうお告げがあつた、その今夜さへも、逢ひに來てくれない人を、何時來て下さる、と待つて居ようか。

2614 世間でいふやうに、眉根が痒くなつて、人にあふやうな氣持ちがしたので、眉根掻き乍ら、あやふやに心の底で、逢はぬのを思ひ煩うて、心ならず暮して居た所が、果して、昔心ならず別れた人に、會ふことが出來た。嬉しいことだ。(此迄、眉の根が痒くなるので、此は誰に逢ふ兆(キザシ)だらう、と思ひ〳〵して、長い間待つてゐた、其は、このいとしい人に逢ふことであつたのだ。)

2615 互ひに枕を交して、いとしい人と寢ることもなくて、もう、歳月が經つたことだ。

2616 奥山の松で拵へた板戸が、烈しい音を立てるので、遠慮して待つて、いとしい人の家あたりの、霜の降る地上で寢たことだ。

2617 あなたはそんなにいはれますが、山櫻の扉を開け放して、待つて居るあなたを、誰が邪魔をしますものですか。(此二首は、問答歌である。)

2618 月夜よみ、妹に逢はむと、捷徑（タツチ）から
我は來つれど、夜ぞ更けにける
□物に寄せて思ひを陳べた歌

2619 朝陰に我が身はなりぬ。唐衣（カラ）襴（スソ）の合
はずて、久しくなれば

2620 解衣（トキギヌ）の思ひ亂りて、戀ふれども、な
ぞ誰が爲と、問ふ人もなし

2621 摺衣（スリゴロモ）著ると夢見つ。現には、何れの
人の言か繁けむ

＊

2622 志珂の海人の鹽燒衣。なるといへど、
戀ひとふものは、忘れかねつも

2623 紅のやしほの衣。朝な〳〵、なると
はすれど、彌（イヤ）めづらしも

2618 いとしい人に會はう、と餘り月が好いので、近道からやつ
て來たのだが、夜が更けて了うたことだ。（此は、來ること
の遲かつたのを恨んだ、女に與へたもの、と見れば好い。）

2619 唐衣の裾ではないが、會はないで長くなつた爲に、朝の日
に映る影のやうに、しよんぼりと瘦せ細つたことだ。

2620 解いた著物ではないが、心亂れて思ひ焦れて居るけれど、
あなたは何故か、誰の爲に、そんなに焦れて居るんだ、と
慰めてくれる人もありません。

2621 あなたが、摺衣を著て逢ひに來て下さつた、と今私が夢に
見ました。目が覺めて考へれば、其人と評判がやかましい。
誰についてうるさく立つて居るのか、お考へ下さい。（此は
男の許へ、起きてはあなたとの評判をせられる。寢るとあ
なたを夢に見る。併しあなたは、相變らずつれない。その
私と、評判を立てられて居るのは、誰だらう、と女の拗ね
た言。）

2622 志珂の浦の海人の鹽を燒く衣ではないが、もう焦れなれた
といふものゝ、忘れられぬ。

2623 紅の色の深い著物ではないが、朝々毎に出會うて、段々慣
れて行くと言ふものゝ、何とも思はなくなるか、といふと
さうでなく、益あの人が可愛く、目立つて來ることだ。

2624 紅の濃（コ）染めの衣。心深く染（シ）みにしか
ばと、忘れかねつる

2625 逢はなくに、夕占（ケ）を問ふと、幣（ヌサ）に置
く我が衣手は、又ぞつぐべき

2626 古衣捨（ウツ）てし人は、秋風の立ち來る時
に、物思ふものぞ

2627 はね蘰今爲（ス）る妹がうら若み、笑みゝ、
怒りみ、つけし紐解く

2628 古の倭文（シヅ）上布帶を結び垂る、誰とふ
人も、君には優（マ）さじ

2629 會はずとも、我は怨みじ。此枕吾と
思ひて、枕（マ）きてさ寢ませ

2630 結べる紐解きし日遠み、敷栲の吾が
木（コ）枕に苔生ひにけり

2631 ぬば玉の黒髪敷きて、長き夜を手枕

2624 紅の色濃く染めた著物のやうに、深く心に浸みこんで思う
て居る爲に、どうしても、忘れられんことだ。

2625 あの人は逢ひに來てくれないので、辻占に伺ひを立てると
て、その供へ物として、据ゑ奉る自分の著物は、幾度して
も會へないから、又、供へついで行かねばならんか。（此
は、男を怨んで贈つた、と見るが好い。）

2626 古い著物を捨てるやうに、あなたがお捨てになつた人間
は、秋風の吹き出す時分になると、深く悲しみに沈むこと
でございます。

2627 今初めて媾會するいとしい人が、世馴れないで、或は笑う
て見たり、或は怒つて見たりしながら、はては、結んであ
つた紐を解いて、うちとけることだ。

2628 昔の倭文（シヅ）織りの美布の帶を結び垂してゐた、あの何とかい
ふ美人も、あなたには勝つことは出來ますまい。（此は、山
部赤人の歌にある、葛飾の眞間の手古奈を下に思はせたの
である。）

2629 譬ひ會ひに來て下さらずとも、お怨み申しますまい。此枕
をば私と思うて、枕にしてやすんで入らつしやいませ。

2630 此結んである紐は、それを解いた日が、ずつと古いことに
なつたので、私の木の枕に、苔が生える程になつて居る。

2631 いとしい人は、眞黒な髮を下に敷いて、此長い夜に、自分

の上に、妹待つらむか

2632 まそ鏡直接にし妹を逢ひ見ずば、吾が戀ひやまじ。年は經ぬとも

2633 まそ鏡手にとり持ちて、朝な〳〵見る時さへや、戀ひの繁けむ

2634 里遠み戀ひ佗びにけり。まそ鏡面影去らず、夢に見え來そ

2635 劍大刀身に佩き添ふる健男や、戀ひとふものを忍びかねてむ

2636 劍大刀兩刃の上に行き觸りて、殺せかも死なむ。戀ひつゝあらずは

2637 しはぶかひ鼻をぞひつる。劍大刀身に添ふ妹が、思ひけらしも

2638 梓弓陶の原野に鳥狩する、君が弓弦の絶えむと思へや

の手枕の上に頭を載せて、自分を待つて居るだらうか。

2632 手紙なんかで、遣り取りして居るのでは駄目だ。直接にいとしい人に逢はなければ、幾ら年月が立つても、やまることではない。

2633 鏡を手に取り上げて、朝毎に見る時でも、こんなに焦れる心が烈しいのは、一體どうしたのだらう。

2634 いとしい人の住んで居る里が遠いので、行くにも行かれず、焦れて悲觀許りして居る。せめてはその幻でも、始終夢に現れてくれ。

2635 刀をば身に添へてつけて居る立派な男が、戀ひといふことを辛抱しかねる筈があらうか。それに怎うしたことであらう。わたしとしたことが。

2636 こんなに焦れて居る位ならば、澤山の刀の刃の上を歩いて、刃にあたつて、殺されて死んだ方がましだ。

2637 偶然咳ばらひをして、嚏が出て來た。世間で、自分を思ふ人があれば、嚏をするといふが、此は身に引きつけて、大事にして居るいとしい人が、自分のことを思うて居るからだらう。

2638 陶の里の野原で、狩りをなさるあなたの弓の弦ではないが、二人の中を切つて了はう、とは思ひませうか。思ひませぬ。

2639 葛城の襲津彦眞弓、荒木にも、寄るとや、君が、我が名告りけむ

2640 梓弓引きみ、弛べみ、來ずば來ず、來ば來るを、など、來ずば來ばとふ

*

2641 時守りの打ち鳴す鼓、數み見れば、時にはなりぬ。會はなくもあやし

2642 燈の影にかゞよふ、うつそみの妹が笑ひし、面影に見ゆ

2643 玉桙の道行き疲れ、稻席敷きても、君を見むよしもがも

2644 小墾田の坂田の橋の崩れなば、桁より行かむ。な戀ひそ。吾妹

2645 宮木引く泉が杣に立つ民の、止む時もなく、戀ひ渡るかも

2639 葛城の襲津彦が弓に拵へた檀の木の、荒木のやうに、自分も君を頼りにして、妻となると思うてか、自分の名を、人に告げなさつたのであらう。

2640 あなたのなされ方は、まるで、弓を強く引きしめて見たり、又緩めて見たりするやうで、やつて來たり、やつて來なかつたりなさいます。一層來なければ來ない、來れば來る、とせねばならんのを、何故其樣になさるのですか。來なければどう、來ればどう、ときめれば好いのに、それに。

2641 時の鼓を打つ、番人が鳴す鼓を數へて見ると、もうあの人の來る、といふた刻限になつた。それに、逢ひに來ないのは妙だ。

2642 火の影で燿くやうに美しい、正身正銘のいとしい人が、莞爾として居た容子が、今幻に目についで來る。

2643 道を歩き疲れて、筵を敷いて休むやうに、と切れることなく續いて、いとしい方を見る方法があるまいか。

2644 小墾田の里の坂田の村に懸つて居る橋が、崩れたならば、自分は橋桁を通つて行かうから、心配して焦れることはない。いとしい人よ。

2645 宮殿を造營する木を曳き出す、泉の杣山に出掛けて行つて居る役民が、休む時もなく、急いで動いて居るやうに、自分もちつとの暇もなく、焦れ續けて居ることだ。

2646 住吉の津守網曳(アビ)きの泛子(ウケ)の緒の、うかれか行かむ。戀ひつゝあらずは

2647 横雲の空ゆ引きはへ、遠みこそ、めごと離(カ)るらめ。絶ゆと隔つや

2648 かにかくに物は思はず、飛驒人の打つ墨縄の、只一筋に

2649 足引きの山田守る老人(ヲヂ)、置く鹿火(カヒ)の下焦れのみ、我は戀ひをらく

2650 削(ソ)ぎ板もて葺(フ)ける板目のあはざらば、如何にせむとか、我が寢そめけむ

2651 難波人蘆火焚く屋の煤(ス)したれど、己(オノ)が妻こそ常(トコ)めづらしき

2652 妹が髪あげ竹葉野(タカハヌ)の放ち駒、荒びにけらし。逢はなく、思へば

2653 馬の音のとゞともすれば、松陰に出でゝぞ見つる。蓋し君かと

2654 君に戀ひ眠(イ)ねぬ朝明(ケ)に、誰が乘れる馬の足音(アシト)ぞ、我に聞かする

2655 紅の裾つく川を中に置きて、我や通はむ。待ちにか待たむ

*

2656 天飛ぶや輕(カル)の社の齋槻(イハヒツキ)。幾世迄あらむ、隱(コモ)り妻ぞも

2657 神南備(カミナビ)にひもろぎ立てゝ齋(イハ)へども、人の心は守(モ)りあへぬかも

*

2658 天(アマ)雲の八重雲隱り、鳴(ナ)る神の音にのみやも、聞き渡りなむ

2659 爭へば神も惡(ニク)ます。よしゑやし、裝(ヨソ)ふも君が憎からなくに

2646 こんなに焦れて居る位ならば、住吉の津守の浦の網曳き達の、網について居る泛子の緒ではないが、いつそ家を離れて、住所不定に、漂浪し歩いた方がましだ。

2647 成程(ナルホド)横雲が、空にずつと懸つて居る程遠ければこそ、會ふことの間があくのも、尤だけれども、こんなに近くに居て、お出でなさらんのは、自分で切れようと思うて、間をあけなさるのであらう。

2648 あれ此と考へ事をしないで、私は只、あなた一圖に思うて居ます。

2649 山の田を番して居る老人が、燃(モヤ)し据ゑて置く、鹿をば脅す火ではないが、内心で焦れて、自分はをることだ。

2650 あの時は、うつかりいとしい人と共寢をしたが、一體その後、人が會うてくれないやうになつたら、どうしようといふ考へで居たのだらう。考へのないことだつた。

2651 難波人が蘆を燃して、火をたく家ではないが、煤けて古びてはをるが、いつ迄たつても、自分の妻は、目立つて可愛いことだ。

2652 竹葉野に放ち飼ひをした馬ではないが、心が荒けて、殺風景になつたのに違ひない。會ひに來てくれないのを考へて見れば。

2653 馬の足音がどん〳〵として來ると、表の松の陰に、何時も出て見ることだ。ひよつとすると、あの方がやつて來られたか、と思うて。

2654 いとしい方に焦れて、寢もしないで居た夜の引き明けに、思ひやりなく、誰が乘つて居る馬の足音か知らぬが、自分に聞かせることだ。

2655 徒渡(カチワタ)りすれば、紅染めの上裳の裾が、つかる位の淺い川をば、中に隔てゝ、別れて居るので、戀しくて爲方がない。私の方から出かけて行かうか、それとも、何時迄も待つて居ようか。

2656 輕の社にある神木として祀つてある槻の木が、幾年たつたか訣らないが、其樣に、何時迄かうして、隱してをらねばならないことだらうか。自分の內證の戀ひ人は。

2657 神を祀つてある山に、神を下し奉る場を建てゝ、齋み清めてお祀りして、何卒(ドウゾ)心變りのないやうに、と祈りはするものゝ、人の心といふものは、何時迄も外へ散らないやうに、番は出來ないものだねい。

2658 いとしい人と會ひもせないでゐて、幾重にも重つた雲の上で、遠く鳴つて居る雷のやうに、音許りを聞いて、實際には逢はないで、續けてをらねばならんか。

2659 お前は、あの人と怪しいなどゝ、人が自分に、由ありげな噂を立てる。かのお方は、可愛いと思うて居るのに、知らない顏をして、さうぢやないなどゝ反抗して、知らない振

＊

2660 夜並べて君を來ませと、千早振る神の社を祈まぬ日はなし

2661 靈ちはふ神も、我をば捨てこそ。しゑや、命の惜しけくもなし

2662 吾妹子に又も會はむと、ちはやぶる神の社を祈まぬ日はなし

2663 ちはやぶる神の齋垣も越えぬべし。今は我が名の惜しけくもなし

2664 夕月夜明時闇の朝陰に、我が身はなりぬ。汝思ひかねて

2665 月しあれば、明くらむ判別も知らずして、寢て吾が來しを、人見けむかも

2666 妹が目を見まく惜しけく、夕闇の木の葉隱れる月を待つ如

りをすれば、神樣はお憎みになる。どうなりとなれ是々だ、と打ち明けて言はう。實は知らぬ風をしてるのも、あなたが可愛いからです。

2660 こんなに隙き間なく、毎晩いとしいお方を寄して下さい、と神樣の社に祈らぬ日はない。

2661 靈驗あらたかな神樣も、私をばもう守らないで、うつちやつて下さい。あゝもう、命なんかは惜しくも御座いません。一層死んだ方がましです。

2662 いとしい人に、も一度出會ひたいと言うて、一日とて、神の御社にお願ひせん日はない。

2663 もうこんなになつた上は、自分の評判位はどうなつても、殘念なとは思はない。どんな人も、行くことを許されない所へも、やつて行かう。人の蹈みこむことを許されて居ない、神樣の齋垣でも、蹈み越えて行かうと思ふ位である。

2664 私は、しよんぼりと痩せ細つた體になつて了うたことだ。お前を思うて、辛抱し切れないので。

2665 夜が明けたけれども、月があつたので、夜が明けて居るかまだ晩か、といふ區別も訣らないで、寢こんで、朝歸つて來たのを、人が見たさうな。それで、こんなに評判が立つた。いとしい人の顏が見たいことだ。ちようど夕闇の時分に、木の葉に隱れて居る、月の出るのが待たれるやうに。

2666

2667 ま袖持ち、床打ち掃ひ、君待つとをりし間に、月傾きぬ

2668 二上に隱らふ月の惜しけども、妹が手本をかるゝ。此頃

2669 吾が夫子が振り離け見つゝ嘆くらむ、清き月夜に、雲な棚引き

2670 まそ鏡清き月夜の移りいなば、思ひは止まじ。戀ひこそまされ

2671 此夜らの有明月夜、ありつゝも君をおきては、待つ人もなし

2672 此山の峰に近しと、我が見つる月の、空なる戀ひもするかも

2673 ぬば玉の夜渡る月の移りいなば、更にや、妹に我が戀ひをらむ

2674 朽網山。夕居る雲の薄れいなば、我

2667 袖で寢床を掃除して、あの方をお待ち申すとて、寢もしないで起きて居た間に、もう月が傾いて了うた。

2668 あの二上山に隱れて行つて了ふ月のやうに、殘り惜しいことは惜しいが、評判がうるさゝに、いとしい人の手を離れて、手枕もしない此頃よ。

2669 あのお方が遙かに空を見やり乍ら、自分を思うて、嘆息をついて入らつしやるだらう。その月に、せめては、雲なりと懸らずに居てくれ。

2670 今見て居る此淸らかな月が、段々空を廻つて去つて了うたら、月で幾分慰まつて居た焦れる心は、彌深くなりもしようが、思ふ心の止む氣遣ひはなからう。

2671 今夜の明け殘つて照る、月の影ではないが、かうして起きてゐ乍ら、待つて居る人というては、あなたの外には、誰があらうか。

2672 目の前にある、此山の峰近く懸つて居る、と見て居た月が、もう中空に昇つて了うた。それとは別だが、自分の焦れて居る心も、上の空になつて居ることだ。

2673 夜の空を通つて行く此月が、遠くへ運行して行つて了うたら、今よりももつと、いとしい人に焦れて居ることだらう。

2674 朽網山に、日の暮れに、懸つて居る雲のやうに、段々私と

は戀ひむな。君が面(メ)を欲り

2675 君が著(ケ)る三笠の山に居る雲の、立てば績がるゝ戀ひもするかも

2676 久方の天(アマ)飛ぶ雲にありてしが。君と逢ひ見む。落つる日なしに

2677 佐保の内ゆ嵐吹ければ、歸時(カヘサ)には、せむ術(スベ)知らに、嘆く夜ぞ多き

2678 はしきやし吹かぬ風故、玉櫛笥開(ヒラ)きてさ寢し我ぞ、悔しき

2679 窓越しに月おし照りて、足引きのあらし吹く夜は、君をしぞ思ふ

2680 河千鳥棲む澤の邊に立つ霧の、著(イチジロ)けむな、語らひそめてば

2681 吾が夫子(セ)が使ひを待つと、笠も著ず出でつゝぞ見し。雨の降らくに

2681 2680 2679 2678 2677 2676 2675

の間が、疎(ウト)々しう薄くなつて行つたら、私は、あなたのお顔が見たさに、焦れることでせうよ。

2675 いとしい方が、著て居られるともいふべき、三笠山に立つて居る雲が、立ち上る後から、又次いで立ち上るやうに、後からずん〳〵出て來て、どうも出來ない戀ひを、自分はすることだ。

2676 空を飛ぶ雲であれば好いが。毎日落ちもなく出て居るやうに、いとしい方と毎日、落ちもなく逢はう。

2677 佐保の地内を山風が吹いて居るので、いとしい人と別れて歸りしなには、何時も寒くて爲方がないので、困つて嘆息(タメイキ)をつくことが多い。

2678 吹きもせない風だのに、吹いたかと思うて（卽、吹かない風で、戸が明く訣がないのに）、戸が開いたやうに、お出でにもならぬあなたの爲に、二人の中を公開して了うた後で、わたしは、殘念なことであります。

2679 窓越しに、月が一杯に照つて、山嵐の吹きつける夜は、あなたのこと許り思うてることです。

2680 河千鳥がぢつとして居る、澤の邊(アタリ)に立つ深い霧ではないが、定めて、目に立つことであらうよ。あの人と關係を結んだら。

2681 お歸りになつたあなたの使ひが、今に來るか〳〵、と表へ出て、雨の降るのに、待つて居たことです。

2682 唐衣君にうつけて見まく欲り、戀ひぞ暮しゝ。雨の降る日を

2683 遠方(ヲチカタ)の赤土(ハニフ)の小屋(コヤ)に、小雨降り床さへ濡れぬ。身に副へ。吾妹

2684 笠なしと人には言ひて、雨づゝみ留りし君が、姿し思ほゆ

2685 妹が門行き過ぎかねつ。久方の雨も降らぬか。そをよしにせむ

2686 夕占(ケ)とふ我が袖に置く白露を、君に見せむと、とれば消(ケ)につゝ

2687 櫻麻(ヲ)の苧(ヲ)生の下草。露しあれば、明してい行け。母は知るとも

*

2688 待ちかねて、内には入らじ。白栲の我が衣手に露は置きぬとも

2688 2687 2686 2685 2684 2683 2682

2682 いとしい方の爲に、心も空(カラ)に、馬鹿のやうになつて、此雨の降る日を、焦れ暮して居たことだ。（と夜に這入つて、男に與へた歌。）

2683 掴り立て小屋に寢て居ると、霧雨が降つて來て、寢床迄が濡れて了うた。もつとぴつたりと、自分の體にひつ著いて居なさい。いとしい人よ。

2684 あの日澤山、人があの方も伴れて出かけようとした。所が笠がないから、と他の人には言うて、雨籠りをして、後に殘つて居たあの方の姿が、思ひ出されることだ。

2685 いとしい人の表を素通りするのは、爲難(ニク)いことだ。一層雨が降つてくれないだらうか。そしたら、それを理由として立ち寄らうに。

2686 辻占を窺はうと思うて、門に立つて居た爲に、自分の袖に露が置いた。其をばあの方にお見せ申さうと、取り上げて見ると、後から〳〵消えて行くことだ。

2687 あなたのお歸り道の、櫻麻の植ゑ込みの、麻の畑の下生えの草には、まだ露が置いて居るから、著物が濡れませう。夜が明けてから、お歸りなさい。お母さんが見附けても、好いぢやありませんか。

2688 譬ひ表で待つて居る自分の袖に、露が置いて來ても、待ちとぐけることが出來ないで、内へ這入るといふやうなことはすまいよ。

2689 朝露の消ケ易き我が身、老いぬとも、
又をち返り君をし待たむ

2690 白栲の我が衣手に、露は置きぬ。妹
には逢はず。たゆたひにして

2691 かにかくに物は思はず。朝露の我が
身一つは、君がまに〳〵

2692 夕凝リの霜置きにけり。朝戸出に、
その上蹈みて人に知らゆな

2693 かく許り戀ひつゝあらずは、朝に日ケ
に、妹が蹈むらむ土ならましを

2694 足引きの山鳥の尾の一峰越え、一目
見し子に戀ふべきものか

2695 吾妹子に會ふよしをなみ、駿河なる
富士ノ高嶺の燃えつゝかあらむ

2696 荒熊の棲むとふ山の、しはせ山。せ

2689 朝露のやうに、脆い自分の體は、譬ひ年が寄つても、又若返つて、あなたをお待ち申しませう。どうぞ、お出で下さい。（別れて久しくなつた男が、又訪ねよう、と言うたのに答へた歌。）

2690 いとしい人に會はないで、ぐづ〳〵して居る中に、自分の白栲の袖に、露が置いたことだ。

2691 彼此と、色々のことは考へないで、朝露のやうな果敢ない自分の體一つは、あなたの御心任せに、怎うとも致しませう。

2692 夜の中に降り結んだ霜が、一面に置いて居ます。その霜の上を蹈んで通つて、跡をつけて歸つて、人に知られぬやうになさい。

2693 こんなに迄焦れて居る位ならば、一層いとしい人が、何時も蹈んで歩く、土になつた方がましだ。

2694 かの山鳥の雄は、雌と一つの峰を隔てゝ棲んで居るといふが、自分は一峰所か、僅か一目だけ見た人に、焦れて居ることだ。そんなことがあるべき筈だらうか。

2695 いとしい人に出會ふ手段が無いので、獨り胸を燃して、焦れてをらねばならぬか。此駿河の國の富士の山が、火を噴いて居るやうに。

2696 あの荒熊が棲んで居る、と人のいふ山なる、しはせ山では

めて問ふとも、汝が名は告ラジ

2697 妹が名も我が名も立たば惜しみこ
そ、富士ノ高嶺の燃えつゝ渡れ

2698 行きて見て居れば戀しき朝香妻。山
越しに置きて、寢ねかてぬかも

2699 阿陀人の簗うち渡す瀬を速み、心は
思へど、直接に會はぬかも

2700 玉かぎる岩垣淵の籠りつゝ、こやり
死ぬとも、汝が名は告らじ

2701 飛鳥川。明日も渡らむ。岩橋の遠き
心は思ほえぬかも

2702 飛鳥川。水行きまさりいや日ケ日に、
戀ひの增さらば、ありかてましゞ

2703 眞薦苅る大野河原の水隱リに、戀ひ
來し妹が紐解く。われは

ないが、屢人が、言へ〳〵と迫つても、お前さんの名は言ひますまい。

2697 いとしい方の名も、自分の名も、評判が立つたら、殘念だから、駿河の富士の山ではないが、下に焦れ續けて、上べに表さずに居る。

2698 出掛けて行つて、逢うて歸つて來ると、戀しくてならぬ、朝香の里のいとしい人を、玆から山一つ隔てゝをらせて、寢るにも寢られなく、戀しいことだ。

2699 阿陀の里人が、簗をずつと懸け渡しておく瀬が激しい爲、渡つてもえう行かぬ程に、評判のはげしさに、心には思うて居乍ら、えう會はないことだ。

2700 二人の間のことは、胸の中に籠めて居て、譬ひ病氣になつて死んでも、お前の名をば言ひはすまい。

2701 飛鳥川をば、明日にも渡つて、あの人の所へ出かけよう。何時迄も、待つて居る心持ちはせないことだから。

2702 飛鳥川に流れる水ではないが、其川が流れて行くにつれて、水量がふえるやうに、一日々々と戀ひが募つて來たら、生きて居られなくなるだらう。

2703 大野河原の水の中に隱れて居るやうに、心の底で焦れてをつた、いとしい人の下裳の紐を、やつと解いて、自分は共に寢ることだ。

2704 足引きの山下とよみ行く水の、時と
もなくも、戀ひ渡るかも
2705 はしきやし逢はぬ君故、徒らに此川
の瀬に、玉裳濡しつ
2706 泊瀬川跡見の速瀬を掬び上げて、飽
かずや、妹と、問ひし君はも
2707 青山の岩垣沼の水隱りに、戀ひや渡
らむ。逢ふよしをなみ
2708 しなが鳥猪名山とよみ逝く水の、名
にのみ寄せし隱り妻はも
2709 我妹子に我が戀ふらくは、水ならば
柵越えて、行かまくぞ思ふ
2710 犬上の鳥籠の山なるいさや川。不知
とをきこせ。吾が名宣らすな
2711 奥山の木の葉隱りて行く水の、音に

聞きしゆ、常忘らえず
2712 言疾くば中は淀ませ。水無川絶ゆと
ふことを、ありこすな。ゆめ
2713 飛鳥川。行く瀬を速み、早見むと待
つらむ妹を。此日暮しつ
2714 物部の八十宇治川の速き瀬の、立ち
得ぬ戀ひも、我はするかも
2715 神南備の行きたむ隈の、岩淵の隱り
てのみや、我が戀ひをらむ
2716 高山ゆ出で來る水の、岩に觸り、割
れてぞ思ふ。妹に逢はぬ夜は
2717 朝東風に堰越す波の、瀬とふにも、
逢はぬもの故、瀧もとどろに
2718 高山の岩本激ち行く水の、音には立
たじ。戀ひて死ぬとも

2712 餘り評判が激しかつたら、中途では一寸中休みをして、川が淀むやうになさい。併し決して、水無川の、水が切れて了うた樣に、とぎれるといふことがないやうに、氣をつけて下さい。
2713 飛鳥川の流れて居る瀬が速くある如く、いとしい人が、早く逢ひたい、と待つて居るだらうに、今日も無駄に、日が暮れて了うた。
2714 宇治川の激しい流れの瀬に、抵抗して立つて居ることが出來ないやうに、すつかり沈んで了うて、脫することの出來ないやうな焦れ方を、自分はして居ることだ。
2715 神南備山を廻つて流れる川の入りこみの、岩の圍んだ淵ではないが、心の底に籠めて許り、焦れてをらなければならんか。
2716 高い山から流れ出て來る水が、岩に行き當つたやうに、心を碎いて居ることだ。いとしい人に逢はない夜は。
2717 朝の東風が吹くので、川の堰を越えて激して流れる浪が、瀬に出くはすやうに、會ふことの出來る時にも、出會ひはせないのに、まるで瀧が響いて落ちるやうに、甚い評判を立てられたことだ。
2718 高い山の岩の、根本を激して行く水ではないが、譬ひ焦れ死んでも、評判には立てまいと思ふ。

2719 隱沼（コモリマ）の下に戀ふれば、饜（アキタ）らず人に語りつ。忌むべきものを

2720 水鳥の鴨が棲む池の下樋（シタビ）なみ、鬱（イブ）せき君を、今日見つるかも

＊

2721 玉藻苅る堰（キデ）の柵薄（シガラミ）みかも、戀ひの淀める。我が心かも

＊

2722 吾妹子が笠のかり手の和蹔野（ワザミヌ）に、吾は入りぬと、妹に告げこそ

2723 數多（アマタ）あらぬ名をしも惜しみ、埋れ木の下ゆぞ戀ふる。行く方（ヘ）知らずて

2724 秋風の千江（チエ）ノ浦曲（ウラワ）の木積（コヅミ）なす、心は寄りぬ。後は知らねど

2725 白砂（シラマナゴ）三津の埴原（ハニフ）の色に出でゝ、言は

2719 隱沼のやうに、心の底で焦れて居るのでは、滿足出來ないで、人に話したことだ。愼まねばならんことだのに。

2720 水に浮く鴨が棲んで居る池の、伏せた樋がなくて、何處へも水の通ずることが出來ないで、鬱積して居るやうに、見ると心がふさいで來るやうな御方に、今日出會うたことだ。（此は、戀ひ人が陰鬱な人だ、といふのではない。その人を見ると、自分の心が陰氣になるのである。）

2721 自分達の評判が非常に立つた。此は、あの藻を刈る堰に打ちこんだ柵に、水が洩れるのであらうか。それとも、もともと柵が薄く打つてあつたから、その名が洩れ出たのか、それとも、戀ひが淀んで、湛へて居た自分の心から、洩れて出たのであらうか。

2722 いとしいお前の笠につけたかり手の輪でないが、和蹔野へも、早自分はかゝつて來た、といとしい、家にをる人に告げてくれ。

2723 そんなに甚（ヒド）く立つたといふのではないが、評判の大事さに、埋れ木ではないが、心の底で焦れて居ることだ。その戀ひの因つて來る所を知らないで。

2724 秋風の吹く千江の浦の入り込みに、寄つて來る木屑のやうに、自分の心は、將來はと問はれると、答へかねるが、心が君に、片寄つて居ることだ。

2725 白い砂の一杯にある、三津の浦の赤土原ではないが、顏色

ざるのみぞ。我が戀ふらくは

2726 風吹かぬ浦に浪立ち、無き名をも、我は負へるか。會ふとはなしに

2727 菅島の夏身ノ浦に寄る波の、間も置きて、我が思はなくに

2728 近江ノ海。沖つ島山奥（オク）まへて、我が思ふ妹が言（コト）の繁けむ

2729 霰降り遠津大浦に寄する波。寄（ヨ）しと寄すとも、憎からなくに

2730 紀ノ海の名高ノ浦に寄る波の、音高きかも。會はぬ子故に

2731 牛窓ノ浦の潮騷島（シホサヰ）とよみ、寄せてし君に、會はずかもあらむ

2732 沖つ波岸（ヘ）波の來寄る佐多ノ浦の、此さだ過ぎて後（ノチ）戀ひむかも

2726 風の吹いて居ない浦に、波が立つやうに、あるべき筈でない評判を、自分は受けたことだ。あの人と逢うた、といふ訣ではなく。

2727 菅島の夏身の浦に寄せて來る波が、間をおいて打ち寄せるやうに、私とお前との間に、隔てを置いて考へたことはない。

2728 近江の湖水の、沖の方にある島ではないが、奥深く心の底に焦れて居る、いとしい人の評判が、かうして居ては、甚く立つだらう。

2729 大きな遠津の浦に寄せて來る波ではないが、あの人の評判が、私に幾ら寄せかゝつて來ても、あの人は憎く思はれない。

2730 紀州の海岸の名高の浦に寄せて來る波が、音が高いやうに、會うたことのない人だのに、その人の爲に、評判が高くなつたことだ。

2731 備前の牛窓の浦の、潮流の爲に、島も動くやうにひどい音がして、潮がよつて來るやうに、甚（ヒド）い評判を立てゝ、自分とわけありさうに、人の言うたいとしい方に、逢はずにをらねばならぬだらうか。

2732 沖の浪や、海岸の波が來て打ち寄せる、佐多の浦ではないが、此時（サダ）を過ぎて、將來、焦れることであらう。

2733 白波の來寄する島の荒磯にも、あらましものを。戀ひつゝあらずは

2734 潮滿てば水泡（ミナワ）に浮ぶ眞砂（マナゴ）とも、我は

も生ける。戀ひは死なずて

2735 住吉（スミノエ）の岸の浦曲（ワ）に頻（シ）く波の、屢（シバ）、妹

を見るよしもがも

2736 風をいたみ、いたぶる波の間なく、

吾が思ふ君は、あひ思ふらむか

2737 大伴の三津の白波間なく、我が戀ふ

らくを、人の知らなく

2738 大舟のたゆたふ海に、碇（イカリ）下し、如何

にしてかも、我が戀ひ止（ヤ）まむ

2739 雎鳩（ミサゴ）居る沖つ荒磯に寄る波の、行く

へも知らず。わが戀ふらくは

2740 大舟の艫（トモ）にも舳（ヘ）にも寄する波。寄す

ともわれは、君がまに〳〵

2741 大海に立つらむ波は、間あらむ君に

戀ふらく、止む時もなし

2742 志珂（シカ）の海人の、煙（タ）焚き立て燒（ヤ）く鹽の、

辛き戀ひをもわれはするかも

右、一說に石川ノ大夫の歌だと

言うて居る

2743 なか〳〵に君に戀ひずは、牧（マキ）ノ浦の海

人ならましを。玉藻刈る〳〵

2744 鱸（スキ）採る海人のともし火、よそにだに

見ぬ人故に戀ふる。此頃

2745 水門（ミナト）入りの蘆分け小舟障（サハ）り多み、我

が思ふ君に會はぬ頃かも

2746 海面（ニハ）清み、沖邊漕ぎ出づる海人舟の、

楫（カヂ）とる間なき戀ひもするかも

2740 大
2739 雎
2738 大
2737 大
2736 風
2735 住
2734 潮
2733 こ

2733 こんなに焦れて居る位なら、波の寄せて來る島の、荒い岩

濱にでも行つて居た方がましである。

2734 潮がさして來ると、海岸に碎ける水の泡に浮く砂のやうに、

漂うて生きて居ることだ。焦れ死にもえうしないで。

2735 住吉の岸の浦邊に、間斷（シキリ）なく寄つて來る波ではないが、繰

り返し〳〵、幾度も、いとしい人を見る方法があればよい

が。

2736 風が甚（ヒド）いので、甚く搖（ユ）つて立つ波のやうに、始終思ひ續け

て居るいとしいお方は、自分だけが片思ひでなく、彼方で

も、思うて居て下さるであらうか。

2737 大伴の里の、三津の海岸に寄せる波ではないが、隙き間も

なく、自分が焦れて居るのを、あの人は知らないで居るこ

とだ。

2738 大きな舟が動搖して居る海に、下す碇で、如何にすれば、

自分の焦れる心は止まらうか。

2739 雎鳩が下りて休む、沖の方の荒い岩に寄せる波ではないが、

行方卽、將來如何（ドウ）なるかもわからないことだ。

2740 大きな舟の艫にも、舳にも、寄せて來る波のやうに、色々

な
2741 大
2742 あ
2743 こ
2744 沖
2745 川
2746 海

な人に、訣ありさうに言はれても、私はあなた任せで、外

に心は無いのです。

2741 大海に立つて居る波は、それでも立たぬ間があらうけれど、

私があなたに焦れて居る心は、止（ヤ）まる時とてはありません。

2742 あの志珂島の海人が鹽木を焚いて煙を立て乍ら、燒いて採

る鹽ではないが、辛（ツラ）い戀ひをば、自分はすることだ。

2743 こんなにして、君に焦れて居るよりは、一層却つて、牧の

浦の海人となりたいものだ。玉藻を刈り乍らをる所の。

2744 沖の方へ出て、鱸を釣つて居る海人の燈ではないが、遠く

わきからでも見るならばよいが、其位にも、會ふことの出

來ない人であるのに、その人の爲に、焦れて居る此頃だ。

2745 川口へ漕ぎ入る所の、蘆を分けて來る舟ではないが、邪魔

が多くて、思うて居るお方に會ふことの出來ない、今日今

頃だこと。

2746 海面がさつぱりと凪いでをるので、沖の方さして、漕いで

行く海人の舟が、殆鰯をとる間がないやうに、隙き間のな

い焦れ方をして居ることだ。

2747 味釜の潮津を斥して漕ぐ舟の、名は
告りてしを。會はずあらめやも

2748 大舟に水草苅り積み、しみゝにも、
妹が心に乘りにけるかも

2749 驛路に引舟渡し、直乘りに、妹が心
に乘りにけるかも

2750 吾妹子に逢はなく久し。うましもの
あへ橘に苔の生す迄

2751 鴨の棲む須佐ノ入江の荒磯松。吾を
待つ子らは只一人のみ

2752 吾妹子を聞き都賀野邊の廳合歡の、
我は偲ばず。間なく思へば

2753 波間より見ゆる小島の濱榀、久しく
なりぬ。君に會はずして

2754 朝柏潤和川邊の篠の間の、忍びて寢
れば、夢に見えけり

2755 淺茅苅る原に標さし、空言も寄せて
し君が、言をし待たむ

2756 鴨頭草の假れる命にある人を、如何
に知りてか。後も逢はむとふ

2757 大君の御笠に縫へる有馬菅。ありつ
つ見れど、言なき吾妹

2758 菅の根のねもごろ妹に戀ふるにし、
健男心思ほえぬかも

2759 我が宿の穗蓼古幹苅り生し、實にな
る迄に、君をし待たむ

2760 足引きの山澤ゑぐを摘みに行かむ日
だにも、會はむ。母は責むとも

2761 奥山の岩下菅の、根深くも思ほゆる
かも。吾が思ふ妻は

2747 味釜の里の潮津の方へ向いて、漕いで行く舟の繩ではないが、名はあの人が、私に明したのだのに、會はないでをる訣はない。

2748 大きな舟に、水に生えて居る草を刈り積んで、みつしりと据ゑたやうに、みつしり茂々と、いとしい人が何時も、自分の心に乘り掛つて、心から離れないことだ。

2749 國道の交通に、道のない川などでは、綱曳きの舟を渡して、眞直に乘り續けて行くやうに、いとしい人が自分の心へ、馬乘りに乘り掛つて、心から離れないことだ。

2750 いとしい人に、會はないで居ることが長くなつた。あの旨い橘の木に、苔が生えるやうになる迄。

2751 あぢ鴨の下りて居る、須佐の入り江にある岩濱の松ではないが、自分を待つて居るいとしい人をば、唯待つだけだ。お前の外に何處へ行かうか。

2752 いとしい人のことを、始終聞き續いで居るといふ語に似た、都賀野の中に生えて居る、萎々とした合歡の木ではないが、自分はいつも思ひ通しであるから、心の下で思うて居る、卽、偲ぶといふやうなことは出來ない。

2753 波の上に見えて居る、あの小島の海岸の榀の木ではないが、久しうなつたことだ。あの方に會はなくなつてから。

2754 潤和川の川べりに生えた、篠の叢ではないが、心の下に思ひこんで寢たので、夢にあの人の姿が見えたことだ。

2755 廣々とした茅花を刈る原に、標を附けて、自分のものだといふやうな、根のない空言でも、訣ありさうに言はれたあの方が、此頃は、繼しくなつた。どうぞあの方から、お便りが來ればよい。

2756 あなたは今は會はないでも、將來逢はうと仰つしやいますが、我々はあつてないやうな、假りの命を持つたものですのに、どうして何時迄、生きて居るといふことが、おわかりになつてか、將來には會はう、と仰つしやるのですか。

2757 大君の御笠に縫ふ所の、有馬の菅ではないが、ぢつと辛抱して居つても、音信もしてくれない無情な、いとしい人よ。

2758 しみゝ〳〵といとしい人を思うて居るので、一人前の男子としての心持ちも、無くなつたことだ。

2759 自分の屋敷内に生えた、蓼の枯れた古い幹を、さし木にして切つて、插して生して、それが實となる迄、あなたのお出でを待つて居ませう。どうか、この秋には、必、御歸り下さい。

2760 お母さんが幾ら私を叱つて、あなたに會はせないやうにせられても、山の澤に生えた、ゑぐを摘みに行く日には、目を竊んで、あなたに會ふことに致しませう。

2761 自分のいとしく思うて居る人のことは、奥山の岩の下に生えて居る麥門冬ではないが、根深く、心の底から思はれてならない。いとしい妻は。

2762 蘆垣の中の柔草（ニコ）にこよかに、我と笑ましして、人に知らゆな

*

2763 紅の淺羽（アサハ）の野らに苅る草の、束の間も我忘らすな

2764 妹が爲命殘せり。苅る蘆の思ひ亂りて、死ぬべきものを

2765 吾妹子に戀ひつゝあらずは、苅る蘆の思ひ亂りて、死ぬべきものを

2766 三島江の入り江の蘆（アシ）を、かりにこそ、我をば君は思ひたりけれ

2767 足引きの山橘の色に出でゝ、我が戀ひなむを、人も難（カタ）みすな

2768 丹頂鶴（アシタヅ）の騷ぐ入り江の白菅の、知らぬことすら、こちたかるかも

2762 蘆で拵へた、垣の內側に咲いて居る柔草（ニコ）ではないが、につこりと、思はず知らず笑ひなさつて、人に知られぬやうにして下さい。（戀ひ人のある者は、どうかしたはずみに、その人と會うた時の容子などを思ひ浮べて、思ひ出し笑ひなどをすることがある所から言うたのだ。）

2763 淺羽野に刈る草ではないが、一寸した（草の一束程の短さにかけて、束の間を起したのである。）間でも、私を忘れて下さるな。

2764 刈り取つた蔑が、亂雜に積まれて居るやうに、心が掻き亂れて、煩悶した結果、死なねばならぬ筈であつたが、戀しい人の爲に、その命を殘しておいて、死なずに居たことだ。

2765 いとしい人に焦れて居る位なら、煩悶してその爲に、死んだ方がましだのに。

2766 あの三島江に生えた、蔑を刈るのではないが、苟且（カリソメ）に慰め半分、あの方は、わたしを愛して入らつしやつたのだ。

2767 山橘の實ではないが、色に表して焦れるやうに、しまひにはなるであらうが、どうぞ、外の人も非難してくれるな。

2768 丹頂の鶴のやかましく鳴いて居る、入り江に生えて居る白菅ではないが、知りも覺えもせぬ事迄も、甚く評判に立つたことだ。

2769 我が夫子（セ）に我が戀ふらくは、夏草の苅り掃へども、生ひしくが如

2770 道の邊の櫟柴原（イチシバハラ）の、いつもノ〳〵、人のゆるさむことをし待たむ

2771 吾妹子が袖を頼（タノ）みて、眞野（マヌ）ノ浦の小菅の笠を著ずて來にけり

2772 眞野ノ池の小菅を笠に縫はずして、人の、遠名（トホナ）を立つべきものか

2773 さす竹の葉隱（ゴモ）りてある我が夫子（セコ）が、われ許（ガリ）來ずば、我が戀ひめやも

2774 神南備の淺篠原（アサシヌハラ）の女郎花（ラミナヘシ）、忍べる君が聲のしるけく

2775 山高み谷邊に延（ハ）へる玉蔓（カヅラ）、絶ゆる時なく見むよしもがも

2776 道の邊の草を冬野に蹈み枯し、我立

2769 戀しいお方に焦れて居ることは、ちようど夏草が、刈つてとり掃うても、後から續いて生えて來るやうに、幾らでも續いて出て來る。

2770 道傍の櫟の生えた場所ではないが、いつ〳〵までも、他の人々の油斷するのを待つてをらう。

2771 （あなたは怎うして、そんなに濡れたのです。）笠を持たない男「そんなに言うてくれな。お前の袖を貸して貰はう、とそれをば賴りにして、眞野の浦の菅で拵へた笠も著ないで、やつて來たのだ。」

2772 眞野の池に生えた菅を笠に縫うて、自分のものともしないで居て、いとしい人に就いての僞（イツハリ）の評判を、立てるべき筈ではないのに、人が立てる。

2773 立ち延びて居る、竹の葉がこんもりとして居るやうに、此頃隱れて出て來ないあのお方が、最初に私の所へ、來て下さらなければ、こんなに、私が焦れはすまいのに。

2774 神南備山の麓の、うつすりと篠の生えた原に、咲き交つて居る女郎花のやうに、此頃隱れて會はない人の評判が、はつきりと、耳に聞えて來ることだ。

2775 山が高いので、生え延びずに、谷に廣がつて居る美しい蔓ではないが、とぎれることなく、何時迄も、逢ふ方法があれば好いが。

2776 道傍の草をば餘り通ふ爲に、冬の野の草のやうに、蹈み枯

ち待つと、妹に告げこそ

2777 疊薦隔編み、しま〳〵通はさば、道の芝草生ひざらましを

2778 水底に生ふる玉藻の、生ひ出でず、よし、此頃はかくて通はむ

2779 海原の沖つ繩海苔うち靡き、心もしぬに、思ほゆるかも

2780 柴の名高ノ浦の靡き藻の、心は妹に寄りにしものを

2781 海の底奥を深めて生ふる藻の、もとも今こそ、戀ひは便なき

2782 さ寢かには、誰とも寢めど、奥つ藻の靡きし君が言待つ。吾を

*

2783 吾妹子が如何とも我を思はねば、含

して了ふ迄、あなたの出て來るのを立つて待つて居る、といとしい人に告げてくれ。

2777 幾度も槌の子を繰り返し薦疊を編むやうに、間斷なくあなたが通うて下さつたら、道にはこんなに、芝が生えなかつたでせうに。

2778 水の底に生えて居る玉藻が、水の表へ生え出さないやうに、公然とは、交通することが出來ないでも、かまはない。まあ暫らくは、かうして忍んで通うて居よう。

2779 海上遙かな沖の方に出來る繩海苔ではないが、なよ〳〵と、そちらへ靡いて、心さへも萎れて、いとしい人のことが思はれることだ。

2780 名高の浦に靡いて居る藻ではないが、自分の心はいとしい人に、片寄つて居たことだ。

2781 海の底の奥に、深く生えて居る藻ではないが、今が一等、戀ひのやる瀨ない頂上だ。

2782 寢る程のことならば、誰とでも寢みませうが、併し眞實、私の心が向いて居るあなたのお便りを、私は待つて居ます。（此は男が、今頃は私が便りせないから、多分誰かと寢て入らつしやらう、と言うて來たのを、辯解はしないで、嵩に出て、女が答へたのである。）

2783 いとしい人が、何うも自分のことを考へてくれないので、

める花のほに咲きぬべし

2784 忍びには戀ひて死ぬとも、み園生の韓藍の花の、色に出でめやも

2785 咲く花は過ぐる時あれど、吾が戀ふる心の内は、止む時もなし

2786 山吹の匂へる妹が、はねず色の赤裳の姿、夢に見えつゝ

2787 天地のより合ひの極み、玉の緒の絶えじと思ふ、妹が邊見つ

2788 生きの緒に思へば苦し。玉の緒の絶えて亂れな。知らば知るとも

2789 玉の緒の絶えたる戀ひの亂りには、死なまくのみぞ。又も會はずして

2790 玉の緒の括り寄せつゝ、末終に行きは分れず。同じ緒にあらむ

2784 2785 2786 2787 2788 2789 2790

此迄は默つて居たが、辛抱が出來ないから、蕾んで居た花が、表面に咲き出したやうに、外に、自然と顯れ相である。

2784 心の下で思うて居て焦れて死んでも、庭の韓藍の花のやうに、色に現しますまい。

2785 咲いて居る花は、散つて了ふ時があるけれど、自分の焦れて居る心の中は、何時迄立つても、戀ひの止まる氣遣ひはない。

2786 山吹ではないが、ほんのりと美しいあのいとしい人が、はねず色の赤い上裳を著けた姿が、始終夢に見え〳〵する。

2787 何時迄も切れまい、と思うて居るいとしい人の、家の邊を、遙かな地平線の邊に眺めた。

2788 命懸けで思うて居るのは、術ないものだ。人が悟つても關はない。ちようど玉を通した緒が、切れた時のやうに、亂れ狂ひたいと思ふ。

2789 二人の間が斷れて了うた。戀ひの爲に、心が狂うて居るのだから、もう死ぬより外に道はない。又と再、逢はれないで居て。

2790 二人の間をば、ちようど玉をさす緒のやうに、括り寄せて、とう〳〵しまひ迄、兩方へ分れて了はないで、同じ緒にささつてをるやうに、ありたいものだ。

2791 片絲もち貫きたる玉の緒を弱み、亂りやしなむ。人の知るべく

2792 玉の緒の現し心や、年月の行きわかる迄、妹に會はざらむ

2793 玉の緒の間も置かず見まく欲り、我が思ふ妹は、家遠くありて

2794 隱沼の澤の泉の岩ねゆも、通して思ふ。君に逢はまくは

2795 紀ノ國の飽浦ノ浦の忘れ貝。我は忘れじ。年は經ぬとも

2796 水潛る玉に雜れる磯貝の、片戀ひのみに、年は經につゝ

2797 住吉の濱に寄るとふうつせ貝。實なき言故、我戀ひめやも

2798 伊勢の海人の朝な夕なに潛くとふ鰒

2791 自分の心は、撚り合さぬ先の細い絲で通した玉の緒が、弱くて、ばら〳〵に亂れるやうに、人があの人に焦れて居ると悟る程に、心が狂ひはすまいか。

2792 正氣でをつては、年月が移り變つて行く迄、何時迄待つても、いとしい人には會はれまい。

2793 時間の間隔もなく、いつも〳〵、會うて居たいと思うて居る、いとしい人は、家が遠いので會はれないことだ。

2794 隱れ沼になつた澤に湧く水が、岩をば通して湧き出るやうに、あの方に會へるといふならば、どんな障碍も、押し除けて、遂げようと考へて居る。

2795 紀州のあくらの浦に落ちて居る忘れ貝ではないが、譬ひ幾年たつても、自分は、いとしい人を忘れはすまい。

2796 水を潛つて採つて來る、玉に雜つて居る磯の貝が、皆片方許りになつて居る、それではないが、自分許り片戀ひ續けて、歲月が立つたことだ。

2797 住吉の濱に打ち寄せられる空の貝ではないが、實のない、卽、實意のないあの人の言だのに、その言に釣られて居るべき筈でないのに、焦れて居ることだ。

2798 伊勢の海人が、毎日朝晩の菜として、水に潛つて採つて來

の貝の、片思ひにして

2799 人言を繁みと、君を、鶉鳴く人の古家に、語らひてやりつ

2800 明時と鷄は鳴くなり。よしゑやし、一人寢る夜は、明けば明けぬとも

2801 大海の荒磯の棲鳥。朝な〳〵見まく欲しきを。見えぬ君かも

2802 思へども思ひもかねつ。足引きの山鳥の尾の、長き此夜か

異本に、「足引きの山鳥の尾のしだり尾の、長々し夜を獨りかも寢む」とある。

2803 坊中に鳴くなる鷄の、呼び立てゝ、いたくは鳴かぬ、隱り妻はも

2804 高山に鷹さ渡り、高々に我が待つ君

2804 2803 2802 2801 2800 2799

る、鰒の貝ではないが、自分は片思ひで居て、それで、こんなに、焦れて居ることだ。

2799 人の評判がうるさいといふので、いとしい人を、鶉の鳴いて居るやうな、荒れ果てた他所の空屋に、相談して行かしたことだ。

2800 もう朝だ、と鷄が鳴いて居る。鳴きたければ勝手に鳴け。自分獨り寢て居る夜は、明ければ明けてもかまはない。

2801 海の磯傍に棲む鳥ではないが、お泊め申して、毎朝お顏を見たいのに、やつて來て下さらぬお方だこと。

2802 幾ら思うても、辛抱し切れないやうな氣がする。山鳥の尾ではないが、長い今夜の間は。

2803 里の中に鳴いて居る鷄ではないが、評判高く噂立てられて、それ程も自分に、思ひを寄せて居るのではない、我が隱し妻よ。

2804 高い山を、たかべが連れて越えて行くのではないが、高々

を、待ち得なむかも

2805 伊勢の海ゆ鳴き來る鶴(タヅ)の、轟(トド)ろにも君が聞えば、我が戀ひめやも

2806 我妹子に戀ふれにかあらむ。沖に棲む鴨の、浮き寢の安けくもなし

2807 明けぬべく千鳥しば鳴く。敷栲(シキタヘ)の君が手枕いまだ飽かなくに

□問答

2808 眉根掻き、はなび、紐解け待てりやも、何時かも見むと、戀ひ來し我を

2809 今日なれば、はなびしびしに、眉根掻き、思ひし事は、君にしありけり

○

2810 音のみを聞きてや戀ひむ。まそ鏡目に直接(タヾ)に見て、戀ひまくも多く

と待ち焦れて居た、いとしい方をば、待ちをふせたいものだ。

2805 あなたの入らつしやる伊勢の海の方から、大和へ鳴いて來る鶴の聲の喜い樣に、あなたの方から私を驚す程、音信(オトヅレ)を下さつたら、私は焦れてゐませうか。

2806 自分は、沖にぢつと宿つて居る鴨が、水上に浮いて寢るやうに、安らかな心持ちもしない。これは、いとしい人に焦れて居るからだらう。

2807 夜が明けさうに、千鳥が間斷なく、鳴いて居ることだ。いとしいお方の手枕は、まだ滿足する程もして居ない中に。

(此は、川原近くに家のある、女の作つた歌であらう。)

□問答

2808 あなたの方では、何時になつたら逢へようか、とお待ち申してゐるわたしのことを思うて、此わたしのやうに、眉毛の根を掻いたり、嚔をしたり、紐がほどけたりして、待つて入らつしやるでせうか、どうか、知れたものではない。

2809 今日あなたに、お會ひ申すことが出來た。思へば嚔を續け樣にし、眉の根を痒がつて、誰に會へるのだと思うて居たのは、果して、あなたに會へるしるしだつた。

2810 評判許りを聞いて、焦れてをりませうか。直接に目で見ては、焦れる心も深いだらうから。

2811 此言(コト)を聞きなむとかも、まそ鏡照れる月夜も、闇にのみ見つ

○

2812 吾妹子に戀ひて術なみ、白栲の袖反し夜の夢に見えきや

2813 吾が夫子が袖かへす夜の夢ならし。誠も、君に會へりしが如(ゴト)

○

2814 吾が戀ひは慰めかねつ。ま日(ケ)長く夢に見えずて、年の經ぬれば

2815 ま日(ケ)長く夢にも見えず、絶えぬとも、我が片戀ひは、止む時もあらむ

○

2816 うらぶれて物な思ひそ。天雲(アマ)のたゆたふ心、我が思はなくに

2811 あなたの此お便りを聞かう、と思うて居たからか、照つて居るお月樣さへ、目に著かず、闇と見做して、暮して居ました。

2812 いとしいお前に焦れて、やる瀨ないので、著物の袖を裏返して、禁厭して寢たが、お前の夢に、私が現れたか。

2813 ほんに、あなたがその袖を裏返して、お寢(ヤス)みになつた其晩に、それで見たのに違ひない。實際、あなたに會うたやうでした。

2814 自分の此焦れる心は、慰(ナグ)めようにも、慰めかねてをります。長い間、夢にもあなたが、現れて下さらなくて、年がたちましたので。

2815 日數長く、夢にも現れて下さらずに、二人の間が止つても、私だけがして居る片思ひの心は、止る時もありますまい。

2816 そんなにしよんぼりと萎れて、心配して下さるな。あなたをば焦れる心が、怠るやうな氣持ちは、私は、少しもしてゐません。

2817 うらぶれて物は思はじ。水無川（ミナシ）、ありても、水は行くとふものを

○

2818 杜若佐紀野（カキツバタサキヌ）の菅（スゲ）を笠に縫ひ、著む日を待つに、年ぞ經にける

2819 おしてる難波菅笠（スガ）。おき古し（フル）、後（ノチ）は誰著む笠ならなくに

○

2820 かくだにも妹を待ちなむ。さ夜更けて出で來し月の、傾（カタブ）く迄に

2821 木の間より移ろふ月の影を惜しみ、立ちもとほるに、さ夜更けにけり

○

2822 栲領巾（タクヒレ）の白濱波の寄りもあへず、荒ぶる妹に戀ひつゝぞをる

2817 あなたの仰つしやる通り、悲觀して心配はせずにをりませう。水の流れない水無川でも、さうして居る中には、水が流れるやうになる、といふことですから。

2818 菖蒲の咲いて居る佐紀沼の菅をば、笠に縫うて著られるやうになる日を、待ち受けて居る中に、年が立つて了うた。（此は、思ひを掛けた女が、まだ子どもだと思うて居る中に、年月が立つて、立派な女になつた。今こそ自分と會うてくれ、と云ひ込んだ歌。）

2819 あなたは、此難波の名物の菅笠をうつちやつておいて、古くして了うて入らつしやる。一體怎うしたお心か知りませんが、將來もあなたの外に、誰が著ることの出來る笠ではないのに。（今迄、自分を捨てゝおいた怨みに、更に、將來を願ふ意味を添へたのである。）

2820 こんなに迄いとしいお前を、待ち焦れて居なければならないのか。夜更けて出て來た月さへも、傾いて了ふ迄。

2821 木の間を運行して行く、月の影が惜しさに、うろ〳〵歩いてゐる中に、夜が更けたのです。

2822 白濱に立つ波が、岸に寄ることもし切らない中に、荒れ騷ぐやうに、自分に心を寄せもしないで、怨み遠のいて行く、自分に寄りつきもしない、いとしい人に焦れて居ることだ。

2823 かへらまに、君こそ、我に栲領巾（タクヒレ）の白濱波の寄る時もなし

○

2824 思ふ人來むと知りせば、八重葎覆（オホ）へる庭に、玉敷かましを

2825 玉敷ける家も何せむ、八重葎覆へる小家（コヤ）も、妹とをりてば

○

2826 かくしつゝあり慰めて、玉の緒の絶えて別れば、術（スベ）無かるべし

2827 紅の花にしあらば、衣手に染め著け持ちて、いぬべく思ほゆ

□譬喩の歌

2828 紅の濃染（コソ）めの衣（キヌ）を下に著ば、人の見らくに、匂ひ出でむかも

2823 白濱に寄せる波ではないが、そんなに仰つしやるあなたの方が、却つて私にお寄りつきなさる時とては、ないではありませんか。

2824 戀しい人が、御出でになると知つて居たら、汚い、幾重にも葎の生えて居る庭へ、玉を敷いて、お迎へ致しませうのに。

2825 玉を布いた家も、何の比べ物にならうか。譬ひ葎が、一杯生え茂つて居る小屋でも、いとしい人と二人をつたら、それに、何物が勝つことが出來ようか。

2826 こんなにして心を慰めて居乍ら、間が切れて、別れて了うたら、嘸、遣る瀬ないことであらう。

2827 私は遠い旅に行くが、いとしい人が、紅の花でゞもあつてくれたら、袖に染め著けて、それを持つて、旅へ行きたいと思はれる。

2828 紅で濃く染めた著物を下に著てをつたなら、人が見るのに、色がほんのりと移り出るだらう。（そのやうに、心の底に戀ひ人を持つて居たら、自然と、人に悟られるであらう。）

2829 衣しも多くあらなむ。取り換へて著なばや、君が面忘れたらむ

2830 梓弓弓束巻き換へ、あて見てば、更に引くとも、君がまに〳〵

*

2831 雎鳩居る洲にをる舟の、夕汐を待つらむよりは、われこそまさめ

2832 山川に筌を伏せ置きて、守りあへず、年の八年を我が盗まひし

*

2833 葦鴨のすだく池水、溢るとも、設け溝の上に、我越えめやも

2834 大和の室生の毛桃、本繁く言ひてしものを。ならずばやまじ

2835 眞葛延ふ小野の淺茅を、心ゆも人引かめやも。我ならなくに

2836 三島菅。未苗なり。時待たば、著ずやなりなむ。三島菅笠

*

2837 み吉野の水隈が菅を編まなくに、苅りのみ苅りて、亂りなむとや

*

2838 川上に洗ふ若菜の、流れ來て、妹が邊の瀬にこそ寄らめ

2839 かくしてや、なほやなりなむ。大荒木の浮田ノ杜の標ならなくに

*

2840 幾ばくも降らぬ雨故、吾が夫子が御名の甚く、激湍も轟ろに

2829 自分に著物が、澤山あつてくれゝば好い。さうすれば、それを取り換へて著たら、その面白さに氣が紛れて、いとしい人のことは、忘れて居るだらう。

2830 矢を的に中て試みた後で、又梓弓の握り場所を卷き換へて、改めて又引きなされても、それはあなたの御心任せです。（今は人の妻である女が、氣に入つたら、自分を、元の男から離縁させて、娶つてくれても好い、と述べたのである）

2831 潮が干たので、雎鳩の下りて居る海の洲に舟を泊めて、潮のさして來るのを、舟が待つて居るよりも、自分のあなたを待つて居る心の方が、優つてをりませう。

2832 山川の流れに、筌を伏せて置いて、魚の這入るのを見て居るやうに、いとしい人の親達が、大事にして居た人を、守り切れない間に目を盜んで、八年の長い間を自分が、人目忍んで通うて居たことだ。

2833 葦の中に棲む鴨のたかる、池の水が溢れても、外には、その水を流す用意の溝がある。そのやうに、自分は如何に思ひ餘つても、人目に附くやうに、世の制限を乘り越えて行つたりはすまい。

2834 大和の室生にある毛桃の木が、根元で茂つて居るやうに、人がうるさく、評判を立てたのだから、どんなことがあつても、二人の關係が、成立しないでは斷念はすまい。

2835 葛の這うて居る野の茅花を、誰が引くといふことがあらうか。その茅花には、ちやんと持ち主がある。その持ち主なる自分が、をらないではないのに。

2836 三島の菅はまだ苗である。併しそれだからというて、待つて居る中に、自分が著られぬやうになるかも知れない。三島の菅笠をば。（未若いと思うて油斷してゐる中に、他の男が、少女を奪うて了ふかも知れない。）

2837 吉野川の水の入りこんだ隈に、生えてゐる菅をば、編みもしないで居て、それで刈つたが上に刈ること許りをして、とう〳〵果てには亂して了はうといふのか。いとしい人を手にもえう入れないで、一所懸命に心許りを勞して、果ては、心が亂れても關はない、と自分が思うて居るのか。（自嘲の歌。傑作。）

2838 上流で洗うた若菜が流れて來て、いとしい人の家の邊の川の瀬に寄るやうに、自分の身をもなしたいと思ふ。

2839 こんなにして、果ては、大荒木の浮田の社の杜に著けた標ではないが、とう〳〵無駄なものとなつて了ふであらう。

2840 （焦れ〳〵て、幾度も言ひ入れて見たが、驗がない。大荒木の杜に標をさした所で、それは神の領有地で、無駄な努力になるやうに、無駄骨折りになるであらう。）
そんなに甚くも降らない雨だのに、其雨の爲に、早瀬が盛んに流れるやうに、そんなに度々逢うた、といふ訣でもないのに、いとしい方の評判が、世間に傳へられたことだ。

萬葉集　卷第十二

□正(マサ)しく心緒を述べた歌

2841 我が夫子が朝明(ア)の姿、よく見ずて、
今日の間を戀ひ暮すかも

2842 我が心すべなく思(モ)へば、あらた夜の
一夜も落ちず、夢にし見ゆる

2843 うるはしと吾(ワ)が思(モ)ふ妹を。人皆の行
く如見めや。手に枕(マ)かずして

2844 此頃の寢(イ)の眠(オ)らえぬに、敷栲の手枕
枕きて、寢まく欲りこそ

2845 忘るやと物語りして、心やり過ぐせ
ど過ぎず。尙ぞ戀しき

2846 夜も寢ねじ。安(ア)くも坐らじ。白栲の
衣も脫がじ。直接(タヾ)にあふ迄

2847 後も逢はむ。我をな戀ひそと、妹は
言へど、戀ふる間に年は經につゝ

2848 直接(タヾ)に會はず、あるは宜(ウベ)なり。夢に
だに、何しか、人の言(コト)の繁けむ

2849 ぬば玉の其夢にだに見え續げや、袖
乾す日なく、我が戀ふらくを

2850 現には直接(タヾ)にも逢はず。夢にだに逢
ふとは見えよ。我が戀ふらくに

□物に寄せて思ひを陳べた歌

2851 人見れば上を結びて、人見ねば下紐
開(ア)けて、戀ふる日ぞ多き

2852 人言の繁けき時に、吾妹子が衣(キヌ)にあ

2841 いとしい人が、夜の引き明け方に、お歸りなさるお姿を、
好く〳〵見ておかなかつた爲に、今日一日、焦れ暮して居
ることだ。（單純に、優艶に、而も彈力に富んだ歌。）

2842 自分の心でやる瀨なく思うて居る爲に、每晩々々一晩の落
ちもなく、いとしい人の姿が、夢に見えることだ。

2843 可愛いと思うて居る、いとしい人を、世間一般の行路の人
の如く、その手に、手枕をもしもせずに、空しく見過して
よいものか。

2844 此頃の晩の、寢るに眠られないのにつけて、いとしい人の
手枕を、枕として寢たいことだ、と思うて居る。

2845 あゝもすれば、かうもすれば忘れるだらうか、と色々話を
したり、冗談を言うたりして、心配をなくしようと思うて
も、なくならないで、一層戀しいことだ。

2846 夜寢もすまい。又安閑とも坐つても居まい。それから著物
も脫がずにをらう。直接にお目にかゝる迄。

2847 將來きつと會はうから、私にお焦れなさるな、といとしい
人は言うて居るが、焦れて居る中に、こんなに年が立つた
のだから、この後、何時逢へるか、賴りない次第だ。

2848 直(ヂカ)に逢はないのは、尤だ。二人の間は、夢で見ても、どう
してこんなに、人の口がうるさいのだらう。

2849 せめては夢にだけなりと、途切れないで、續けて出て來て
くれゝばよい。涙の爲に、袖を干す時さへもなく、私が焦
れて居るのに。

2850 正氣で居ては、直接に逢ふことはない。せめて夢にだけで
も、いとしい人に、逢ふといふ風であつてくれゝば好い。
自分は、こんなに焦れて居るのだから。

2851 人が見ると、上表(ウハベ)だけを嚴重に見せかけておいて、人が見
ないと、下裳の紐を解(ホド)いて、いとしい人を待つて居る日が、
數重つたことだ。

2852 人の評判がうるさい時分に、いとしいあの人が、著物であ

りせば、下に著ましを

2853 眞玉つく遠をしかねて思へれば、一重の衣獨り著て寢む

2854 白栲の我が紐の緒の絕えぬ間に、戀ひ結びせむ。逢はむ日迄に

2855 新墾りの今作る道。爽かにも聞えけるかも。妹が上のこと

2856 山城の石田ノ杜に、心鈍く手向けしたれや、妹に逢ひ難く

2857 菅の根のねもころ〳〵に照る日にも、干めや我が袖。妹に逢はずして

2858 妹に戀ひ寢ねぬ朝に吹く風し、妹に觸りなば、我が共觸れね

2859 飛鳥川。高川避かし越えて來つ。まこと、今宵は、明けず行かめや

つたら、目に附かないやうに、內らに著ように。

2853 離れて居て、遠方迄かけて思ひ込んで居るので、夜になれば、爲方なく、二人著るべき筈の一重の衣を、一人著て寢て居ることだ。

2854 うつかりすれば、人との中が切れて了ふかも知れない。それで其前兆として、下裳の紐の緒が切れるだらうが、其切れない中に、今度は、此戀ひ結びの禁厭をしておかう。再逢へる日迄の間。

2855 新しう野をば切り開いて、近頃拵へた新開の道路ではないが、いとしい人の身に關することをば、聞くさへ心持ちよく聞かれたことだ。

2856 山城の國の石田の杜の神に、鈍なことにも、手後れして、幣を獻上した爲にか、いとしい人に逢はれないことよ。

2857 しみ〴〵と照つて居る日の光りにも、自分の袖は乾かうか。いとしい人にも、逢はないで居るのに。

2858 いとしい人に焦れて、寢ないで居た朝に吹く風が、今私に觸つて居るやうに、觸ることが出來れば、いとしい人にも吹き當つてくれ。

2859 水の高く出た飛鳥川をば、馬に除け〳〵させ乍ら、越えて、やつとの思ひで、會ひに來たことだ。そんなにして、折角來たのだから、今夜は實際、夜の明けない中には、歸りともない。歸りはしない。

2860 八釣川。水底絕えず逝く水の、續ぎてぞ戀ふる。此年頃は

2861 磯の上に生ふる小松の名を惜しみ、人に知らえず、戀ひ渡るかも

2862 山川の水陰に生ふる山茅の、止まずも妹が思ほゆるかも

2863 竹葉野に立ち、神寂ぶる菅の根の、懃ろ誰故、我が戀ひなくに

右、二十三首は、人麻呂集に見えて居る。

□正しく心緒を述べた歌

2864 我が夫子を今か〳〵と待ちをるに、夜の更け行けば、嘆きつるかも

2865 玉釧枕き寢る妹もあらばこそ、夜の長けきも、嬉しかるべき

2860 八釣川の水が切れて、水の底が出て了ふといふことがなく、始終水が流れて居るやうに、續け樣に、此幾年以來、焦れて居ることだ。

2861 石の上に生えて居る小松ではないが、名（根）即、評判の立つのが嫌さに、人には訣らないやうに、焦れ續けて居ることだ。

2862 山の中の流れの中に生えて居る、山の茅ではないが、止まる時もなく、いとしい人が思ひ出されることだ。

2863 竹葉野に生えて、古めかしく、神々しく擴つて居る菅の根ではないが、外の誰の爲だとて、私がこんなに、焦れて居るのではない。あなたの爲だ。

2864 いとしいお方が、今にもお越しなさるか。今にも見えるか、と待つて居る中に、夜が更けて行くので、嘆息をついたことだ。

2865 その手を枕として、共に寢るいとしい人がをつたら、それは成程、此長い夜も、嬉しくあるだらう。

2866 人妻に言ふは誰(タ)が言。さ衣の此紐解けと、言ふは誰が言

2867 かく許り戀ひむものぞと、知らませば、その夜はゆたにあらましものを

2868 戀ひつゝも、後に會はむと思へこそ、己(オノ)が命を長く欲(ホ)りすれ

2869 今は我(ワ)は、死なむよ。吾妹。會はずして思ひ渡れば、安けくもなし

2870 我が夫子(セコ)が來むと語りし夜は過ぎぬ。しゑや、更々しこり來めやも

*

2871 人言の讒(ヨコ)すを聞きて、玉桙の道にも逢はじと、言へる吾妹子

2872 會はなくも憂(ウ)しと思へば、彌益しに、人言繁く聞え來るかも

2866 私は、人の妻たるものです。その私に、彼此と言ふは、誰が言うて居る言だ。一體、著物の此紐を解いて、打ち解けよと言ふのは、一體誰の語ですか。(熱情の燃燒と、音律の明快とを兼ねた傑作。)

2867 こんなに迄、焦れてをらねばならぬものと訣つてたら、あの會うた時は、もつと餘裕を持つて、冷淡にしてをればよかつたのだが。

2868 焦れて居乍らも、今は會へないで居ても、後には會へようと思うて居るから、こんな辛い中にも、自分の命をば長くあるやうに、望んで居るのだ。

2869 最早自分は死にませうよ。いとしい人よ。お前に會はないで、思ひ續けて居ると、心が休まることはちつともない。

2870 いとしい方がやつて來よう、と仰つしやつた約束の夜は、過ぎて了うたことだ。あゝ〳〵これからは、元々通り、しつ切りなしに、始終行かうと言うて居られたのも、駄目なことで、こんなことでは、元々通り盛んにやつて來られる氣遣ひがあるものか。

2871 人の評判で惡口いふのをば聞いて、態々(ツザヽ)と會ふのは固より、道で會うても物も言ふまい、と言うて來た、いとしい人よ。

2872 會ふことの出來ないのが殘念だ、と思うて居る所へ持つて來て、彌甚(イヨヽヒド)く、人の評判がうるさく聞えて來ることだ。(佳作。)

2873 坊(サト)人も語り續ぐがね、よしゑやし、戀ひても死なむ。誰が名ならめや

2874 確かなる使ひをなみと、心をぞ使ひに遣りし。夢に見えきや

*

2875 天地に少し至らぬ健男(マスラヲ)と、思ひし我や、雄心も無き

2876 里近く家やをるべき。水無月の祓(ハラヘ)もしつゝ、戀ひの繁けく

2877 何時はなも、戀ひずありとはあらねども、うたて、此頃、戀ひの繁きも

2878 ぬば玉の寢ての夕の物思ひに、割れにし胸は、止む時もなし

2879 み空行く名の惜しけくも、我はなし。會はぬ日多(マネ)く、年の經ぬれば

2873 えゝ儘よ。處の人々も語り傳へるやうに、焦れて死なう。そして何の爲に死んだ、といふことになれば、外の人の評判ではなく、あなたの冷淡な爲に死んだ、といふ評判が立つだらう。幾らなりと冷淡にして下さい。

2874 確かな信頼するに足る使ひがないので、それで心をば使ひとして、あなたの方へやつた。夢にお目にかゝつたでせうか。

2875 天地の間に、大方行き屆く程の立派な男だ、と自信して居た自分が、此頃一向男らしい心持ちもないことだ。戀ひの爲に、こんなことでよいのだらうか。(男性の悲哀を直敍してゐる。傑作。)

2876 いとしい人の住んでゐる里に近く、家を構へるものではないのだ。そんな所に住んで居る爲、そんな思ひをなくする爲に、六月の禊ぎ迄し乍ら、まだ非常に戀しい心が、止まないことだ。

2877 何時というて、焦れて居ない、といふことはないが、情ないことだ。此頃は取り分けて、焦れる心が募つて來たことだ。

2878 あの一つに寢た晩以來の物思ひで、煩悶して痛んで居る此胸は、何時になつても、治る時はない。

2879 評判は、幾ら空迄立つ程であつても、殘念とは自分は思はない。こんなに思ふことの出來ない日許りが、重つて年が立つたのだからして。

2880 現にも今も見てしが。夢にのみ、手
本枕き寢と見れば、苦しも
2881 立ちて居るすべの便も、今はなし。
妹に會はずて月の經行けば
2882 會はずして戀ひ渡るとも、忘れめや。
いや日に日には、思ひ益すとも
2883 外目にも君が姿を見てばこそ、我が
戀ひやまめ。命死なずば
2884 戀ひつゝも、今日はあらめど、玉櫛
笥明けなむ明日は、いかで暮さむ
2885 さ夜更けて、妹を思ひ出で、敷栲の
枕もそよに、嘆きつるかも
2886 人言は、まことこちたくなりぬとも、
其故に觸らむ我ならなくに
2887 立ちて居る便も知らに、我が心天つ

2880 正氣でをつて、つひ今の間に逢ひたいことだ。夢中で許り、
いとしい人の手を枕にして、寢て居ると見てゐるだけでは、
2881 辛抱出來ないことだ。
立つたり坐つたり、爲方方便も、今はなくなつて了うた。
いとしい人に會はないで、段々年が立つて行くので。
2882 會はないで居て、焦れ續けて居ても、日毎々々に焦れ募つ
て來ても、忘れる氣遣ひはなからう。
2883 ちつとも、いとしい人の顏が見られない。せめて側からで
も、あの人の姿を見たならば、そしてその時迄、幸ひに命
があつて、生きてをつたら、自分の戀ひは、それで滿足し
て、止むであらうけれども、それ迄、命があるかどうか、
覺束ない。
2884 焦れ乍らも、今日はまあかうして、辛抱してゐるにしても、
又明日夜が明けて、その一日も、かうして居なければなら
んと思ふと、どうして明日が、暮せようか、と思ふことだ。
2885 夜が更けて、いとしい人を思ひ出して、枕さへも鳴る許り
に、寢がへりして、起きてゐることだ。
2886 實際他人の言は、どんなに甚くなつても、その爲に邪魔せ
られる、私ではない。
2887 立つたり坐つたりする積りもないやうな、氣が致します。

空なり。地は蹈めども
2888 世の中の人の言葉と思ほすな。誠ぞ、
戀ひし。會はぬ日多み
2889 いで如何に、我がかく戀ふる、吾妹
子が、會はじと言へることもあらな
くに
2890 ぬば玉の夜を長みかも、我が夫子が
夢に夢にし、見え回らむ
2891 あら玉の年の緒長く、かく戀ひば、
誠、我命全からめやも
2892 思ひやる術の便も我はなし。會はず
て多く月の經行けば
2893 朝行きて夕は來ます君故に、ゆゝし
くも、吾は、嘆きつるかも
2894 聞きしより物を思へば、我が胸は割

自分の心は、地は蹈み乍ら、うか〳〵と空を行くやうに、
上の空になつてをります。
2888 世間の人のいふ、竝み〳〵の平凡な言だ、と思うて下さる
な。會はない日が重つたので、ほんとうに焦れてをりまし
た。
2889 どうしてまあ、こんなに迄焦れるのだらう。いとしい人が
會ふまい、といふ言を發した訣でもないのに。
2890 いとしいお方が、夢を見れば見るほど、繰り返し〳〵して
見えるのは、夜が長いからだらう。
2891 此通りにして、歲月長く焦れ續けて行くやうだつたら、實
際自分の命が、無事で居よう筈がない。
2892 悲しい心持ちを捨てゝ了ふ方法の、便りも訣らない。會は
ないで居て、月日が澤山立つて行くのにつけて。
2893 あなたはお出かけになつても、直ぐ戻つて入らつしやる。
朝出て夕戻る、といふ暫らくの別れだのに、それに緣起で
もなく、嘆いて居ることだ。
2894 會はないで、評判を聞いたゞけで、物を思うて居た程であ

れて碎けて、鋭心もなし

2895 人言を繁みこちたみ、吾妹子に、いにし月より、いまだ會はぬかも

2896 うたかたも言ひつゝもあるか。我しあれば、地には落ちじ。空に消ぬとも

2897 如何ならむ日の時にかも、吾妹子が裳曳きの姿、朝に日に見む

2898 獨り居て戀ふるは苦し、玉襷かけず、忘れむ事謀りもが

2899 なか〳〵に默もあらましを。あぢきなく相見初めても、我は戀ふるか

2900 吾妹子が笑める眉引き、面影に掛りてもとな。思ほゆるかも

2901 茜さす日の昏れ行けば、術をなみ、

千重〳〵に嘆きて戀ひつゝぞをる

2902 我が戀ひは夜晝分かず、百重なす心し思へば、いとも術なし

2903 いとのきて薄き眉根を、徒らに掻かしめつゝも、會はぬ人かも

2904 戀ひ〳〵て、後も會はむと、慰もる心しなくば、生きてあらめやも

2905 幾ばくも生けらじ命を。戀ひつゝぞ、我は息吐く、人に知らえず

2906 人國に求婚に行きて、大刀の緒もいまだ解かねば、さ夜ぞ明けにける

2907 健男の鋭き心も今はなし。戀ひの奴に、我は死ぬべし

2908 つねにかく戀ふれば苦し。暫くも心安めむ、事計りせよ

り返して嘆いて居ることだ。

2902 自分の戀ひは、夜晝の辨別もなく、心で幾重にも〳〵、思うて居るので、非常に遣る瀬ないことである。

2903 それでなくてさへ、餘り待つて掻くので、非常に薄くなつて居る眉の根をば、やつて來るやうな心持ちを起させて、掻かせておき乍ら、それを無駄にさせて、會うてくれない人だこと。

2904 焦れ〳〵ても、將來は會はう、と宥める心持ちがなければ、夙に死んで居る筈で、今迄生きて居ようか。

2905 さうでなくても、どれ程も生きて居られない筈の命だのに、思ふ人には、その心を知られないで、嘆息許り吐いて居ることだ。

2906 見ず知らぬ外の國へ出かけて、妻を訪問して、まだうち解けて、大刀の緒さへも解かない中に、夜があけたことだ。

2907 立派な男の、しつかりした心持ちも、もうなくなつて了うた。戀ひの野郎の爲に、自分は死んで了ひさうだ。

2908 何時もこんなに焦れて居るのは、辛いことだ。暫らくでも、心を安めてゐる計畫を立てゝくれ。

2909 おほよそに我し思はゞ、人妻にありとふ妹に、戀ひつゝあらめや

2910 心には千重に百重に思へれど、人目を多み、妹に會はぬかも

2911 人目多み、目こそ忍ぶれ。尠くも、心の中に我が思はなくに

2912 人の見て言咎めせぬ夢に、我、今宵至らむ。宿さすな。ゆめ

2913 何時迄に生きむ命ぞ。おほよそは戀ひつゝあらずは、死ぬる優れり

2914 うつくしと思ふ吾妹を、夢に見て、起きて探るに、無きが寂しさ

2915 妹と言へば無禮し畏し。しかすがに、かけまく欲しき言にもあるかも

2916 玉篋會はむといふは、誰なるか。會

2909 好い加減に、お前さんのことを思うて居る位ならば、元々他人の愛人であるあなたに、こんなに焦れたりなどしませうか。

2910 そんなに怨んで下さるな。心中では形容の出來ない程、幾重にも思ひこんで居るのですが、人の見る目がうるさいので、お前さんに會はないで居ることです。

2911 人目がうるさゝに、會ふことは辛抱して居るのだ。併し心中では、淺くは思うて居ないのだ。

2912 人が見ても、咎めて呼び止めるといふことのない夢で、今夜私は參りませう。どうぞ氣をつけて、表をさゝずにおいて下さい。

2913 何時迄、生きて居る人間の生命だ。好い加減に焦れて居る位ならば、死んだ方がましである。

2914 可愛いと思うて居るいとしい人をば、夢で見て、目が覺めてから、幾ら枕元を探つて見ても、居ないのが悲しいことだ。

2915 あなたと私とは、身分が違ふ。其あなたに向つて、妹と言ふのは、禮儀に反いたことだし、畏れ多いことだ。併し乍ら、それはさうだが、あなたにつけて、呼びたい名前ですこと。

2916 一體會はうと言うて入らつしやつたのは、誰方です。（まさ

へる時さへ、面隱しする

*

2917 現にか妹が來ませる。夢にかも、我か惑へる。戀ひの繁きに

2918 大方はなどかも戀ひむ。言擧げせず、妹に寄り寢む年は近きを

2919 二人して結びし紐を、一人して、我は解き見じ。直接に逢ふ迄は

2920 死なむ命こゝは思はず、直にしも妹に會はざる事をしぞ思ふ

2921 處女子は、同じ心に暫しくも止む時もなく、見なむとぞ思ふ

2922 夕されば君に會はむと思へこそ、日の暮るらくも、嬉しかりけれ

2923 直接今日も君には會はめど、人言を

2923 2922 2921 2920 2919 2918 2917

か、あなたではありますまいね。）實際、面と向つて居る時分でも、顏を隱して入らつしやることよ。（音律と情緒と相伴うて、柔かな境地を物語つて居る。佳作。）

2917 正氣で居て、いとしい人がやつて入らつしやつたのか、それとも此は夢で、私が寢ぼけて、と惑ひをして居るのでせうか。餘り甚く、焦れて居る爲に。（女から尋ねて來たのを、男が夢か現か、と狂喜して居る歌。）

2918 やつとの思ひで、いざこざなく許されて、いとしい人と絡み合うて寢る時は、近づいて來て居るのに、好い加減なことで、何を彼此と焦れようか。

2919 二人寄つて結んだ袴の紐を、獨りで、自分は解いても見ますまい。直接に、あなたに會ふ迄は。

2920 羨へて、死んで了ふだらう命、そんなことは、氣にも懸けない。只いとしい人に會はないことをば、殘念に思ふ。

2921 可愛い娘をば、何時迄も變らない心持ちで、ちつとの間でも、止まる時なく會ひたいと思ふ。

2922 日暮れになつたら、いとしいお方に會はうと思うて居るからこそ、日の暮れて行くのさへも、嫌と思はず、嬉しいことである。

2923 今日も直に會はうと思へば、會ふことが出來るだらうが、

繁み、會はずて、戀ひ渡るかも

2924 世の中に戀ひ茂けむと思はねば、君が手本(タモト)を枕(マ)かぬ夜もありき

2925 綠兒(ミドリコ)の爲こそ、乳母(オモ)は求むとへ。乳(チ)飲めや。君が乳母(オモ)求むらむ

＊

2926 悔(クヤ)しくも老いにけるかも。吾が夫子(セコ)が求むる乳母(オモ)に、行かましものを

＊

2927 うらぶれてかれにし袖を、又枕(マ)かば、過ぎにし戀ひや、亂り來むかも

2928 おのがじゝ人死にすらし。妹に戀ひ、日(ヒ)に日(ケ)に痩せぬ。人に知らえず

2929 宵々に我が立ち待つに、蓋しくも、君來まさずば、苦しかるべし

人の評判がうるさゝに、會はないで焦れて居ることだ。

2924 實際二人の間でこんなに、非常にいとしい人が戀しくなる、といふことを考へなかつた爲に、いとしい方の手を枕とせずに、寢た晩もあつた。此位であつたら、よく共寢しておくのに。

2925 一體赤ん坊の爲にこそ、乳母をば探し求めると申しますが、あなたが乳をお飲みなさるのか。其で此頃、お乳母さんを探して入らつしやるのでせう。(此作者は、若い男に挑(イド)まれたので、それに對して、自分を乳母に譬へて、男を嘲笑したもの。)

2926 まああなたが、御親切に仰つしやつて下さつたが、殘念にも、甚く年が寄つたことですね。さうでなくば、あなたの探して入らつしやる、お乳母さんに行きたいのだのに。(此も、先の女の歌。)

2927 焦れて居ることの苦しさに、悲觀して別れて了うた人の袖を、又枕としたら、以前通りに失(ナ)くなつた戀ひが、心を亂して、やつて來るだらう。

2928 人は銘々、思ひ〳〵に死んで行くに違ひない。いとしい人に焦れて、その思ふ人にも知つて貰はないで、一日々々と、痩せ衰へて行くことだ。

2929 每晩私は、立つて待つて居るが、若しもお出でにならないやうになつたら、定めし、術ないことであらうよ。

2930 生ける世に、戀ひとふものをあひ見ねば、戀ひの中にも、我ぞ苦しき

2932 心には燃えて思へど、うつそみの人目を忍び、妹に會はぬかも

2933 あひ思はず、君は在(マサ)めど、片戀ひに我はぞ戀ふる。君が姿を

2934 あぢさはふ目には飽けども、たづさはり言問はなくも、苦しかりけり

2935 あら玉の年の緒長く、何時迄か、吾が戀ひをらむ。命知らずて

2936 今は吾(ア)は死なむよ。我が夫。戀ひすれば、一夜一日も安けくもなし

2937 白栲の袖折り返し、戀ふればか、妹が姿の夢にし見ゆる

2938 人言を繁み、こちたみ、我が夫子を

どう考へて見ても、自分の今生きて居る間には、二人とも戀ひといふものを、經驗すると言ふことがないから、戀ひをし乍らも、自分だけが苦しいことだ。

2932 心中では、燃え立つ許り、熱して思ひこんではゐるが、人目のうるさゝに、いとしい人に會はないで居ることだ。

2933 いとしいお方は、思ひ合うても居て下さるまいけれど、自分だけは、片戀ひにいとしい方の姿を、思ひ焦れて居る。

2934 何時も、目には滿足する程、顏を見て居るが、自分の身に近くをつて、物を言ひかけないことが、心を惱すことである。

2935 何時迄、壽命があることかも訣らないで居て、それで年月長く、かうして何時迄も、長く焦れてをらねばならんか。

2936 もうかうなつては、私は死にませうよ。焦れて居ると、一日一晩たりとも、安らかな心持ちのすることは御座いません。

2937 白栲の著物の袖をば、裏返して焦れて寢る爲に、いとしい人の姿が、夢に現れるのであらうか。

2938 人の評判がうるさく甚(ヒド)いので、いとしいお方を、目には見

目には見れども、會ふよしもなし

2939 戀ひと言へば、薄きことなり。然れども、我は忘れじ。戀ひは死ぬともなか〳〵に死なば易けむ。出づる日の入るわき知らに、吾し苦しも

*

2941 思ひやる便も、我は今はなし。妹に會はずて年の經行けば

2942 吾が夫子に戀ふとにしあらし。幼兒の夜泣きをしつゝ、眠ね敢てなくは

2943 吾命の長く欲しけく。詐をよく爲る人を、報ゆ許りを

2944 人言を繁みと、妹に會はずして、心の中に戀ふる。此頃

2945 玉づさの君が使ひを待ちし夜の、餘て居乍ら、會ふ方法もなく、暮して居ることだ。

2939 成程戀ひといふと、詰らないことだ。併し自分は、其詰らん戀ひの爲に、焦れ死んでも、いとしい人のことは忘れまいよ。

2940 こんなにして生きて居るよりは、一層死んだら、心がゆつたりするだらう。出た日が這入つたか、といふ區別も訣らずに、日中も晩も、同じに暮して居る自分は、術ないことだ。（誇張だが、誠實味の漲つた誇張で、讀者に深い不安を懷かせない。傑作。）

2941 煩悶をうつちやる手段も、今はもう、訣らなくなつて了うた。いとしい人に會はないで、年が立つたので。

2942 私が、こんなに赤ん坊のやうに、夜になると泣いて、寢ることも出來ませんのは、戀しいあなたに焦れて居るとて、さうなるのでありませう。

2943 私の命が、長くあることが願はしいことだ。何故かと言へば、人を誑して詐ることの上手な人に、爲返しをしてやりたい許りで、さう思ふ。

2944 人の評判が、うるさいからといふので、いとしい人に會はないで居て、幾日以來、焦れて居ることだ。

2945 もう今では、あの人と交通しなくなつて焦れてるのだが、あの人から來る使ひを、待ち焦れて居た、あの時分の夜の

2946 玉桙の道に行き會ひて、外目にも見れど、よき子を、何時しか待たむ

2947 門に出でゝ我がこい伏すを、人見けむかも。

2948 術なくも出で歩きてぞ、家の邊見し』

2949 明けむ日はその門行かむ。出でゝ見よ。戀ひたる姿あまたしるけむ

2950 うたてある心いぶせし。事計りよくせ。吾が夫子。會へる時だに

2951 我妹子が夜戸出の姿見てしより、心空なり。地は蹈めども

2952 海石榴市の八十の衢に立ち馴し、結びし紐を解かまく、惜しも

我が齡し衰へぬれば、白栲の袖のな

波ぞ。今も寢ねぬ夜の多き

影響が、まだ殘つて居て、未に眠らないことが多くあることだ。

2946 道で行き合うて、傍から見ても、美しう思はれる位のあの人を、何時になれば、自分の家へ待ちをふせて、來さすことが出來ようか。

2947 表に出て、自分が倒れて寢てゐるのを、人が見附けておいたことだらう。遣る瀨なさに、出歩いて、あの人の家のある邊を見たことであつた。

2948 幾ら待つても、入らつしやらない。夜が明けたら、あなたの表を通りませうから、御覽下さい。一夜焦れて居た容子が、非常に、はつきりと訣ることでせう。

2949 あなたの御心は、嫌な陰鬱なお心です。せめて會うた時だけでも、そんなにしてをらずに、よく此から先のことを、考へて下さいませ。あなたよ。

2950 いとしい人が、夜表へ出て歸つて行く姿を見てからといふものは、體は、地を蹈んで居るが、心は、上の空になつて居る。

2951 あの椿市の里の、道の澤山會ふ辻で、彼方此方と歩き廻つて、その時會うた人が、結んでくれた紐を解くのは、餘り惜しいことだ。（此歌を、椿市の歌垣の時に、會うた女を思うたのだ、といふのは、根據のないことだ。）

2952 自分が段々、年が老年に衰へかゝつて行くにつれて、著て

れにし君をもぞ思ふ

2953 君戀ふと我が泣く涙、白栲の袖さへ
漬ぢて、せむ術もなし

2954 今よりは逢はじとすれや、白栲の我
が衣手の、乾る時もなき

2955 夢とかも思ひ分かぬや。月多く離れ
にし君が、言の通へば

2956 あら玉の年月かねて、ぬば玉の夢に
ぞ見ゆる。君が姿を

2957 今よりは、戀ふとも妹に會はめやも。
床の邊去らず、夢に見えこそ

2958 人の見て、言咎めせぬ夢にだに、止
まず見えこそ。我が戀ひ止まむ

2959 現には言は絶えたり。夢にだに、續
ぎて見えこそ。直接に會ふ迄に

居る白栲の衣ではないが、此迄馴れ合うて來た、あの人のことをば思ふ。

2953 あの方に焦れるので、自分の泣く涙が、白栲の著物さへ、ぼと〳〵に濡して、何とも爲方がない。

2954 もう今後は會ふまい、と思うて居る爲か知らんが、自分の白栲の袖が、乾く間もなく、涙で濡れて居る。

2955 夢か現かと區別して、考へることが出來ぬことよ。幾月も長い間、と絶えて居つた人の便りが、やつて來たので。

2956 年月を幾つもかけて、いとしい方の夢が、幾つも續いて現れることだ。

2957 是からは、幾ら焦れても、いとしい人に會はれる氣遣ひはない。毎晩、寢床の邊を離れることなく、始終、夢に現れてくれ。

2958 人が見ても、見咎めて、呼び止めたりすることのない、その夢にでも、現れてくれ。さうすれば、自分の焦れる心が休まらう。

2959 起きて正氣で居る間は、便りもとぎれて交通しないで居るが、せめて夢にだけは、直接に會ふことの出來る迄は、とぎれることなく、續けて會うてくれ。

2960 うつそみの現し心も、我はなし。妹
をあひ見ずて、年の經ぬれば

2961 うつそみの常の言と思へども、續ぎ
てし聞けば、心は和ぎぬ

2962 白栲の袖枕かず寢る、ぬば玉の今宵
は、早も明けば明けなむ

2963 白栲の袂ゆたけく、人の寢る熟睡は
眠ずや、戀ひ渡りなむ

□物に寄せて思ひを陳べた歌

2964 かくしのみありける君を。衣にあら
ば、下にを著むと、我が思へりける

2965 橡のあはせの衣の裏にせば、我强
ひめやも。君が來まさぬ

2966 紅の薄染衣、淺はかにあひ見し人に、
戀ふる頃かも

此頃では、正氣も、自分にはもうない。いとしい人をば見もしないで、年が段々立つたので。

2961 此人間世界のありふれた言だとは思ひ乍ら、いとしい人の便りをば、絶えることなく、始終聞くので、心は慰まつたことである。

2962 いとしい人の白栲の袖を、枕とせずに寢る今晩は、常なら惜しむのであるが、明けるなら、早く明けても好い。

2963 白栲の袂が、ゆつたりして居るやうに、落ち著いて、他の人がするやうな、熟睡して眠ることがなく、何時迄もかうして、續けなければならんか。

2964 こんな風に、つれない人だつたのに、其人の爲に、若しも著物だつたら、下に重ねて、身を離さずに著て居よう、と思うたことだ。馬鹿なことだつた。

2965 橡染めの袷の著物ではないが、あなたを好い加減に（裏にせば）思うて居たら、無理に入らつしやいと言ひませうか。思うて居ればこそ、强ひて來て下さいといふのです。それに、あなたが來て下さらないのです。

2966 紅の薄色染めの著物ではないが、つひ一寸見たゞけの人の爲に淺はかにも、焦れて居る此頃だ。

2967 年の經ば見つゝ忍べと、妹が言ひし
衣の縫ひ目、見れば哀しも

2968 橡(ツルバミ)の單衣(ヒトヘゴロモ)のうらもなく、あらむ
子故に、戀ひ渡るかも

2969 解衣(トキギヌ)の思ひ亂りて、戀ふれども、何
の故ぞと問ふ人もなし

2970 あら染めのあさらの衣、淺はかに思
ひて、妹が會はぬものかも

2971 大君の鹽燒く海人(アマ)の葛衣(フヂ)、穢(ナ)れはす
れども、彌珍(イヤ)しき

2972 赤衣(ギヌ)の直裏衣著(ヒタウラゴロモ)まく欲り、我が思ふ
君が、見えぬ頃かも

2973 眞玉つく遠近(ヲチコチ)かねて結びつる、我が
下紐の、解くる日あらめや

2974 紫の帶の結びも解きも見ず、もとな

2967 別れる時、此儘長く會へなければ、之を見乍らわたしのことを思ひ出してくれ、といとしい人のいうた、その著物の縫ひ目を見ると、悲しいことだ。

2968 橡染めの單衣ではないが、何の隔てもなくをる人の爲に、焦れ續けて居ることだ。

2969 解いた著物ではないが、思ひ亂れて焦れて居ても、何の爲に、怎うしてさうだ、と問うてくれる人もない。

2970 あら染めに染めた、薄色の著物ではないが、自分の心を淺はかなものと思うて、いとしい人が、自分に會うてくれないことだ。

2971 天子に奉る御料の、鹽を燒く海人の葛衣の、なれてよれよれになつてをるのではないが、あの方と自分は、馴れて近付き過ぎて居るが、それでも飽かず、益、珍しいやうな心持ちがすることだ。

2972 赤布で拵へた、無双の著物をば著たく思ふやうに、自分の物としたく思うてゐる、いとしいお方が、お見えにならぬ此頃である。

2973 近いことは元より、遠い將來迄かけて解くまい、というて結んだ、自分の下裳の紐が、何時迄たつても、解かれる時が來るものか。あなた以外には、誰にも許しは致しません。

2974 自分がして居る紫色の帶の結び目も、解いても見ないで、

や、妹に戀ひ渡りなむ

2975 狛錦(コマニシキ)紐の結びも解きさけず、齋(イハ)ひて
待てど、驗(シルシ)なきかも

2976 紫の我が下紐の色に出でず、戀ひか
も痩せむ。逢ふよしをなみ

2977 何故か思はずあらむ。紐の緒の心に
入りて、戀しきものを

2978 まそ鏡見ませ、吾が夫子(セコ)。我がかた
み持たらむ時に、會はざらめかも

2979 まそ鏡直目(タダメ)に君を見てばこそ、命に
向ふ我が戀ひ止(ヤ)まめ

2980 まそ鏡見飽かぬ妹に逢はずして、月
の經行けば、生けるともなし

2981 祝等(ハフリラ)が齋(イハ)ふ神籬(ミモロ)のまそ鏡、掛けて偲(シヌ)
びつ。會ふ人毎に

2975 自分の狛錦の下裳の紐も、人の爲には解き放さずに、他の者は近寄せずに、愼んで、戀しい人を待つて焦れるけれど、そのかひがないことだ。

2976 紫染めの自分の下裳の紐ではないが、色にも出さないで、會ふ手段がないので、焦れて痩せてをらねばならんか。

2977 紐として通した緒が、縫ひ目に入りこんで了うたやうに、深く浸みこんで、戀しいのに、どうして思はずに居られませうか。

2978 今、わたしの身代りとしてさし上げます、此磨ぎ上げた鏡を御覽下さい。此身代りを取り出して、御覽なさる時分には、別れて居ても、顏を見合せない、といふことがありませうか。見れば今見るやうに、わたしの顏が映るだらう。

2979 直(ダ)にあなたを見ることが出來たならば、さうしたら此命懸けの、自分の戀ひも止(ヤ)まりませう。

2980 見ても見飽かぬ、いとしい人に會はないで、一月も立つて行くので、生きて居るやうな氣もせない。

2981 神主達が、謹んで仕へて居る、神の下(オ)りられる場所に、据ゑる鏡ではないが、誰を見ても、人に會ふ度に、心にかけて浮べる、いとしい人のことを思ひ出して居ることだ。

2982 針はあれど、妹しなければ、著(ツ)かめ
やと、我を惱(ナヤマ)し絶ゆる、紐の緒
2983 狛劍(コマツルギ)我が心ゆゑ、外にのみ見つゝ
や、君を戀ひ渡りなむ
2984 劍大刀名の惜しけくも、我はなし。
此頃の程の戀ひの繁きに
2985 梓弓末はし知らず。然れども、まさ
かは、君に寄りにしものを
2986 梓弓引きみ緩(ユル)べみ、思ひ見て、已(スデ)に
心は寄りにしものを
2987 梓弓引きて緩(ユル)べぬ健男(マスラヲ)や、戀ひとふ
ものを、忍(シヌ)びかねてむ
2988 梓弓末の中頃弛(タユ)めりし君には會ひ
ぬ。嘆きは止(ヤ)めむ
2989 今更に何か思はむ。梓弓引きみ、緩

2982 縫ふべき針はあつても、いとしい人が居ないのに、縫ひ著
けることが出來るか、といふ風に、自分を苦しめて、紐が
切れたことだ。
2983 自分の心であるのに、それがどうとも出來ないで、その心
の爲に、いとしい人を外から見て、焦れ續けてをらねばな
らんか。
2984 最早自分は、自分の名が、どんなに出ても、殘念と思はな
い。此頃の焦れる心の、甚いのには叶はないから。
2985 將來かけては、好く訣らない。併し目前、今迄あなたに片
寄つて、思うてをりましたのに。
2986 或時は強く思ひつめ、或は稍緩めて思うては居たが、心で
は、夙(ハヤ)の昔から、あなたに片寄つて焦れてゐたのに。
2987 梓弓を引いて、緩めないやうに、心に油斷のない、立派な
男であり乍ら、戀ひといふものを、堪へかねる筈がないの
に、自分は意氣地なくも、戀ひの爲に、屈託して居る。
2988 末かけて約束したその中途で、弛(ダン)んでやつて來なかつたあ
の方に會ふことが出來た。もう嘆くことを止(ヤ)めませう。
2989 間には思ひつめた時も、又幾らか、弛んだ時もあつたが、
ともかく、あなた一人に、心をば傾けてをつたものであり

べみ、寄りにしものを
2990 處女等が生麻(ウミヲ)の線(タヽリ)柱うちかけて、績(ウ)
む時なしに、戀ひ渡るかも
2991 たらちねの母が養(カ)ふ蠶(コ)の繭籠(ゴモ)り、い
ぶせくもあるか。妹に會はずして
2992 玉だすきかけねば苦し。かけたれば、
繼ぎて見まくの欲しき君かも
2993 紫に染(シ)めてし纈(カウ)。華やかに今日見る
人に、後戀ひむかも
2994 玉藻かけぬ時なく、戀ふれども、何
ぞも、妹に會ふ時もなき
2995 逢ふよしの出で來む迄は、疊薦隔編(ゴモヘア)
み數々(シヾ)に、夢にし見てむ
2996 白髪(シラガ)づく木綿(ユフ)は花もの。言(コト)こそは嚴(イツ)
の榊の、本忘らえね

ますのに、今頃になつて、あなたは何を案じて、私の心を
疑うて、入らつしやるのですか。
2990 娘達が、絲に績み合せる、麻をかけたたゝりに、麻をかけ
た儘で、績み合せずに、捨てゝあるやうに、私とあの人と
は、一つになる時も訣らないで、焦れ續けて居ることだ。
2991 お母さんの養うて居る蠶が、繭に籠つて居るのではない
が、いとしい人に會はないで、心が屈託することだ。
2992 心に思ふまいとするのは、苦しいことだ。私は常日頃、心
の中に思うてゐるので、絶えることなく、見たい所のいと
しいお方よ。
2993 紫色に染めた頭飾りではないが、華やかな人だ、と今眺め
て居る此人に、將來、焦れることになるだらうよ。
2994 心に思ひ浮べない時もない程、いとしい人に焦れて居るが、
どうしたことだか、いとしい人に會ふ折りもないことだ。
2995 會へる訣が出來る迄は、疊をば幾度もゝ〳〵編み返すやう
に、繰り返して、會ふことを夢に見てゐよう。
2996 あなたは、御上手だ。言だけでは、神樣にさし上げる尊い
榊ではないが、本（以前）のことが、忘れられないと仰つ
しやいますが、よく考へて下さい。その榊の枝に附いてゐ
るあの木綿は、飾り物ですからね。

2997 石ノ上布留の高橋、高々に、妹が待つらむ。夜ぞ更けにける

2998 水門入りの葦分け小舟。障り多き今來む我を。たゆむと思ふな

2999 水を多み、上げ田に種蒔き、稗を多み、選えしからぞ。我が獨り寢る

3000 魂あはゞあひ寢むものを。小山田の鹿田守る如、母し守らすも

3001 春日野に照れる夕日の、よそにのみ、君をあひ見て、今ぞ悔しき

3002 足引きの山より出づる月待つと、人には言ひて、妹待つ。我を

3003 夕月夜、明時闇の、仄かにも見し人故に、戀ひ渡るかも

3004 久方の天つみ空に照れる日の、失せ

3004 いとしい人の住んで居る、あの石の上の邊の布留の川に懸けた、高い橋ではないが、高々と、いとしい人が待ち焦れて居るだらうよ。あゝ夜が更けたことだ。

3003 川口へ這入つて來る、葦を分ける舟ではないが、邪魔が多いので、暫らく用心して、今にやつて行かう、と思うて居る自分を、中だゆみをして居る、と思うてくれな。

3002 窪田には水が多いので、上田に種を蒔いた所が、稗が澤山雜つて居たので、選つて捨てられるやうに、いとしい人に捨てられたので、自分は、獨り寢てゐることだ。

3001 心さへあうたら、共に寢ようと思ふのに、まるで山の田の、獸がついた田を番するやうに、いとしい人の母親が番して、逢はして下さらないことだ。

3000 春日野に照つて居る夕日ではないが、直に言ひ容れても見ないで、側から眺めて居たのが、今から思へば、殘念なことだ。

2999 山から出て來る月を見る爲に、待つて居るのだ、と人が咎めると言ひなして、實は自分は、やつて來るいとしい人を待つてることだ。

2998 日暮れの月や、明け方の日の出る迄の薄闇のやうに、ほんのりと少し許り、會うて見たことのある人、と云ふに過ぎないのに、其人に、焦れ續けて居ることだ。

2997 空に照つて居る太陽が、なくなつて了ふ日が來たら、自分

なむ日こそ、我が戀ひ止まめ

3005 望の日に出でにし月の、高々に、君を在せし。何か思はむ

*

3006 月夜よみ、門に出で立ち、足占して行く時さへや、妹は會はざらむ

3007 ぬば玉の夜渡る月の爽けくは、よく見てましを。君が姿を

3008 足引きの山をを高み、夕月をいつとか、君を待つが苦しさ

3009 橡の解き洗ひ衣、眞土山もとつ人には、侶如かずけり

*

3010 佐保川の川波立たず、靜けくも、君にたぐひて、明日さへもがも

の此戀ひも止まるだらうが、さういふことがないと同じく、戀ひの止む時もあるまい。

3005 十五日の晩にさし昇る月ではないが、高々と鶴首して、待ち焦れて居たお方をば待ちつけて、自分の家に居させておいて、此上、何を思ふことがあらうか。（此は久し振りで來た男が、女の浮かない顏を見て、どうしたのか、と問うたのに答へた歌と見える。）

3006 月が好いので、表へ出て、足占を踏んで見て、會へるといふので、出かけて行く今日でさへも、いとしい人に會へない、といふことがあるまい。今日は會へるに違ひない。

3007 夜空を運行する月のやうに、はつきりといとしいお方の姿を、よく見ておいたらよかつたのに、殘念なことをした。

3008 山に木がよく茂つて居るので、出て來る日暮れの月を、何時出ることか、と待つやうに、待ち焦れて居るのが、術ないことだ。

3009 橡染めの、解いて洗うた著物を打つ、眞土山ではないが、その同じ音の、本つ人即、古馴染の戀ひ人には、どんな人も、怎うして〳〵、及ぶことではない。（女が、他に通ふ所のある男に、怨んだのに對して、宥めた歌。）

3010 此近くを流れて居る、佐保川ではないが、我々二人の間にも、波のやうな邪魔者が起らないで、いとしい方と一處に、明日又、かうして居たいことだ。

3011 吾妹子に衣春日の吉木川。よしもあらぬか。妹が面を見む

3012 との曇り雨布留川の小波、間なくも、君は思ほゆるかも

3014 神南備の山下とよみ逝く水の、水脈し絶えずば、後も我が妻

3015 雷の如聞ゆる激湍の白波の、面知る君が見えぬ、此頃

3016 山川の激湍にまされる戀すとぞ、人知りにける。間なく思へば

3017 足引きの山川水の、音に出です、人の子故に、戀ひ渡るかも

3018 巨勢なる能登瀬の川の、渡り逢はむ。妹には、我は。今ならずとも

3019 洗ひ衣とりかへ川の川淀の、淀まむ心思ひかねつも

3020 斑鳩のよるかの池の宜しくも、君が言はねば、思ひぞ、我がする

3021 隠沼の下ゆは戀ひむ。著く人の知るべく、嘆きせめやも

3022 行くへ無み、隠れる小沼の下思ひに、我ぞ物思ふ。此頃の間は

3023 隠沼の下従戀ひ餘り、白波の著く出でぬ。人の知るべく

3024 妹が目を見まく堀江の漣波、頻きて戀ひつゝありと、告げこそ

3025 岩走る垂水の水の、はしきやし、君に戀ふらく、我が心から

3026 君は來ず、われは故なく立つ波の、數々、わびし。かくて來じとや

3011 いとしい人に、著物をば貸して上げるではないが、その春日の吉木川で、いとしい人の顔を見る由があるまいか。

3012 空一杯に曇つて來て、雨が降るといふ語に縁のある、布留の川の漣が、隙き間もなく立つて居るやうに、隙き間もなしに、いとしい人のことを思うて居ることだ。

3014 神南備山の麓をば、音高く流れて行く水の、水脈が切れないやうに、何時迄も、二人の仲も切れないで、將來必會はうよ。いとしい人よ。

3015 雷のやうに、甚い音の聞える激湍に立つ、波の容子の面白いやうに、面白いといふ語に縁のある、面知る（好く顔を見せて下さつた）あなたが、お見えにならぬ此頃よ。

3016 山川の激湍よりも、激しい戀ひをして居る、と人に悟られたことだ。始終、思ひ詰めて居るので。

3017 山川の水が、音を立てゝ流れるのとは反對に、聲にも出さないで、そつと、他人である人だのに、其人の爲に、焦れ續けて居ることだ。

3018 いとしい人とは、今會へなければ、今でなくても、巨勢の能登瀬川で、後に自分は逢はうと思ふ。

3019 洗ひ衣をば、取り換へて著るといふ、とりかへ川の淀む瀬ではないが、自分はさうした淀んだ心持ちにはなりかねて、焦れて居ることだ。

3020 斑鳩の里にある、よるかの池ではないが、いとしい方が、此方の氣に嵌るやうな、返答をしてくれないので、思ひ事を私はして居る。

3021 幾ら戀しくても、心の底で焦れて居よう。目立つて人が知りさうに、嘆息をついたり何ぞは、決してすまい。

3022 流れて出て了ふ所がなくて、隱つて居る池ではないが、上べに出さないで、心に隱して焦れて、此頃中は、物思ひをして居ることだ。

3023 隱れ沼のやうに、心の底で、思うて居切れなくなつて、波が上るやうに目立つて、表に人の氣附く程に、顯したことだ。

3024 いとしい人の顔を見たく欲りする、といふ語に縁ある堀江、卽、疏水の川に立つ漣波ではないが、しきりなく焦れて居る、といとしい人に告げてくれ。

3025 岩の上を激して流れる、瀧の水のやうに、激しくいとしい方に、焦れて居ることだ。自分の心の所爲で。

3026 お待ち申しても、いとしい人はお出でにならない。女の身のわたしは、行くといふ手段がなくて、川に立つ波のやうに、しきりなく、悲觀せられることだ。かうして、何時迄も來まい、といふお心でせうか。

3027 近江ノ湖。へたは人知る。沖つ波君を
おきては、知る人もなし

3028 大海の底を深めて、結びてし妹が心
は、疑ひもなし

3029 佐田ノ浦に寄する白波、間なく思ふ
を、何ぞ、妹に會ひ難き

3030 思ひ出でゝ術なき時は、天雲の奥所
も知らず、戀ひ渡るかも

3031 天雲のたゆたひ易き心あらば、吾を
な頼めそ。待てば苦しも

*

3032 君が邊見つゝもあらむ。膽駒山雲な
棚引き、雨は降るとも

3033 なかゝに何か知りけむ。我が山に
燃ゆるけぶりの、外に見ましを

3027 あなたと私との間は、淡海の湖水の波で、譬へることが出
來ます。岩邊に打つものは、人が知つて居るが、沖の方で
立つて居る波のやうに、心の底で思ひ合うて居る二人の仲
は、誰も知つた人がありません。

3028 大洋の底が深いやうに、深く約束したいとしい人の心は、
疑ふ所もない。

3029 佐田の浦に寄せ來る波が、寄せぬ間がないやうに、隙き間
もなく思ひ續けて居るのに、怎うして、いとしい人に會ふ
のが、むつかしいのだらう。

3030 いとしい人のことを思ひ出して、遣る瀬ない心持ちのする
時分には、今は元より、將來どうなることやら、的もなく、
焦れ續けて居ることだ。

3031 あなたの心中に、空行く雲ではないが、中緩みのしさうな
心持ちならば、そんな頼りありさうな言を言うて、私に信
頼させて下さるな。お出でになるか、と思うて待つて居る
のは辛いことです。

3032 いとしい人の住んでる邊は、あの邊だと眺めても居よう。
どうか雨が降つても、あの生駒山に雲が懸つてくれな。

3033 こんなことなら、一層知らなかつたらよかつたのに、中途
半端に、何故知り合ひになつたことだらう。自分の住んで
居る邊の、山や樹に燃えて居る煙のやうに、外から見てを
れば、好かつたのに。

3035 明時の朝霧隱り、唉く花の、如何で
か、戀ひの色に出でけむ

3036 思ひ出づる時は術なみ、佐保山に立
てる霞の、消ぬべく思ほゆ

3037 切目山行きかふ道の、朝霞仄かにだ
にや、妹に會はざらむ

3038 斯く戀ひむものと知りせば、夕置き
て朝は消えむ露ならましを

3039 夕置きて、朝は消ゆる白露の、消ぬ
べき戀ひも、我はするかも

3040 後終に妹に會はむと、朝露の命は生
けり。戀ひは繁けど

3041 朝な〳〵草の上白く置く露の、消な
ば共にと、言ひし君はも

3042 朝日さす春日の小野に置く露の、消

3035 どうして自分の焦れて居る心が、夜の明け方の霧の中に、
咲いてゐる花ではないが、色に表れたのであらう。

3036 いとしい人のことを思ひ出す時は、遣る瀬なさに、佐保山
に立つて居る霞ではないが、消え入りさうに思はれる。

3037 あの切目山の、人の往來する道に立つて居る、朝霞ではな
いが、只ほんのりとだけでも、いとしい人に會ふことが出
來ないだらうか。

3038 こんなに焦れねばならんことだ、と訣つて居たら、日暮れ
に降つて、朝になれば、消えて了ふ露であつたら、よかつ
たのだ。

3039 日暮れに降つて、朝になれば消える露ではないが、身も消
え入りさうな戀ひをば、自分がして居ることだ。

3040 將來何時かは、きつと、いとしい人と一處にならう、と焦
れる心は甚いが、脆い朝露のやうな命をば、續けて居るこ
とだ。

3041 毎朝々々、草の上に、眞白に降つて居る露ではないが、消
えて死んで了ふなら、一處に死なうと言うた方は。(心變り
をせられたことだ。あゝ。)

3042 春日の野に降つて居る露ではないが、自分の身は死んで了

ぬべき我が身惜しけくもなし

3043 露霜の消易き我が身老いぬとも、又をち歸り、君をし待たむ

3044 君待つと庭にしをれば、うち靡く我が黒髪に、霜ぞ置きにける

3045 朝霜の消ぬべくのみや、時なしに思ひ渡らむ。生きの緒にして

3046 漣の波越のあぜに降る小雨、間も置きて我が思はなくに

3047 神古びて巖に生ふる松が根の、君が心は忘れかねつも

3048 御狩りする獵場の小野の、楢柴の馴れはまさらず。戀ひこそまされ

3049 櫻麻の麻生の下草、とく生ひば、妹が下紐解かざらましを

ひさうだが、それも更々、戀ひの爲には、殘念だとも思はない。

3043 秋に降る冷い露のやうに、消えて死んでも差し支へのない我が身だが、それで居て、こんなに年をとつて居るけれども、も一度若返つて、いとしい人の通うて來るのを、待つて居よう。

3044 いとしい方を、お待ち申さうと思うて、庭に出て居た所が、自分の髪の毛に、霜が降りかゝつたことだ。

3045 朝の霜のやうに、身も消え入りさうに許り、何時といふことなしに、命懸けで、思ひ續けてをらねばならんか。

3046 漣の里の波越の崩岸に降る小雨が、晴れたと思へば降るやうに、間をおかないで、私はあなたのことを思うてゐるのです。

3047 古びて神々しく、岩の上に生えて居る松の根のやうに、古くから思うて居た、あなたのお心は、忘れることが出來ないで居ます。

3048 天子の御獵を行はれる獵場の野に生えて居る、楢の柴ではないが、幾ら近しうしても、彌馴れるといふことはなく、焦れる心が彌深くなつて行く許りだ。

3049 櫻麻を植ゑた畑の下草が生えるのではないが、いとしい人が、もつと以前に、一人前に成長して居たら、人の物となつて了うて、自分が下裳の紐を解くことが出來なかつたの

3050 春日野に淺茅標結ひ、絕えめやと我が思ふ人は、彌遠長に

3051 足引きの山菅の根のねもごろに、我はぞ戀ふる。君が姿を

3052 杜若佐紀沼に生ふる菅の根の、絕ゆとや、君が見えぬ、此頃

3053 足引きの山菅の根のねもごろに、止まず思はゞ、妹に會はむかも

3054 あひ思はずあるものにかも。菅の根のねもころ〳〵に、我が思へるらむ

3055 山菅の止まずて君を思へかも、我が魂の、此頃はなき

3056 妹が門行き過ぎかねて草結ぶ。風吹き解くな。直接に會ふ迄に

*

だかも知れないのだが、今迄子どもでをつてくれたことがありがたいことだ。

3050 春日野で、茅花の原に標を著けて、自分のものだとして、何時迄も仲が切れるものか、と思うて居るいとしい人は、何時々々迄も、變らずに居て欲しいものだ。

3051 麥門冬の根が張つて居るやうに、深く沁々といとしい人の姿を見たい、と焦れて居ることだ。

3052 佐紀沼に生えて居る、菅の根ではないが、自分に切れて了はうと思うてか、いとしい人が、姿を見せられない今日此頃よ。

3053 麥門冬の根ではないが、沁々と深く、絕え間なく思ひ續けてをつたら、いとしい人に會へるだらうか知らん。

3054 いとしい人は、自分と一處に思ひ合うて居ては下さらないのに、その人をば沁々と、自分が思うて居る、といふ訣ではあるまいか。

3055 止む時なく、思ひ通しに、思ひ續けて居るからか、自分の性根は、まるでないやうである。

3056 いとしい人に今日は會へないが、通り過ぎることが出來ないから、來た標に草を結んでおく。今度一處に會ふ迄は、風よ、草を吹き解いてくれな。

3057 淺茅原の茅生に足蹈み、心ぐみ、我
が思ふ子らが家の邊見つ
3058 うちひさす宮にはあれど、鴨頭草の
移ろふ心我が思はなくに
3059 百に千に人は言ふとも、鴨頭草の移
ろふ心我が持ためやも
3060 萱草我が紐につく。時となく思ひ渡
れば、生けるともなし
3061 明時の目覺しぐさと、これをだに、
見つゝ在して、我と偲ばせ
3062 萱草垣もしみゝに植ゑたれど、醜の
醜草。尙戀ひにけり
3063 淺茅原の小野に標結ひ、空言も會は
むと聞せ。戀ひの和さに
3064 皆人の笠に縫ふとふ有馬菅。ありて

3057 茅花の生えた原に蹈み込んで、いとしい人の住居の邊を眺めて居ることだ。心が屈託するので。（情景竝び到つた傑作。）
3058 私は宮中に宮仕へして、立派な人達を澤山見て居ますが、外の人に移るやうな、浮氣な心は、起しはしません。
3059 あれ此と、様々に人が噂を立てましても、決して移り氣を、私が持つて好いものですか。
3060 こんなに、何時といふ定りなしに、じやうべつたり思ひ續けて居ると、生きて居る元氣も出ない。それで此萱草を、自分の裳の紐に著けて、いとしい人のことを忘れようと思ふ。
3061 只今、此品物を差し上げますが、夜の明け方の目覺す種として、せめて此をでも、私だと思うて、眺め乍ら入らつしやつて、思ひ出して下さい。
3062 物忘れをする爲に、垣根に一杯になる迄、萱草を植ゑたけれど、鈍な莫迦な草奴だ。自分はまだ、いとしい人に焦れて居ることだ。
3063 何にもならない好い加減の、冗談にでも會うてやらう、と言うて下さい。焦れる心の紛らしに。（「淺茅原の小野に標結ひ」は、空を起す爲である。）
3064 凡ての人が、笠に縫ふさうな、有馬の菅ではないが、あり

の後も、逢はむとぞ思ふ
3065 み吉野の秋津の小野に苅る萱の、思
ひ亂りて寢る夜しぞ多き
3066 妹待つと三笠ノ山の山菅の、止まずや
戀ひむ。命死なずば
3067 谷狹み峯邊に延へる石蔦の、延へて
しあらば、年に來ずとも
3068 水莖の岡の葛葉を吹きかへし、面知
る子らが見えぬ頃かも
3069 赤駒のい行きはゞかる眞葛原。何の
傳言。たゞにし吉けむ

*

3070 木綿疊田上山のさな蔓。ありさりし
がも。今ならずとも

3065 吉野の秋津野で刈り採る萱ではないが、心が亂れて煩悶して、眠らないで居る夜が多いことだ。
3066 三笠の山菅ではないが、いとしい人の來るのを待ち焦れるとて、何時迄も止む時なく、焦れて居ることであらう。命のなくならない中は。
3067 谷が狹いので、攜ることが出來ないで、峯の方へ這うて來てゐる葛ではないが、心の中に何時迄も、自分を思ふ心が絶えないで居るのなれば、一年間に一遍だけで、後は來なくても、辛抱してをらう。
3068 風が吹いて岡に生えて居る葛の葉を吹き反して、目に著く葉の裏ではないが、顏を好く見慣れてゐるいとしい人が、此頃一向やつて來ないことだ。
3069 赤駒さへも、通つて行くことを躊躇する葛原よ。其やうに人の評判を怖れて、えう來ないで、そんな人に、傳言に便り許りしなさる。一體、どうしたお積りですか。そんなに遠慮せずに、直接に會ひに入らつしやればよからうのに。
（此歌は、天智天皇の御代に、世間に流布してゐた童謠である。天武天皇の出世の前兆となつたものだ、と日本書紀に傳へるものであるが、玆には相聞の譬喩として、取り入れたものと思はれる。）
3070 田上山に生えて居るさね蔓が切れないやうに、此儘で、續いて行きさへしてくれゝばよいが。譬ひ今は逢へないでも。

3071 丹波路の大江ノ山のさな蔓。絶えむの心、我は思はず

3072 大崎の荒磯のわたり延ふ葛の、行くへもなくや、戀ひ渡りなむ

3073 木綿疊田上山のさな蔓。後も必、逢はむとぞ思ふ

3074 唐棣色の移ろひ易き心あらば、年をぞ來經る。言は絶えずて

3075 斯くしてぞ、人の死ぬとふ。藤波の只一目のみ見し人故に

3076 住吉の敷津ノ浦の名告藻の、名はのりてしを。逢はなくもあやし

3077 雎鳩居る荒磯に生ふる名告藻の、よし、名は告らむ。親は知るとも

3078 波のむた靡く玉藻の、片寄りに、我

丹波地方にある、大江山のさね蔓でないが、切れようといふ心持ちは、私は更々、考へたこともありません。

大崎の岩濱の邊に擴つて居る葛の、何處迄も擴つて居る如く、遣る瀬もなく、焦れ續けて居ねばならぬか。

田上山のさね蔓ではないが、將來にはきつと、一處にならうと思ふ。

あなたは上べは美しいが、移り氣な心を持つて入らつしやるから、音信は成程、た易くなさるが、會はないで年月が、どん〳〵と立つて行くことだ。

こんなに焦れて、果ては、死んで行くのであるといふことである。その人は、只一目見た許りの人だのに、其人の爲に。

住吉の敷津の浦に生えて居る、名告藻ではないが、あの人は、私の言ひ入れたのに對して、自分の名をば打ちあけて、言うて聞したのに、逢うてくれないのも、不思議だ。

みさごが住んで居る、岩濱に生えて居る、名告藻ではないが、儘よ、名を打ち明けて了はう。譬ひ親が知つて、叱られても。

波に連れて、なよ〳〵と寄つて居る玉藻ではないが、ひた

が思ふ人の、言の繁けく

3079 わたつみの沖つ玉藻の靡き寢む。早來ませ、君。待てば苦しも

3080 わたつみの沖に生ひたる縄ノリ海苔の、名は曾て告らじ。戀ひは死ぬとも

3081 玉の緒を片緒に縒りて緒を弱み、亂らむ時に、戀ひざらめやも

3082 君に會はず久しくなりぬ。玉の緒の長き命の惜しけくもなし

3083 戀ふることまされば、今は玉の緒の絶えて、亂りて、死ぬべく思ほゆ

3084 海人處女潛き採るとふわすれ貝。よにも忘れじ。妹が姿は

3085 朝影に我が身はなりぬ。玉かぎる仄かに見えて、去にし子故に

すらに、心を向けて居る人に就いての評判が、うるさく立つて居ることだ。

3079 大洋の沖の方に生えて居る玉藻ではないが、絡み合うて寢よう。あなた早く入らつしやい。待つて居るのは、術ないことであります。

3080 大洋の沖の方に生えて居る縄海苔ではないが、いとしい人の名前は、どんなことがあつても、滅多に打ち明けはすまい。譬ひ焦れ死んだとて。

3081 譬へば玉を通す緒をば、組み合せないで、一條の絲で編んだ緒に縒つて、其爲に、緒が弱くて亂れるやうに、二人の仲が亂れて、離れ〳〵になる時になつた今、焦れないで居られようか。

3082 いとしい人に逢はずに、長くなつた。其爲に焦れ死んで、長い命を縮めても、惜しいとも思はない。

3083 焦れることがもう、非常に募つて來たので、玉の緒のきれたのではないが、心が亂れて、死にさうに思はれる。

3084 海人の處女が、海底に潛つて採るさうな、あの忘れ貝ではないが、實際怎うしても、いとしい人の姿は忘れはすまい。

3085 旭にさすひよろ長い影のやうに、痩せ衰へて了うたことだ。ほんのりと、姿を見せて、其儘行つたに過ぎない、人の爲に焦れて。

3086 なか〳〵に人とあらずは、桑鷽にも
ならましものを。玉の緒許り

3087 眞菅よし宗我ノ川原に鳴く千鳥。間な
し。我が夫子。我が戀ふらくは

3088 古衣著奈良の山に鳴く鳥の、間なく
時なし。我が戀ふらくは

3089 遠つ人獵路ノ池に棲む鳥の、立ちても
居ても、君をしぞ思ふ

3090 葦岸行く鴨の羽音の、音のみに聞き
つゝ、もとな、戀ひ渡るかも

3091 鴨すらも、己がつまどちあさりして
おくるゝ程に、戀ふとふものを

3092 白檀飛驒ノ細江のつゝ鳥の、妹に戀ふ
れや、寢を眠かねつる

3093 笹の上に來居て鳴く鳥。目を安み、

3086 一層人としてをるよりも、ほんの暫らくでも、鷽にでもな
つて、死にたいものだ。（此は、田舎女の作つたもの、と見
れば、興味が深い。）

3087 あの宗我の川原に鳴いて居る千鳥ではないが、私の焦れて
居る心は、一寸の休む間もありません。我が懐しいお方
よ。

3088 古衣を著慣れたといふ語に緣のある、奈良山に鳴いて居る
鳥の聲のやうに、ちつとの隙き間もなく、又、じやうべつ
たりであります。私の焦れて居るのは。

3089 あの獵路の池に棲んで居る鳥ではないが、立つにつけ居る
につけ、凡て造次顚沛、いとしい人のことを思ふ。

3090 葦の生えて居る岸を泳いで行く鴨が、立つ羽音ではないが、
音即、便りに許り聞いて居て、實際逢はないで、心もとな
く、焦れ續けて居ることだ。

3091 無心の鴨でさへも、自分の配偶同士、餌を求めて居る後
へ、とり殘されて了うた時は、焦れて鳴くといふ位である
のに、況して人間である自分が、逢へないで居る苦しさよ。

3092 飛驒川の細い入り込みに居るつゝ鳥が、夜通し眠ないで、
鳴いて居るやうに、自分も、いとしい人に焦れて居る爲か、
えう寢ないで居ることだ。

3093 笹の葉の上に來て鳴く鳥が、ありふれて居るやうに、あり

人妻故に、我戀ひにけり

3094 物思ふと眠ねず起きたる朝明には、
佗びて鳴くなり。庭つ鳥さへ

3095 朝鳥の早くな鳴きそ。我が夫子が朝
明の姿見れば、かなしも

3096 馬柵越しに麥食む駒の、詈らゆれど、
尙し戀しく、忍びかねつも

3097 さひの隈檜ノ隈川に駒止めて、馬に水
養へ。我外に見む

＊

3098 己から詈えてをれば、駿毛馬の面た
かく、夫だに、乘りて來べしや

右の歌、平群ノ文屋ノ益人の話に依
ると、昔紀ノ皇女が、高安ノ王に通
ぜられて責められ給うた時に、作
られたものだといふ。

3094 物思ふと眠ねず起きたる朝明には、
佗びて鳴くなり。庭つ鳥さへ

3095 朝鳥の早くな鳴きそ。我が夫子が朝
明の姿見れば、かなしも

3096 馬柵越しに麥食む駒の、詈らゆれど、
尙し戀しく、忍びかねつも

3097 さひの隈檜ノ隈川に駒止めて、馬に水
養へ。我外に見む

＊

3098 己から詈えてをれば、駿毛馬の面た
かく、夫だに、乘りて來べしや

右の歌、平群ノ文屋ノ益人の話に依
ると、昔紀ノ皇女が、高安ノ王に通
ぜられて責められ給うた時に、作
られたものだといふ。

ふれて逢ふことが、し易い人だといふので、他人の愛人だ
のに、其人の爲に、自分がこんなに、焦れようか。

3094 物を考へこんで、寢ないで起きた夜の引き明けには、鷄さ
へも何だか、悲觀して鳴いて居る。

3095 朝鳥よ。そんなに早くから、鳴いてくれな。戀しい人の、
朝早くお歸りになるのを、見るのは悲しいことだ。

3096 厩の、馬の前に入れた貫木越しに、麥を食ふ馬ではないが、
兩親からは、甚く叱られては居るけれど、それでも戀しく、
辛抱の出來ないことよ。

3097 檜ノ隈よ。その檜ノ隈の川に馬を留めて、暫らくは、馬に水
を飲ませておやりなさい。私は、脇の方から、あなたを見
て居ませう。（そんなに早く馬を馳せて歸つては、お顏が見
られないではありませんか。朝歸る男に、女の與へた歌で
ある。）

3098 自分の所爲で、自分だけが叱られて居るならばかまはない
が、あなた迄も叱られて、あなたの乘つて入らつしやる駿
毛馬ではないが、顏を上げてゞも、やつて來られるのなら
ば好いが、さうもせないで、面目なさゝうに、乘つて來ら
れることだ。（此歌は、傳承の久しい間に、誤つた所が多い
と思はれる。試みに、訓んで見たに過ぎない。）

3099 紫草(ムラサキ)を草とわく〳〵、伏す鹿の、野は異にして、心はおやじ

*

3100 思はぬを思ふと言はゞ、眞鳥棲む雲(ウナ)梯(デ)ノ杜(モリ)の神し、知らさむ

□問答

3101 紫草(ムラサキ)は灰さすものぞ。海石榴市(ツバイチ)の八十(ソ)の衢(チマタ)に會へる子や。誰

3102 たらちねの母が呼ぶ名を申さめど、道行く人を、誰と知りてか

○

3103 逢はなくは、然もありなむ。玉づさの使ひをだにも、待ちやかねてむ

3104 逢はむとは、千重に思へど、あり通

3099 大事の紫草をば、外の草と區別し乍ら、さがして其上で、寢る鹿ではないが、外の女をさがしてゐなさるあなたも、やはり心ない鹿のやうなものだ。成程、私と野とは別だけれども、あなたの心は同じことだ。

3100 あなたは私の心をお疑ひなさるが、嘘は申しません。愛して居ないのに、愛して居るやうに言へば、あの鷲の棲んでゐる、雲梯の森の神樣がよく御存じで、罰を與へられませう。(誓言の歌として、情凝の中に、一種の莊嚴を含んで居る。傑作。)

3101 紫草の汁には、椿の灰の汁を注(サ)して染めるといふ、其名を持つた椿市の、人の澤山行き交ふ、四通八達の辻で出會うたお前さんは、一體誰だ。名を名告つて聞かせなさい。

3102 なる程名を言へと仰つしやれば、お母さんがわたしを呼び寄せる時に言はれる名を申しもしませうが、一體さう仰つしやるあなたは、何處の誰ですか。道で行き合うたあなたを誰だ、とも知らないで、申し上げる訣には行きません。(此歌は、傳説的の興味と、時代の背景の心を引く歌で、二つ乍ら傑作である。萬葉註釋を試みた先輩は、此歌を、飛鳥時代以前のものと觀察して居る。)

3103 逢うて下さらないのならば、それでもまあ辛抱してゐませうが、せめてはお使ひだけでも、待ちに待つて居ませう。どうか、便りだけはして下さい。

3104 逢ひたいとは、幾重にも思うてゐますが、往來の人の目が

ふ人目を多(オホ)み、戀ひつゝぞをる

○

3105 人目多み直(タヾ)接に逢はずて、蓋しくも、我が戀ひ死なば、誰が名にかあらも

3106 あひ見まく、欲しけくすれば、君よりも、我ぞまさりて、いぶかしみする

○

3107 うつそみの人目を繁み、逢はずして、年の經ぬれば、生けるともなし

3108 うつそみの人目繁くば、ぬば玉の夜の夢にを、續ぎて見えこそ

○

3109 ねもごろに思ふ吾妹を。人言の繁きによりて、よどむ頃かも

3110 人言の繁くしもあれば、君も我も、

3105 人目がうるさくて、直(ヂカ)に逢はないで、ひよつと私が、焦れ死んだ節には、世間の人が、私の死ぬ原因になつた人を、誰彼と考へるでせう。其時に言はれるのは、一體誰の名でせう。それはあなたの名に違ひない。其時になつて冷酷な人と言はれなさるだらう。

3106 あなたはそんなことを仰つしやるが、私は逢うて見たく、思うて居ますのですから、あなたよりも以上に、此頃逢はれないので、私は屈託して居ることです。

3107 人の目がうるさいので、逢はないで歲月が立つたので、生きて居る元氣も御座いません。

3108 そんなに人目がうるさければ逢ふことは、辛抱して、夜の夢に絶え間なく續いて、姿を現しなさい。

3109 しみ〴〵と思ひこんで居る、いとしい人だのに。人の評判のうるさい爲に、逢はないで、躊躇して居る此頃よ。

3110 あなたは、そんなに辛抱のないお方だ。此間、何と言はれ

絶えむと言ひて、逢ひしものかも

○

3111 術もなく片戀ひをすと、此頃に我が死ぬべきは、夢に見えきや

3112 夢に見て、衣をとり著（キ）、裝（ヨソ）ふ間に、妹が使ひぞ先だちにける

○

3113 あり〳〵て後も逢はむと、言のみを固く言ひつゝ逢ふとはなしに

3114 いとせめて、我も逢はむと思へども、人の言（コト）こそ繁き君なれ

○

3115 生（イ）きの緒に我が息吐（ツ）きし妹すらを、人妻なりと聞けば、悲しも

3116 我故にいたくなわびそ。後遂に、逢

ました。人の評判がうるさいことだから、あなたも私も切れて居よう、とさう仰つしやつて、此間逢うたことですのに。

3111 遣る瀬なく、片思ひに焦れて居る爲に、近い中に、自分が死んで了ひさうなといふことは、定めてあなたの夢に見られたことでせうね。

3112 成程あなたの仰つしやる通り、夢に見て、此ではならんから逢ひに行かう、と衣をとり上げて著て、出かける用意をして居る間に、あなたの姿が先にやつて參りました。

○

3113 かうして辛抱して、續けて將來は逢はう、と言許りは、固く約束しておき乍ら、逢ふといふことは、少しもないことだ。

3114 非常につき詰めて、私も逢ひたいとは思うてゐますが、二人の間には、人の評判がうるさく立つて居る、あなたのことだから、遠慮して居るのです。

○

3115 一所懸命、私が溜め息吐（ツ）いて思ひこんだ人さへも、已に人妻になつて居ると聞いたので、悲しいことです。

3116 私の爲に、そんなに甚く悲觀なさるな。何も、とう〳〵了

はじと言ひしこともあらなくに

○

3117 門（カド）立てゝ戸も閉ぢたるを、何處從（ユ）か、妹が入り來て、夢に見えつる

3118 門たてゝ戸はさせれども、盜人の明けたる穴ゆ、入りて見えけむ

○

3119 明日よりは戀ひつゝあらむ。今宵だに、早く宵より、紐解け。吾妹

3120 今更に寢めや、我が夫子。あら玉の一夜も落ちず、夢に見えこそ

○

3121 吾が夫子が使ひを待つと笠も著ず、出でつゝぞ見し。雨の降らくに

3122 心なき雨にもあるか。人目守（モ）るとも

ひには逢ふまい、と言うた訣でもありませんのに。

3117 門の戸を引き寄せて、閉めたのに、いとしい人が何所から か這入りこんで來て、夢に見えたことだらう。

3118 私があなたに、夢で逢ひ申したといふのは、大方門は閉めてあつたが、盜人がくりぬいてあけた穴から、這入りこんで、夢にお目にかゝつたことゝ思ひます。

3119 明日からは別れて、焦れて居ることだらう。せめて、今夜だけでも早く、宵の中から下裳の紐を解き、打ち解けて、寢ようではないか。いとしい人よ。

4120 もうこんなに夜が更けて居るのに、今頃から、改めて寢ないでおきませう。此からは、別れて居る間、一晩の落ちもなく、私に逢ひに來て下さい。

3121 戀しい人の使ひを待ちうける爲に、笠も著ないで、雨が降つて居るのに、表へ出て、眺めて居たことだ。

3122 思ひ遣りのない雨だこと。人目の隙（スキ）を窺うて居た、稀（タマ）にし

しき妹に、今日だに逢はむを

3123 只獨り寢れど、眠かねて、白栲の袖を笠に著、濡れつゝぞ來にし

3124 雨も降り、夜も更けにけり。今更に君は行かめや。紐解きまけな

○

3125 久方の雨の降る日を、我が門に、蓑笠著ずて來る人や、誰

3126 卷向の穴師ノ山に雲居つゝ、雨は降れども、濡れつゝぞ來し

□羈旅に思ひを發べた歌

3127 渡會の大川野邊の若楸、我が久にあらば、妹戀ひむかも

3128 吾妹子を、夢に見に來と、大和路の渡り瀨毎に、手向け吾がする

3129 櫻花咲きかも散ると見る迄に、誰かも、こゝに見えて、散り行く

*

3130 豐國の企玖の濱松。心從も、何しか、妹をあひ見初めけむ

右四首、人麻呂集に見えて居る。

3131 月かへて君をば見むと思へかも、日をかへずして、戀ひの繁けき

3132 な行きそと歸りも來やと、顧みに行けど、歸らず。道の長てを

*

3133 旅にして妹を思ひ出で、いちじろく人の知るべく、嘆きするかも

3134 里離り遠からなくに、草枕旅とし思へば尙戀ひにけり

3129 咲いてゐる櫻が散つて行くか、と思はれる程に、今目前に、かうして現れては、誰も彼も、散り〴〵に別れて行くことだ。（旅の先々で逢遇する、様々な人々との、様々な交渉、それも、直に分離して行く悲哀をば、美しい櫻の花に譬へて居る。德川期の「櫻花かや散り〳〵に」といふ唄も、此には及ばない。傑作。）

3130 豐の國の企玖の濱松を、自分は初めて見たことだ。其につけても、こんな悲しい心持ちを起さすいとしい人に、何故、私が逢ひかけたことであらうか。

3131 月が代りさへすれば、いとしい人に逢へる、と私が思うてゐるからか、日も代らない只一日の間に、こんなに、焦れる心の甚いことよ。

3132 送つて來てくれた人と別れて後に、又もう行かずにをれと言うて、立ち戻つて連れに來るか、と振り返り振り返りやつて來たけれども、引き返して止めに來る人もなく、長い距離の道をやつて來たことだ。

3133 旅に出て居て、いとしい人を思ひ出して、目立つて、人が悟る程に、溜め息ついて嘆くことだ。

3134 里を離れて、そんなに遠くもやつて來ないのに、それでも、旅と言ふだけに、焦れることだ。

3135 近ければ名のみも聞きて慰めつ。今宵從(ユ)戀ひの彌增(イヤマサ)りなむ

3136 旅にありて戀ふれば苦し。何時しかも、都に行きて、君が面(メ)を見む

3137 遠かれば姿は見えず。常の如(ゴト)、妹が笑(エマ)ひは、面影にして

3138 年も經ず歸り來(コ)なむと、朝影に待つらむ妹が、面影に見ゆ

3139 玉桙の道に出で立ち、別れ來(コ)し日より思ふに、忘る時なし

3140 はしきやし然る戀ひにもありしかも。君が後(オク)れて戀しく思へば

3141 草枕旅の悲しくあるなべに、妹をあひ見て、後戀(ノチゴ)ふるかも

3142 國遠み直接(タヅ)には逢はず。夢にだに、

3135 昨日は離れて居るとは言ふものゝ、近いから何時でも逢へると思うて、其名だけ聞いて、心を宥めて居た所が、今夜からは遠く旅に出たから、焦れる心が、一層深くなることだらう。

3136 旅に出て焦れて居るのは、苦しいものだ。早く都へ行つて、いとしい方の顔を見たいものだ。

3137 遠く離れて旅出して居るから、姿は見えないが、にこやかないとしい人の笑顔は、何時も通り、幻に見て居ることだ。

3138 一年も立たない中に歸つて來て下さい、と身もしよんぼりと痩せて、自分を待つて居るいとしい人の姿が、幻になつて見える。

3139 いとしい人と道傍に出て、其所で別れて來た日から、かう思ひ續けて居るので、片時も忘れた間がない。

3140 あなたに對して思うてゐた心は、ひどい有樣の戀ひだつたが、あなたもこんな風であつたらう。私にとり殘されて、あなたが焦れて入らつしやつたことを思ふと。

3141 旅が悲しくある片方に、いとしい人に旅路で出會うて、別れて後に、焦れて居ることだ。それでいよ〳〵旅が悲しい。

3142 國を隔てゝ遠いので、直(ヂカ)には逢ふことがない。せめて夢に

我に見えこそ。逢はむ日迄に

3143 斯く戀ひむものと知りせば、吾妹子に言問はましを。今し悔しも

3144 旅の夜の久しくなれば、さにづらふ紐解きさけず、戀ふる此頃

3145 吾妹子が吾(ア)を偲(シヌ)ぶらし。草枕旅のまろ寢に、下紐解けぬ

3146 草枕旅の衣の紐解けぬ。思はせるかも、此年頃は

3147 草枕旅の紐解く。家の妹し吾(ア)を待ちかねて、嘆かすらしも

3148 玉釧(クシロ)枕き寢し妹を、月も經ず置きてや越えむ。此山の岫(クキ)

3149 梓弓末は知らねど、うつくしき君にたぐひて、山路越え來ぬ

3143 こんなに焦れることゝ知つて居たら、別れしなに、いとしい人に物を言うて來たのに、さうしなかつたので、今では心殘りである。

3144 旅をして、他處(ヨソ)に寢泊りすることが多くなつたので、一度も下袴の紐を解き放つことなく、焦れて居ることだ。

3145 いとしい人が、私のことを思うて居ると見える。旅に出て、著物も解かず、ごろ寢をばして居ると、下袴の紐が解けたことだ。

3146 旅裝束の著物の紐が、自然と解けた。國では、いとしい人が、久しく幾月以來、私のことを思うて入らつしやると見える。

3147 旅の衣裝の紐が、自然と解けたことだ。家にゐるいとしい人が、私を待ちかねて、嘆いて入らつしやるに違ひない。

3148 手枕をして寢たいとしい人を、さういふ風に自分の物になつてから、一月も立たないのに、殘して置いて、此山の洞穴のある所を、越えて行かれようか。

3149 こんなに遠方迄來て、あなたのお心が、何時々々迄も續くか、將來のことは訣りませんが、あなたをいとしく思うて、山路を越えて、こんなに遠方迄、參つたことです。

3150 霞立つ春の長日を、おくかなく、知らぬ山路を戀ひつゝか來む

3151 外（ヨソ）にのみ君をあひ見て、木綿疊（ユフダヽミ）たむけの山を、明日か越えなむ

3152 玉がつま安倍（アベ）島山の夕露に、旅寢はえずや。長き此夜を

3153 み雪降る越（コシ）の大山行き過ぎて、何れの日にか、我が里を見む

3154 いで、我が駒。早く行きこそ。待乳山、待つらむ妹を、行きて早見む

3155 葦城（アシキ）山。梢（コヌレ）悉（コトゴ）、明日よりは靡きたりこそ。妹があたり見む

3156 鈴鹿（スヾカ）川。八十瀨渡りて、誰（タ）が故か、夜越（ヨゴ）えに越えむ。妻もあらなくに

3157 吾妹子にまたも淡海（アフミ）の野洲（ヤス）ノ川。安眠も寢ずに、戀ひ渡るかも

3158 旅にありて物をぞ思ふ。白波の岸にも沖にも、寄るとはなしに

3159 水門（ミナト）ノ回に滿ち來る潮の、彌益（イヤマ）しに戀ひはまされど、忘らえぬかも

3160 沖つ波岸（ヘ）波の來寄る佐田ノ浦の、此さだ過ぎて、後戀ひむかも

3161 愛發（アラチ）潟。あり慰めて行かめども、家なる妹い悒（イブカ）しみせむ

3162 澪杭（ミヲクヒ）心盡して思へかも、こゝにも、もとな、夢にし見ゆる

3163 吾妹子に障（サハ）るとはなくに、荒磯回（アリソワ）に我が衣手は濡れにけるかも

3164 牟婁（ムロ）ノ浦の迫門（セト）の崎なる鳴（ナル）島の磯越す波に、濡れにけるかも

3150 霞の立つて居る長い春の日に、果ても無いやうな、一度も通つたことのない、深い山道を、焦れ乍ら行かねばならんか。（時間と空間と情調と、三者相叶うた佳作。）

3151 戀しいお方と別れるのに、別れの言さへ交すことが出來ないで、外（ワキ）の方からお顏を見て、明日からは此國境の山をば、越えて行かねばならんことか。

3152 かの安倍島の夜の露の下りる所で、長い夜の間を、旅寢がよく出來なさるだらうか。あのお方は。

3153 雪の降つて居る越前の國の、大山をば通り過ぎて、自分の故郷を、何時になつたら、見られることであらう。

3154 自分の乘つて居る馬よ。さあ早く行つてくれ。あの待乳山の向うで、（待乳山ではないが）待ち焦れて居る筈のいとしい人を、早く行つて見ようと思ふ。

3155 此葦城山が、邪魔になつて爲方がない。その邪魔になる木の先が、明日からは、（山を隔てゝをらねばならんのだから）伏し片寄つてくれ。いとしい人の住んで居る、家の邊を見たいから。

3156 鈴鹿川の澤山ある渡り瀨を、苦心して越えた所で、其先にいとしい人が居る、といふ訣でもないのに、誰の爲に、夜越えをして、苦心して渡つて行かうか。

3157 近江の國でいへば、いとしい人に尙重ねて逢ひたい、其近江の、野洲の川で、安らかな眠りも出來ずに、起きて、焦れ續けて居ることだ。

3158 旅に出て物を思うて居る。あれを思ひ此を思ひ、海岸や沖に、どちらつかぬやうに、自分の心が動搖してゐる。

3159 川口の入り込みにさし來る潮ではないが、段々激しく、戀ひの募つて來ることはあつても、忘れるといふことは、どうしても出來ない。

3160 海岸の波や、沖の方の波が來て寄せる、佐田の浦ではないが、今此一等好い時を、無駄に過（スゴ）して、後で焦れることであらうよ。

3161 自分は愛發（アラチ）潟の邊をば、かうして、何とか彼とか心を慰（ナダ）め乍ら、旅を續けて行かうけれど、家に一人殘つて居る人は、唯屈託なことゝ思うて居るだらう。

3162 あの海に立つて居る澪杭ではないが、いとしい人が、心を色々と勞して、思うて居るからかして、こんな遠方迄も、夢にいとしい人が、現れたことだ。心もとないことよ。

3163 いとしい人に逢ふのに、邪魔が出來たと言ふ訣ではないが、遠方に來て居る爲に逢はれないで、岩濱の入り込みで、自分の袖に濡れたことだ。波の雫か、それとも、目から零れた涙か。

3164 紀州の牟婁（ムロ）の浦の迫門の崎にある、鳴（ナル）島の岩濱にうちあげる、越す波に濡れたことだ。

3165 霍公鳥(ホトヽギス)鳥羽田ノ浦に頻(シマ)く波の、數々君
を見むよしもがも

3166 吾妹子を外(ヨソ)のみや見む。越(コシ)ノ海の粉潟
の海の島ならなくに

3167 波間より雲居に見ゆる粟島の、逢は
ぬもものゆゑ、吾(ア)によそる子ら

3168 衣手のま和歌ノ浦の眞砂路(マナゴ)の、間(マ)なし
時なし。我が戀ふらくは

3169 能登(ノト)ノ海に釣りする海人の漁火(イサリビ)の、光
りにい行く。月待ちがてり

3170 志珂(シカ)の海人の釣りし點(トモ)せる漁火(イサリビ)の、
仄かに妹を見むよしもがも

3171 難波潟漕ぎ出し舟の、はろ〴〵に別
れ來ぬれど、忘れかねつも

3172 浦回(ウ)漕ぐ熊野舟泊(ハ)て、めづらしく、

3165 鳥羽田の浦に、しきりなく寄せる波ではないが、度々、いとしい人に逢ふ手段が、あれば好いが。

3166 いとしい人を、外(ワキ)から許り見て居られようか。此越の海の粉潟の浦にある、島なら知らぬこと。そんなに遠くも隔つても居ない、いとしい人を。(島と人とを對照して、而も譬喩になり終つてゐない。佳作。)

3167 波の中に遠く、空と接する邊に見えて居る、粟島ではないが、一度も、媾會したことがないのに、其に、自分に心を寄せて居る、いとしい人よ。

3168 和歌の浦の砂路ではないが、隙き間もなく、じやうべつたりでもあることだ。私の焦れて居る心は。(眞砂路のまなから、間なしのまなを、引き起したのである。)

3169 能登の海で、海上遙かに釣りをしてる、海人の漁火の光りを便(タヨ)りとして、出掛けることだ。月の出を待ちかた〴〵。

3170 志珂の浦の海人が、釣りをし乍ら、とぼして居る漁火ではないが、ほんのりとでも、いとしい人を見る方法が、ないものだらうか。

3171 難波の遠淺の海を漕ぎ出した舟が、遠く〳〵なつて行くやうに、自分も段々、遠く〳〵別れて來たけれど、忘れられないことだ。

3172 海岸の入り込みを漕いで行く熊野舟が、滅多にやつて來たことがないのに、不圖碇泊したやうに、何時も目新しく、

かけて思はぬ月も日もなし

3173 松浦(マツラ)舟騷ぐ堀江の水脈(ミヲ)速み、楫(カヂ)取る
間なく思ほゆるかも

*

3174 漁(イサ)りする海人の楫(ト)の音ゆくらかに、
妹が、心に乘りにけるかも

3175 和歌ノ浦に袖さへ濡れて、わすれ貝拾
へど、妹は忘らえなくに

3176 草枕旅にしあれば、苅り薦の亂りに、
妹に戀ひぬ日はなし

3177 志珂(シカ)の海人の、磯に苅り乾す名告藻(ナノリソ)
の、名は告(ノ)りにしを。なぞ逢ひ難き

3178 國遠み思ひなわびそ。風の共雲の行(ユタ)
くなす、言(コト)は通はむ

3179 とまりにし人を思ふに、秋津野に居

心に掛けて、あの人を思はないといふ時は、一度もないことだ。

3173 九州の松浦からやつて來た、商人舟(アキウド)がやかましくどよめいて居る、其難波堀江の水流が激しくて、楫をとつて居る間がないやうに、自分は隙き間なく、人を思ひつめて居ることだ。

3174 漁りをして居る海人の、舟を漕ぐ艪の音が、ゆる〳〵聞えて來るやうに、いとしい人が、自分の心に意外(ユクリナク)、乘り蒐つて離れないことだ。

3175 和歌の浦で、袖が濡れる迄、忘れ貝を拾うて居るけれど、さうして忘れようと思ふいとしい人は、忘れられないことだ。

3176 旅に出て居るので、思ひ亂れて、いとしい人に、焦れない日とてはない。

3177 いとしい人は、あの志珂の海人が刈つて磯に乾して居る、名告藻ではないが、名告りをして、家も名も私に告げて、心は許してくれたのに、何故二人は、逢ふことがむつかしいのだらう。

3178 國が遠く離れて居るからとて、そんなに悲觀するには及ばない。風と一處に、雲が運行するやうに、便りも知られることになるだらう。

3179 家に殘つて居る人を思ふにつけて、此吉野の秋津野の邊に

る白雲の、止む時もなし

□別れを悲しんだ歌

3180 うらもなく去(イ)にし君故、朝な朝(ツ)な、
もとなぞ戀ふる。逢ふとはなくに

3181 白栲(タヘ)の君が下紐。我さへに、今日結
びてな。逢はむ日の爲

3182 白栲の袖の別れは惜しけれど、思ひ
亂りてゆるしつるかも

3183 都べに君は去(イ)にしを。誰解(タレト)けか、我
が紐の緒の結(ユ)ふ手懈(タユ)しも

3184 草枕旅行く君を、人目多み、袖振ら
ずして、あまた悔しも

3185 まそ鏡手にとり持ちて、見れど飽か
ぬ君におくれて、生けるともなし

3186 曇り夜のたどきも知らぬ山越えて、

懸つて居る雲が、やまる時がないやうに、始終心で思うて居る。

3180 何といふ心もなく、不圖あの時は歸つて了はれたが、其後逢はれない戀しい人の爲に、いつも朝になると、今時分歸られた時だ、と焦れて居ることだ。逢へさうもないので。

3181 戀しいお方の下袴の紐を、今結んで別れよう。それと同時に、私の紐も、共に結んでおかう。此後逢ふ日の爲に。

3182 袂を分つて、離れて居ることは辛(ツラ)いけれども、あの時は只一途に、心が亂れて居て、うつかりと行かして了うたことだ。

3183 いとしい方は、都の方へ歸られたが、別れしなに、私が結んだあの紐を、誰かゞ解いてるのかして、私の紐を結ぶ私の手が倦(ダル)いことだ。

3184 旅に出て行かれるいとしい方だのに、人目がうるさゝに、自分が焦れて居る心をば、袖を振ることで表すことさへせずに別れて、非常に殘念なことだ。

3185 手にぢつと取り上げて見て居ても、見飽きのしないと思はれる程、いとしいお方にとり殘されて、生きて居る元氣もない。

3186 どう行つて好いのか、的もつかない。山道を越えて入らつ

往(イ)ます君をば、何時とか待たむ

3187 たゝなづく青垣山の隔らば、しまし
ま君を言(コト)とはじかも

3188 朝霞たなびく山を越えて去なば、我
は戀ひむな。逢はむ日迄に

3189 足引きの山は百重に隱すとも、君を
思はく、止む時もなけむ

3190 雲居なる海山越えて往(イ)ましなば、我
は戀ひむな。後は逢ひぬとも

3191 よしゑやし、戀ひじとすれど、木綿(ユフ)
間山越えにし君が思ほゆらくに

3192 くさかげの荒井ノ崎の、笠島を見つゝ
か、君がみ坂越ゆらむ

3193 玉がつま島熊山の夕霧に、長戀ひし
つゝい寢(ネ)かてぬかも

しやる、戀しいお方を、何時お出でになる、といふ頼(タノ)みを持つて、待つて居ようか。

3187 むく〳〵と續いて居る、青垣のやうに立て廻した山が、二人の間に隔てとなつて、あなたが遠くへ入らつしやつたら、いとしい人に、度々お便りすることも出來まいよ。

3188 あの朝霞の懸つて居る、山を越えて行つて了うたら、今度逢ふ日迄は、私は焦れて居るだらうよ。

3189 山が幾重にも立ち重つて、いとしい人を隱しても、あなたを思ふ心は、決して、絶える時がありますまい。

3190 天と地との堺にある、遠い海山を越えて、あなたがお出でになつたら、後には逢へるとしても、私は、焦れて居ることでありませうよ。

3191 どうなりとなれ。もう焦れはすまいと思うては居乍ら、ゆふま山を越えて行つた人が、思ひ出されることだ。

3192 荒井の崎の近くにある、笠島の景色を眺め乍ら、今頃いとしい方は、箱根の坂を越えて居られることであらう。

3193 島熊山の夕霧の立つて居る所で、家にゐるいとしい人を、何時迄も、繰り返し〳〵思うて、眠られないことだ。

3194 生きの緒に我が思ふ君は、鳥が鳴く
東(アヅマ)の坂を、今日か越ゆらむ

3195 磐城(イハキ)山直越(タヾコ)え來ませ。磯崎のこぬみ
の濱に、我たち待たむ

3196 春日野の淺茅が原におくれ居て、時
ぞともなし。我が戀ふらくは

3197 住吉(スミノエ)の岸に向へる淡路島。あはれと、
君を言はぬ日はなし

3198 明日よりは印南(イナミ)の川の、出で去(イ)なば、
とまれる我は、戀ひつゝやあらむ

3199 海(ワタ)の底奥(オキ)は畏(カシコ)め。磯回(ワ)より漕ぎたみ
いませ。月は經ぬとも

3200 飼飯(ケヒ)ノ浦に寄する白波。しく〳〵に妹
が姿は、思ほゆるかも

3201 時つ風吹日(フケヒ)ノ濱に出で居つゝ、贖(アガ)ふ命

3194 命懸けで自分が、思ひつめて居るいとしいお方は、今日らあたりは、あの東國の、碓氷の坂を越えて居られることであらう。

3195 磐城山、其近道越しに、眞直(マッスグ)に越えて入らつしやい。岩の突き出た此こぬみの濱で、私は、あなたの入らつしやるのを、立つて待つて居ませう。

3196 春日野の茅花の生えた原の、家にとり殘されて居て、私の焦れて居るのは、じやうべつたりである。

3197 住吉の海岸に、向き合うて居る淡路島ではないが、あはれ（可愛いゝ）とあなたに焦れて、口に出して、言はない日というてはない。

3198 印南の川ではないが、明日からは、玆を出て行つて了はれたら、殘つて居る私は、焦れてゐることだらう。

3199 私だつて、勿論早くお逢ひ申したう御座いますが、沖の方を漕いで來れば、海の底が危險です。だから、岩濱の入り込みに沿うて、漕ぎ廻つて入らつしやい。その爲に時間がかゝつて、此月は、立つて了うても關(カマ)ひません。

3200 飼飯(ケヒ)の浦に寄せて來る波ではないが、後から〳〵しきりなく、戀ひ人のことが思ひ出されることだ。

3201 吹日(フケヒ)の濱に出て、海水で禊ぎをして、自分の身に恙ないや

は、妹が爲こそ

3202 熟田(ニキタ)津に舟乘りせむと聞(キ)きしなべ、
何(ナニ)ぞも、君が見え來ざるらむ

*

3203 睦鳩(ミサゴ)居る洲にをる舟の漕ぎ出なば、
うら戀しけむ。後は逢ひぬとも

3204 玉纏絶えず行かさね。山菅の思ひ亂
りて、戀ひつゝ待たむ

3205 後(オク)れ居て戀ひつゝあらずは、田子ノ浦
の海人ならましを。玉藻苅る〳〵

3206 筑紫路(ツクシヂ)の荒磯(アリソ)の玉藻苅るとかも、君
が久しく待てど、來まさぬ

3207 あらたまの年の緒長く、照る月の飽
かぬ君にや、明日別れなむ

3208 久(ヒサ)にあらむ君を思ふに、久方の清き

3208 長い間、逢へさうもない人のことを考へると、清らかな澄

3207 歳月長く思うて居ても、まるで空に照つて居る月のやうに、幾ら見ても見飽かぬ人に、明日は別れねばならんか。

3206 戀しいお方は、筑紫地方の玉藻をば刈つて入らつしやるといふ訣か、幾ら長く待つても、歸つて入らつしやらないことだ。

3205 後に殘つて焦れて居る位ならば、一層あの方の居られる田子の浦の、海人でありたいものだ。玉藻を刈り乍ら。

3204 心を緩めずに、どん〳〵と早く行つて入らつしやい。私はこんなに、心が亂れて居ますが、かうして焦れ乍ら、待つて居ませう。

3203 睦鳩の浮いて寢る沖の洲に泊つて居る、舟が漕ぎ出て行つたら、譬ひ行く〳〵又逢へるにしても、それ迄は片心に懸つて、戀しいことであらう。

3202 昔の人が、熟田津で舟に乘つて出發しよう、と歌に歌つて居るから、それで今にも、舟に乘りに來ようかと待つて居ても、かの額田女王は姿も現されないことだ。どういふ訣で、出て入らつしやらないのだらう。（此歌は、額田女王の「月待てば潮も叶ひぬ今は漕ぎ出でな」の歌を下に持つて居るのである。）

うに、と息災延命を祈るのは、他人の爲にではない。皆あなたの爲にである。

月夜も、闇にのみ見ゆ

3209 春日なる三笠ノ山に居る雲を、出で見る毎に、君をしぞ思ふ

3210 足引きの傍山雉子立ち行かむ君に、後れて現しけめやも

□問答歌

3211 玉の緒の現し心や、八十檜かけ漕ぎ出む舟に、後れてをらむ

3212 八十檜かけ島隠りなば、吾妹子が止れと振らむ袖見えじかも

○

3213 神無月時雨の雨に濡れつゝや、君か行きなむ。宿か借りなむ

3214 神無月雨間も置かず降りにせば、誰が里の間に、宿か借らまし

みきつた月夜も、泣く涙の爲に、闇のやうにしか見えない。

3209 戀しいお方は、遠く旅へ出かけられた。それで春日の三笠山にかゝつて居る雲が、出て見る度毎に、思ひ出されることだ。(これだけでは、何の爲に思ひ出すのか、昔其人と、春日山に出て居る月を眺めたからか、雲が遠方に行つて、又歸つて來るやうに、その人が又、歸つて來ればよいと思ふのか、或時、偶、雲によつて其人を聯想した爲に、始終思ひ出す、といふのか訣らない。)

3210 山の傍に居る雉子ではないが、玆を立つて旅に行かれる戀しい方に、後に殘されて、生きて居る心がしようか。

3211 澤山の檜をさしこんで、出て行く舟に殘されて、正氣ではをられようか。きつと狂ふか、死ぬるかするでせう。

3212 澤山の檜を舟にかけて漕ぎ出して、島隱れて行つたら、いとしい人が止れ、と言うて振る袖が、見えなくなることであらう。

○

3213 戀しいお方は、十月に降る時雨の雨に濡れつゝや、旅を綴けて歩いてゐられるであらうか。其とも、宿を借りて、泊られるだらうか。

3214 お前さんの言はれる通り、十月に降る雨が、止む間も挟まないで降つたら、私は何處の里の邊で、宿を借つたら好からうか。それが今から思はれる。

3215 白栲の袖の別れを難みして、荒津ノ濱に宿りするかも

3216 草枕旅行かむ君を、荒津迄送り來ぬれど、飜らずこそ

○

3217 荒津ノ海われ幣帛奉り齋ひてむ。早歸りませ。面變りせず

3218 朝な〳〵筑紫の方を出で見つゝ、哭のみ我が泣く。いたも術なみ

○

3219 豐國の企救の長濱行き暮し、日の暮れぬれば、妹をしぞ思ふ

3220 豐國の企救の高濱。高々に君待つ夜らは、さ夜更けにけり

3215 白栲の袖を離れて、別れて行くのが難しい爲に、まう一日まう一日と別れを惜しんで、荒津の濱で泊つたことだ。

3216 旅に出かけて入らつしやるあなたを、荒濱迄送つて來たが、それだけでは、到底滿足出來んことです。

3217 荒津の海の渡りの神に、私は幣帛を奉つて、齋み清めて、お祭りして居ませう。年がたつても、顏が變らないで、早く歸つて入らつしやい。

3218 朝毎に表へ出て、筑紫の方を見乍ら、私は泣いて居ます。非常に遣る瀨ないので。

3219 豐の國の企救の長い海岸を、日が暮れる迄歩いて、とうとう日が暮れて了ふと、いとしい人のことが思ひ出される。

3220 豐の國の企救の高岸の濱ではないが、高々と鶴首して、いとしいあなたを待つて居る夜は、もう深夜になつたことです。

萬葉集　卷第十三

雜の歌

3221 冬籠り春さり來れば、朝には白露置き、夕には霞棚引く巨勢ノ山、椙が下に鶯鳴くも

○

3222 神籬は人の瞻る山。下邊には馬酔木花咲き、末邊には椿花咲くうら美し山ぞ。泣く兒瞻る山

○

3223 鳴る神の、かゞよふ空の、長月の時雨の降れば、雁も未來鳴かず、神竝の清き御田家の垣内田の池の堤に、百足らず齋槻が枝に、瑞枝さす秋のもみぢ葉纏き持たる小鈴もゆらに、嫋女に吾はあれども、引きよぢて、枝もとをゝに打ち手折り吾は持て行く。君がかざしに

反歌

3224 一人のみ見れば戀しみ、神南備の、山のもみぢ葉手折りけり君

○

3225 天雲の影さへ見ゆる籠國の泊瀬の川は、浦無みか船の寄り來ぬ。磯なみか蜑の釣りせぬ。よしゑやし浦はなくとも、よしゑやし磯はなくとも、

3221 春がやつて來ると、朝には露が降り、日暮れには、霞の懸る巨勢山の椙の蔭に、鶯が鳴く事だ。

3222 神籬山は、衆人が始終目を放さずに眺めてゐる山だ。其麓には、馬酔木の花が咲いてゐるし、頂上の方には、椿の花が咲いてゐる、と言ふ美しい山だ。頑是ない嬰兒さへ、ぢつと見つめて喜ぶ山だ。

3223 稻光りが光つてゐた空が移り變つて、時雨が降ると、雁さへも未來て鳴かない中に、神竝山のさつぱりとした、神の田の番屋の垣の中の、池の堤の神木の槻の木の枝に、瑞々した枝を差し出す紅葉をば、嫋い女だけれども、手に纏き付けた鈴の音さへも、ゆら〳〵と立てゝ、其を引き寄せて、枝もぶら〳〵になる程に枉げて、其を折つて、私は持つて行く事だ。いとしいお方の頭飾りとして。

3224 只一人で見てゐますと、あなたの事が戀しくなつて、神竝山の紅葉をば、折つて參つた事で御座います。あなたよ。

3225 空に動いてゐる雲の影さへも見える程、美しく深い泊瀬川は、船が寄つて來ないのは、浦のない爲であらうか。蜑が釣りをせぬのは、岩濱のないからであらうか。成程、川だから磯や浦はないかもしれぬけれども、浦や磯はなくともかまはぬ。沖の方の波の立つてゐる邊を、吾勝ちに漕ぎ入つて來い。

沖津浪競ひ漕ぎ入來。蜑の釣り船

反　歌

3226 さゞれ浪湧きて流るゝ泊瀬川。寄すべき磯の、なきが淋しさ

○

3227 葦原の瑞穗の國に、手向けすと天降ましけむ、五百萬千萬神の神代より、言ひ續ぎ來たる神南備の神籬の山は、春されば春霞立ち、秋されば紅匂ふ。神南備の神籬の神の帶びにせる飛鳥の川の、水脈早み生ひため難き岩が根に苔生す迄に、新代のさきく通はむ事謀り夢に見えこそ。劍大刀齋ひ祀れる神にしませば

反　歌

3226 漣を立てゝ、水が湧いて流れて行く泊瀬川よ。其處に船を寄せる、適當な岩濱のないのが、便ない事だ。

3227 此葦原の瑞穗の國なる日本の國に來て、此國を從へる爲に天降りなされたさうな、澤山の神々達の居られた其太古から、良い處だと言ひ續いで來た、此飛鳥の神をお祀りした神竝の神籬山は、春になると春霞が立ち、秋が來ると木々の葉が色光澤良く紅葉する。其神世の神籬に居られる神樣が、帶にして、裾を取り廻して居られる、飛鳥川の水脈が早く、物が生え上り難い岩に、苔が生える程長い間、自分の結構な命が丈夫で、何時迄も通ふ事の出來る方法が知りたう御座いますが、夢に其をお示し下さいませ。私が身を愼んで、大事にする神樣でいらつしやいますから。

3228 神南備の神籬ノ山に齋ふ杉。思ひ過ぎめや。苔生す迄に

3229 齋串立て酒瓮据ゑまつる祝部が、うずの山蘰見れば、ともしも

○

3230 君が門奈良より出でゝ、水蓼を穗積に至り、鳥網張る坂手を過り、岩走る神南備山の朝宮に仕へまつりて、吉野へと入ります見れば、古おもほゆ

反　歌

3231 月も日も變りゆけども、久にふる神籬の山の外つ宮處

○

3232 斧取りて丹生の檜山に木こり來て、

3228 此神竝の神籬の山の景色は、何時迄經つても、心から取り除いて、忘れて了ふ事が出來ませうか。ちようど此山に、神木として祀つてある杉の木に、苔の生える程長い間經つても、決して念頭から、取り去る事は出來ませうか。

3229 社に神を降す串を立て、神に供へる酒瓮を、神の前にお据ゑ申し上げる神主の、冠に付ける飾りの山かげ、と言ふ草を見るのは、非常に氣の引き立つ樣な心持ちのする事よ。

3230 奈良の都をおでましになつて、穗積の里にお著きなされ、更に坂手の村を通つて、朝早く神竝山へ朝參りを遊されて、吉野山へ向うて這入つてお出でになるのを見ると、昔の天子達が、吉野行幸せられた事が思ひ出される。

3231 歲月もどん〳〵と移り變つて行くが、何時迄經つても變らない、この神籬山の離宮よ。（都が奈良へ遷つて後に、飛鳥に行幸があつたので、昔を思ひ出した歌。）

3232 斧を取りあげて、丹生の山の檜の木の植つた山で、木を伐

筏に造り、眞楫貫き磯漕ぎたみつゝ、
島傳ひ見れども飽かず。み吉野の瀧
もとゞろに、落つる白波

反　歌

3233
三吉野の瀧もとゞろに、落つる白波。
止りにし妹に、見せまくほしき白波』

○

3234
安治しゝ吾大君。高光る日の御子の
きこしをす御食つ國、神風の伊勢の
國は、國見れば國もともしも。山見
れば山も尊し。川見ればさやけく清
し。港なす海も廣し。見渡しの島も
名高し。玆をしもまぐはしみかも。
かけまくもあやに畏き、山ノ邊ノ五十
師の川原に、うち日さす大宮仕へ、

朝日なすま美しも、夕日なすうら美
しも。春山のしなひ榮えて、秋山の
色なつかしき百敷の大宮人は、天地
と日月と共に、萬代にもが

反　歌

3235
山ノ邊の五十師の御井は、おのづから
なれる錦を張れる山かも

○

3236
空みつ大和ノ國青丹よし奈良山越え
て、山城の綴喜の原從、ちはやぶる
宇治の邊の岡ノ屋のあごねの原を千
歳にかくる事なく、萬代にありがよ
はむと、山科の石田ノ杜の皇神に幣取
り向けて、われは越え行く。逢坂山
を

つて來て筏を造へ、其に楫をば差して、石の出た岸を漕ぎ
廻り乍ら、川の島の樣な洲から洲へと漕いで行つて、幾ら
見ても、見飽きのしない吉野の、瀧の音も騷しく落つる白
波の容子よ。

3233
吉野の激湍も、激く搖るばかりの音を立てゝ、落ちて行く
白波よ。都に殘つてゐる人に、見せたく思ふ白波よ。

3234
安らかにお治めになる、日本の天皇陛下なる日の神の御末
の、御子がおあがりになる、食物を出す處の、伊勢の國を
眺めると、結構な容子だ。山を見ると、高く尊く見える。
川を見ると、さはやかに綺麗に流れてゐる。水門で口を閉
ぢた海も、廣い事だ。ずつと見渡す島の名も、評判に聞い
たものばかりだ。此點をば、見た目が心持ち好い、と言ふ
のであらうか。口の端に懸けて申すも畏れ多いが、山ノ邊
の里の五十師原に、御所を造へ奉つて仰ぎ見ると、朝日の
樣に、見た目が立派な事だ。又夕日の樣に、壯麗な事だ。
春の時分の山の枝も、しなふばかりに花が咲き榮えて、秋
の時分の山の紅葉の色が、なつかしい事だ。其樣な御所に
仕へる人達は、天地日月の變らない如く、幾萬年迄も變り

3235
この山ノ邊の、五十師の御井の清水の湧く邊は、自然に出來
た錦を張つて、干してある山であるか、と思はれる程だ。

3236
大和の國の奈良山をば越えて、山城の綴喜の原をば通り、
宇治の邊の岡の里の、あこねが原の邊をば通つて、千年經
つても、一年も此處を通らぬ年はなく、萬年經つても、此
處を續けて往來したいもんだ、と山科の石田杜に在つしや
る尊い神樣に、お供への布を供へて、自分は越えて行く事
だ。逢坂山をば。

なく、仕へてゐる樣にありたいものである。

異本の歌

3237 青丹よし奈良山過ぎて、武士の宇治川渡り、處女等に逢坂山に、手向け草幣取り置きて、吾妹子に近江ノ湖の、沖つ波來寄る濱邊を昏々と一人ぞ吾が來る。妹が面を欲り

反歌

3238 逢坂を打ち出でゝ見れば、近江の湖白木綿花に、波立ち渡る

○

3239 近江ノ湖泊八十あり。八十島の島の崎々、あり立てる花橘を、秀枝に貽、ひき懸け、中つ枝に斑鳩懸け、下枝に鵠を懸け、斯が母を捕らくをしらに、いそに、斯が父を捕らくをしらに、いそばひ居るよ。斑鳩と鵠と

○

3240 大君の命畏み、見れど飽かぬ奈良山越えて、眞木積む泉ノ川の早き瀬に棹さし渡し、千早振る宇治の渡の激湍瀬を見つゝ渡りて、近江路の逢坂山に手向けして吾が越え行けば、漣の志賀ノ唐崎、幸くあらば復顧みむ。道の隈八十隈毎に歎きつゝ吾が過ぎ行けば、彌遠に里さかり來ぬ。彌高に山も越え來ぬ。劍大刀伊香ノ山。如何吾がせむ。行方知らずて

反歌

3241 天地を歎き祈ひのみ、さきくあらば、また顧みむ。志賀ノ唐崎

3237 奈良の山を過つて、宇治川を渡つて、處女達に逢ふと言ふ名の逢坂山に、お供へ物として、幣を差し上げて置いて、いとしい人に逢ふと言ふ、近江の湖の沖の浪の寄せて來る濱を、あゝ夜が明けた、日が暮れたと終日歩いて、只一人、いとしい人に逢ひたさに、やつて來る事だ。

3238 逢坂山をずつと離れて見ると、近江の湖水には、白い木綿でこしらへた造花の樣に、眞白に、波が立ち續いてゐる。

3239 近江の湖水に、港が澤山あります。泊り場所が、澤山あります。其澤山の島の岬々にある處の、立つてゐる橘の花よ。其に、先の枝には鵠をひつ懸けて置き、中の枝には、まめまはしを懸けて置き、下の枝には、鵠を懸けて置いて、鳥を捕らうとするが、自分の母を、人間が捕らうとするのを知らずに、自分の父を、人間が捕らうとするのを知らないで、お互にふざけ廻つてゐる事だ。其枝のまめまはしと、鵠とが。

3240 天皇陛下の仰せを畏つて、いくら見ても見飽かない奈良山を越えて、檜を積み下す和泉川の早い瀬に櫂をさし渡し、其から、又宇治の渡り場所の激湍を眺めながら渡つて、近江へ行く道の逢坂山の神に、お供へ物をして自分が行くと、漣の里の志賀の唐崎が見える。達者だつたら、あの唐崎をまう一度出て來て見よう。道の澤山の辻々に、振りかへり振りかへりして行くと、段々遠く、故郷を遠のいて來た。段々遠く、山を越えて來た。其中に又、伊香山が見えだした。其山の名ではないが、如何したらよいだらうか。一體何處へ行くのか、訣らない身は。

3241 天地の神々よ。お歎き申しお頼み申して、斯うして無事であつたなら、再、立ち戻つて見たいものだ。此志賀の唐崎の景色を。

右二首は、佐渡へ流罪に遭うた人の歌。反歌は、穗積ノ老のだといふ。

○

3242 もゝしね美濃ノ國、高北の泳ノ宮に、日向ひに行き靡かくを、ありと聞きて、吾が通ひ路の、大木曾山、美濃ノ山、靡けと人は蹈めども、斯くよれと人はつけども、心なき山の大木曾山。美濃ノ山

○

3243 處女等が麻笥に垂りたる、績麻なす長門ノ浦に、朝凪に滿ち來る潮の、夕凪に寄り來る波の、其潮の彌ますますに、其波の彌しく〳〵に、吾妹子に戀ひつゝ來れば、阿胡ノ海の荒磯の上に、濱菜摘む蜑處女等が、うながせる領巾も照るかに、手に纏ける玉もゆらゝに、白栲の袖振る見えつ。相思ふらしも

反歌

3244 阿胡ノ浦の荒磯の上のさゞら波、我が戀ふらくは、やむ時もなし

○

3245 天橋も長くもがも。高山も高くもがも。月讀の持てる復若水いとり來て、君に獻りて、をち得しむもの

反歌

3246 天なるや日月の如く、吾が思へる君が、日にけに老ゆらく惜しも

○

3242 美濃國なる高北の泳の宮に、西の方にずつと靡いて續いてゐる、と言ふ事を聞いて、それでは邪魔になるから、と言ふので、自分のいとしい人への通ひ路なる、大木曾山やら、美濃山などを低く片よれ、といくら人なるわたくしが蹈んでも寄らず、此方の方へ片寄れ、とわたくしがついても片寄らない、心ない大木曾山よ。美濃の山よ。

3243 娘達の麻を入れた桶に垂してゐる、紡いだ絲ではないが、長門の海岸に、朝の海面の靜かな時分に、さして來る潮、其から、日暮れの風の靜かな時分に、寄せる波。其潮の樣に、愈どん〳〵と、其波の樣にどん〳〵と、愈しきりなく、いとしい人に焦れて遣つて來ると、既に都も近くなつて、阿胡の海の岩濱の邊で、濱に生えてゐる菜を摘んでゐる蜑の娘たちが、首に懸けてゐる領巾も輝く程に、或は手に纏きつけた玉が、搖れて良い音を出す程に、袖を振つてゐるのが見える。あれも私と同じ樣に、自分のいとしい人の事を思うてゐるに違ひない。

3244 英虞の浦の岩濱の上に、打ちよせる小波ではないが、自分の焦れる心は、やすまる間と言うてはない。

3245 天への通ひ路にあると言ふ橋も、いくらでも長くあつてくれゝばよい。高い山も、いくらでも高くあつてくれゝばよい。さうすれば、それによつて月の所に達して、お月樣の持つてゐる若がへりの水を取つて來て、思ふお方にさしあげて、年を若がへらさうものを。

3246 空にある所の日や月の樣に、何時迄も仰いでゐたいと思ふお方が、一日々々と目立つて、年よつて行かれるのが、大事に思はれる。（これは、某天皇に奉つたものと思はれる。）

3247 沼名川の底なる玉。求めて得し玉かも。拾ひて得し玉かも。惜らしき君が老ゆらく惜しも

相聞

3248 磯城島の大和ノ國に、人さはに充ちてあれども、藤波の思ひまつはし、若草のしぬびつきにし君が面に戀ひや明さむ。長きこの夜を

反歌

3249 磯城島の大和ノ國に、人ふたりありとし思はゞ、何かなげかむ

○

3250 磯城島の大倭ノ國は、神からか言擧げせぬ國。然れども我は言擧げす。天

地の神も甚我が思ふ心知らずや。行く陰の月も經行けば、玉かぎる日も重り、思へかも胸安からず、戀ふれかも心の痛き。末遂に君に逢はずば、我命の生けらむ極み、戀ひつゝも我は渡らむ。まそ鏡正目に君を逢ひ見てばこそ、我が戀ひやまめ

反歌

3251 大船の思ひ憑める君故に、盡す心は、惜しけくもなし

3252 ひさかたの都をおきて、くさまくら旅行く君を、何時とか待たむ

異本の歌（人麻呂集）

3253 葦原の瑞穗ノ國は、神ながら言擧げせぬ國、しかはあれど、言擧げぞ我が

3247 いとしいお方の優れた容子は、沼名川の底にある玉の様なものだ。其玉は探し廻つて、手に入れた玉と言ふのか。偶然得た玉と言ふのか。ともかくも立派な玉である。其を年よらせるのが惜しい、玉の様なお方が、年よつて行かれるのが、大事だ。

3248 この大和の國には、人は澤山一杯に居るけれど、藤の花の様に纏ひついて焦れて居り、若草ではないが、しな〳〵と心の中に思ひ染めて來た、いとしいお方の顔を見たさに焦れて、長い今夜を明さねばならないだらうか。

3249 此大和の國に、同じ様な人が二人ゐるのだと思はれゝば、此様に迄、何も溜め息ついて焦れる事はないのだが、いとしいあの人の外に、身代りになる者はない、と訣つてゐるので、歎かずには居られない。

3250 此日本の國は、神の所爲だと言ふので、神に任せて置いて、彼此と祈りの語を口に出さないでも、人の心を知つて、神がよく取り計うて下さる爲に、諸人の滿足してゐる國だ。併し私は、其にも係らず、今神様にお祈りをするのである。天地間に入らつしやる神々も、私の思うてゐる心持ちは、一向御存じないのでせうか。過ぎて行く日陰によつて、月もどん〳〵とたつて行くし、日さへ幾日も積つて來る迄、思ひ込んでゐる爲か、心持ちが落ち付かない。焦れてゐる爲か、心持ちがつらい。此様にして、とう〳〵しまひには、いとしい方に逢はなければ、自分の命が續いて生きてゐる間は、焦れ續けてゐるであらう。まのあたりあのお方を、逢うて見たら、其時こそ、私の焦れる心は、止まるであらう。

3251 大船に乘つた様に、信頼してゐるあなたであるのだもの、其人の爲に、心を碎いて心配する事は、幾らしても大事ない。

3252 都を後にして、旅に出かけて行くいとしいお方を、何時お歸りになると思ひ頼んで、待つてゐたらよからうか。

3253 此葦原の瑞穗の國は、神様任せにして置いて、わざ〳〵祈つたりなどせないでも、よい國だ。けれども、其わざとの祈りを私はする事だ。私が願ふ通りに神の精靈が働いて、

する。こと幸くまささきくませと。つつみなく幸くいまさば、荒磯波ありても見むと。百重波千重波頻きに、言擧げする、我

反歌

3254 磯城島の大倭ノ國は、言靈の助くる國ぞ。まささきくありこそ

○

3255 古從言ひ續ぎけらく、戀すれば安からぬものと、玉の緒の續ぎては言へど、處女等が心を知らに、其處知らむよしのなければ、夏麻ひく領かぶしまけ、刈薦の心も萎に、人知れず、もとなぞ戀ふる。いきのをにして

反歌

3256 しま〳〵に、思はず、人はあらめども、暫しも、我は忘らえぬかも

○

3258 あら玉の年は來行きて、玉梓の使ひの來ねば、霞立つ長き春日を、天地に思ひ足らはし、たらちねの母が飼ふ蠶の繭籠り息づき渡り、我が戀ふる心のうちを、人に言ふものにしあらねば、松が根の待つ事遠み、天傳ふ日の暮れぬれば、白栲の、我が衣手は、とほりて濡れぬ

反歌

3259 かくのみし相思はざらば、天雲のよそにぞ、君はあるべかりける

○

いとしい方が無事でいらつしやる樣に、とお願ひする事だ。さうして、何の災難もなく、無事で歸つて來て下さつたなら、荒磯にうつ波ではないが、何時迄もさうして、見て居よう、とまるで、幾重にも〳〵重つて、うち寄せる波の樣に、しつきりなく、口に出してお祈りをする事だ。（此歌は、思ふ人の海路の無事を祈つたのであらう。）

3254 大倭の國は、語にひそんである精靈が、不思議な作用を現して、人に力添へをしてくれる國である。私が今かうして祈つてゐるのだから、きゝ目のない訣はない。どうぞ無事でいらつしやつて下さい。

3255 昔から言ひ續いである事には、「戀ひをすれば、心のやすまる事のないものだ。」と言ひ續いで傳へてはゐるが、併しやはり、其と知りながら、かあゆい娘の、自分に對する思はくも訣らないで、そして又、其が訣る方法もないので、首をひねつて屈託して、心も萎へて、力なく焦れてゐる。人にも訣らないで、心細く思うてゐる事だ。命懸けでありながら。

3256 あの人の方では、思はないでゐると言ふ樣な事は、始終ありがちの事だらうけれども、私の方は、少しの間も、忘れられない事だ。

3258 年は段々、來ては行つて了ふのに、使ひが遣つて來ないので、霞の立つてゐる長い春の日を、天地に一杯になる程、深く思ひ詰めて、おつかさんが育てゝゐる蠶が、繭に籠つてゐる樣に、家に籠つて、歎息ばかり續けさまにして、思ひ焦れてゐる心は、人に言ふべき訣のものでないから、あまり待ち遠さに、日が暮れて來るといふと、著物の袖は、ぼと〳〵にとほつて、涙で濡れるのが常である。

3259 此樣に迄思ひ合はないものなら、初手から、あの方が、まるきり知らない人として、居てくれゝばよかつた筈なのだ。

3260 小治田(ヲハリダ)の愛知(アユチ)の水を、間(マ)なくぞ人は汲むとふ。ときじくぞ人は飲むとふ。汲む人の間なきが如(ゴト)、飲む人のときじくが如、我妹子に我が戀ふらくは、止む時もなし

反歌

3262 瑞垣(ミヅガキ)の久しき時從(ユ)、戀すれば、我が帶ゆるむ。朝宵毎に

○

3263 籠國(コモリク)の泊瀬ノ川の上つ瀬に、齋杭(イグヒ)をうち、下(シモ)つ瀬に眞杭(マグヒ)をうち、齋杭(イグヒ)には鏡を懸け、眞杭には眞玉を懸け、眞玉なす我が思ふ妹も、鏡なす我が思ふ妹も、ありと言はゞこそ、國にも家にも行かめ。誰(タレ)ゆゑか行かむ

反歌

3264 年わたる迄にも、人はありと言ふを、何時の暇(ヒマ)ぞも。我が戀ひにけむ

異本の歌

3265 世の中を憂(ウ)しと思ひて、家出(イヘデ)せし我や、何(ナニ)にか歸りてならむ

○

3266 春されば花咲きをゝり、秋づけば丹(ニ)の穗にもみづ、美酒(ウマザケ)を神南備(カムナビ)山の佩(オ)びにせる飛鳥ノ川の、早き瀬に生ふる玉藻の、うち靡き心はよりて、朝露の消(ケ)なば消ぬべく、戀ふらくも著(シル)く、逢へる隱妻(コモリヅマ)かも

反歌

3267 飛鳥川瀬々の玉藻の、うち靡き、心

は妹によりにけるかも

○

3268 神籬（ミモロ）の神南備山（カムナビヤマ）從（ユ）、との曇（グモ）り雨は降り來ぬ。天霧（アマギラ）ひ風さへ吹きぬ。大内ノ眞神（マガミ）ケ原從（ユ）偲びつゝ、歸りにし人、家に至りきや

反歌

3269 歸りにし人を思ふと、ぬば玉の其夜は、我も寢（イ）も寢（ネ）かねてき

○

3270 さし燒かむ小家（コヤ）の陋屋（シキヤ）に、掻き捨てむ破（ヤ）れこもを敷きて、かき折らむ醜（シコ）の醜手（シキテ）をさしかへて寢（ネ）なむ君故、あかねさす晝はしみらに、ぬば玉の夜はすがらに、この床の、ひしと鳴るは、いとしい人に片寄つてゐた事だ。

3268 神を祀つてある神南備山から、ずつと雲が懸つて曇つて來て、雨が降つて來た。空も見えぬ程、濛々と立ち込めて、風迄吹いて來た。あの大内ノ郷の眞神ケ原を通つて、自分の事を思ひ込みながら歸つて行つた人は、今頃はもう、家に著いたであらうか。（此は飛鳥ノ宮に仕へてゐた女などが、作つたものと見るのが、適當であらう。）

3269 歸つて行つた人の事を思ふとて、彼（ア）の夜は夜通し、ろくろく寢る事をえうしませんでした。

3270 燒いて了うたらよい程の小さな家で、むさくろしい所の家に、破つて了うたらよさゝうな、ちぎれ〳〵の薦（こも）をば敷いて、へし折りたい程、見ともない穢（キタナ）い手を、さしかはして寢ようとする樣な、其樣な取り處のない私に、通うて下さるお方の爲、晝は一日、夜は夜通し、この寢床が、ぎゆうぎゆうと鳴る程に、ころがり廻つて、溜め息ついてゐる事だ。

迄、なげきつるかも

反歌

3271 吾が心燒くも我なり。はしきやし、君に戀ふるも、吾が心から

○

3272 うちはへて思ひし小野（ヲヌ）は、遠からぬ其里人の標結（シメユ）ふと聞きてし日より、立てらくのたづきも知らに、坐（ヲ）らくのおくかもしらに、父母の斯（シ）が家すらを、草枕旅寢の如く、思ふそら安からぬものを。數く空過（スグ）し得ぬものを。天雲（アマグモ）のゆくら〳〵に、葦垣（アシカキ）の思ひ亂りて、亂り麻笥（ソケ）の麻笥（ヲケ）をなみと、吾が淚千重（チヘ）の一重（ヒトヘ）も人知れず、もとなや戀ひむ。いきのをにして

3271 自分の心を、燒き拂ふものも自分だ。いとしい人に焦れるのも、此自分の心一つだ。其に其自身の心を、どうも出來ないでゐることだ。

3272 野で譬へれば、ずつと以前から、長引いて焦れてゐるあの人は、其野に近くゐる里の人が、自分の物と言ふしるしの標（シメ）を付けた（他の人が自分の戀ひ人として、手に入れた）、と言ふ事を聞いた日から、立つてゐる目的（メド）もつかず、じつとしてゐるにも、さき（見當）も訣らずに煩悶し、自分の家なる父母の家にゐる事さへも、旅に出て、泊つてゐる樣に思うてゐる心の中が、落ち付かない事だのに、其數く心持ちをなくして了ふ事が出來ない事だのに、空行く雲の樣に、躊躇して物を思ひ、心は亂れに亂れて、亂れた麻を入れて納める容れ物がない、卽心が落ちつかないので、自分が溢（コボ）してゐる淚の千分の一も、思ふ人には知られないで、命懸けで焦れてゐなければならぬか。

反歌

3273 二つなき戀ひをしすれば、常の帶を
三重結ぶべく、吾が身はなりぬ

○

3276 百足らず山田の路を、靡く藻のうつ
くしづまと言問はず別れし來れば、
早川の行くへも知らに、衣手のかへ
るも知らに、馬じもの立ちて躓き、
せむ術のたづきを知らに、武士の八
十の心を、天地に思ひたらはし、た
まあはゞ、君來ますやと、我がなげ
く八尺のなげき、玉梓の路來る人の、
立ちどまり如何にと問はゞ、答へや
るたづきを知らに、さにづらふ君が
名言はゞ、色に出でゝ人知りぬべみ、

3273 二つと竝ぶものゝない、激しい戀ひをしてゐるので、この頃は痩せ衰へて、一重廻りの帶を、三重に廻して結ぶ程に、自分のからだは、衰へた事だ。

3276 山田の里の路を、いとしいつれあひに、物も言はずに別れて遣つて來たので、急流の川が流れて行くのも知らず、風の爲に、袖がひるがへるのも氣がつかず、まるで馬の樣に、立ち止つて躓き、どうすればよいか、目的も訣らず、樣々に亂れる心をば、天地間に擴る程深く思ひつめ、自分が溜め息ついて、吐き出した大きな歎息をば、路をやつて來る人が立ち止つて、どうして其樣に、上の空になつてゐるのか、と問うたなら、どう答へてよいか、其目的も訣らず、若し心が合ひさへしたら、いとしい人の方から、尋ねて來て下されようか、といとしいお方の名をよんだら、人が悟つてはならぬと思うて、山から出て來るお月樣を待ちうけるのだ、と人には言うて置いて、私はいとしいお方を待つてゐる事だ。

あしびきの山より出づる月待つと、
人には言ひて、君待つ。我を

反歌

3277 寢をも寢ず、我が思ふ君は、何處邊
に、今宵誰とか、待てど來まさぬ

○

3278 赤駒の馬屋を建て、黒駒の馬屋を建
てゝ、其を飼ひ、吾が行くが如、思
ひづま心に乘りて、高山の峰のたを
りに、射部立てゝ鹿待つが如、床敷
きて、我が待つ君を犬な吠えそね

反歌

3279 葦垣の末かき分けて、君越ゆと、人
にな告げそ。言はたな知れ

○

3277 寢もしないで、私が思うてゐるお方は、今晩あたり誰と、何の邊に居られるか。いくら待つても、お出でにならない。

3278 赤駒の馬屋や、黒駒の馬屋を建てゝ、其處に馬を飼うて育てゝ、其に乘つて出かける如く、可愛い妻が、自分の心に乘り懸つて來て、離れないので、高い山の頂上のたるんだ處に、弓の張り番を立たせて置いて、鹿を待つ樣に、寢床を敷いてお出でを待つてゐるいとしいお方に、犬が吠えて、追ひかへしてくれるな。

3279 葦で造つた垣の上を、掻き分けて戀しいお方が、越えて忍んでいらつしやる、と人に告げてくれるな。此私の言ふ事は、よく辨へてゐてくれ。

3280 我が夫子は待てど來まさず、天ノ原ふりさけ見れば、ぬば玉の夜も更けにけり。さ夜更けと、あらしの吹けば、立ち止り、待つ吾が袖に、降る雪は凍りわたりぬ。今更に君來まさめや。

さなかづら後も逢はむと、慰むる心を持ちて、み袖もち床うち拂ひ、現には君には逢はず、夢にだに逢ふと見えこそ。天の足り夜に

異本の歌

3281 我が夫子は待てど來まさず。雁がねもとよみて寒し。ぬば玉の夜も更けにけり。さ夜更けと嵐の吹けば、立ち待つに吾が衣手に、置く霜も氷に冴え渡り、降る雪も凍り渡りぬ。今

3280 戀しいお方は、いくら待つてもお出でにならない。そして、大空を仰向いて見晴すと、夜も更けた事だ。夜の更けゆくに連れて、山嵐が吹くので、ぢつとたゝずんで待つてゐる、私の袖に降りかゝる雪は、すつかりと凍つて了うた。此様になつてから、お出でになる氣遣ひがあらうか。今日は逢へないでも、其内には逢へるだらう、と慰める心持ちを以て、袖で床を拂うてゐる事だ。正氣では、戀しい方には逢ふ事がないから、せめて夢にでも逢はうとして、現れてください。この長い夜に。

更に君來まさめや。さなかづら後も逢はむと、大船の思ひ憑めど、現には君には逢はず。夢にだに逢ふと見えこそ。天の足り夜に

反歌

3282 衣手に嵐の吹きて寒き夜を、君來まさずば、一人かも寢む

3283 今更に戀ふとも、君に逢はめやも。寢る夜をおちず、夢に見えこそ

○

3284 菅の根のねもころ〳〵に、吾が思へる妹によりてば、言の齋みもなくありこそ。齋瓮を齋ひほり据ゑ、竹玉を間なく貫き垂り、天地の神をぞ我が祈む。甚もすべなみ

3282 袖に山嵐が吹きあたつて、冷い今夜だのに、いとしいお方が、お出でがなくば、一人寢ねばならぬのだらうか。

3283 譬ひ焦れた處で、今になつて、いとしい方に逢はれようか。寢る夜落ちもなく、夢に現れて下さい。

3284 くよ〳〵と自分が思ひ込んでゐる、いとしい人の爲ならば、言うてはならぬ語を、忘れて口に出しても、どうか、其祟りがない樣に願ひます、と言うて、祭りの道具の甕を清めて掘つて据ゑ、竹でこさへた玉を、隙き間もない程に貫し、垂し、天地間のあらゆる神を、お願ひする事だ。非常に遣る瀬ないので。

反歌

3285 たらちねの母にも言はず、つゝめりし心はゆるす。君がまに〳〵

異本の歌

3286 たまだすきかけぬ時なく、我が思へる君によりてば、倭文幣を手に取り持ちて、竹玉を繁に貫き垂り、天地の神をぞ吾が祈む。甚もすべなみ

反歌

3287 天地の神を祈りて、我が戀ふる君に、必逢はざらめやも

又、異本の歌

3288 大船の思ひ憑みて、ねもごろに彌遠長く、吾が思へる君によりてば、言のゆゑもなくありこそと、木綿だすき肩に取り懸け、齋瓮を齋ひ掘り据ゑ、天地の神にぞ我が祈む。甚もすべなみ

○

3289 御佩刀を劍ノ池の蓮葉に溜れる水の、行く方なみ、我がする時に、逢ふべしと卜へる君を、な寝ねそと母聞せども、吾が心清澄ノ池の池の底、我は忘れじ。たゞに逢ふ迄に

反歌

3290 古の神の時より、逢ひけらし。今の心も、常忘らえず

○

3291 み吉野の眞木立つ山に、繁に生ふる山菅の根の、ねもごろに我が思ふ君

3285 おつかさんにもうちあけないで、大事に愼んで、隱した心をばゆるめて、あなたのなさるとほりにうちとけた。

3287 天地間のあらゆる神に、お祈り申して焦れてゐるいとしいお方に、逢はないと言ふ事は、きつとないだらう。（たとひ今はかうでも、神のお守りで。）

3289 劍の池の蓮の葉に溜つてゐる水が、どちらに溢れるか訣らない樣に、先の方角が付かないで、迷うてゐる時分に、逢へるだらうと占に出た、いとしいお方だのに、おつかさんは、あの人に身を任せて、共寢などをしてはいけない、と仰つしやるけれど、（前と同じ、池の譬へで言うて見れば、）清澄ノ池の底が深い樣に、深く思ひ込んで、決して、忘れはしますまい。ぢかに出逢ふ迄は。

3290 昔の神の時代とも言ふべき古い以前から、私とあのお方とは、逢ひ初めた事なのに逢ひない。心の中に沁み込んで、未にちつとも、忘れる事の出來ないのを思ふと。

3291 吉野の檜の生えてゐる山に、密生してゐる山菅の根ではないが、ねもころ卽、くよ〳〵とわたしが思ひ焦れてゐるお

は、大君の任けのまに〳〵、鄙さかる國治めにと、群鳥の朝立ち行かば、殘れたる我か戀ひむな。旅なれば、君か偲ばむ。言はむすべ、せむすべ知らに、延ふ葛の別れのあまた惜しきものかも

反歌

3292 現身の命を長くありこそと、とまれる我は、齋ひ待ちなむ

○

3293 み吉野のみ金ノ岳に、間なくぞ雨は降るとふ。ときじくぞ雪は降るとふ。その雨の間なきが如、その雪のときじくが如、ひまも落ちず、我はぞ戀ふる。妹がたゞかに

方は、天子のお言ひつけの通りに從うて、邊鄙の遠く離れた國を治める爲に、行かうとしてゐられるが、朝立ちをして出て行かれたならば、取り殘された自分の方が、焦れるか。其ともあのお方も、旅のお身の上だから、定めて焦れなさる事であらうか。どう言うて宜いか、方法も訣らず、どうすれば慰まるか、其爲方も訣らずして、別れて行くのが、非常に殘念な事である。

3292 生きてゐる人間としての命をば、長くあらせて下さい、とせめては、謹んで神をお祀りをして、取り殘された私は、待つて居りませう。

3293 吉野の金峯山に、小やみなく雨が降ると言ふ事だ。又常べつたり、雪が降つてゐると言ふ事だ。其雨が小止みない樣に、其雪が常べつたりであるやうに、ちつとの間の落ちもなしに、自分は焦れてゐる事だ。いとしい人の側に居られるやうに、といふ事をば。

反歌

3294 み雪降る吉野ノ岳に居る雲の、よそにみる子に戀ひわたるかも

○

3295 うち日さつ三宅の原從、直土に足蹈み抜き、夏草を腰になづみ、如何ならむ人の子故ぞ、通はすも。吾子。」うべな〳〵、母は知らず。うべなうべな、父は知らず。蜷の腹か黑き髪に、眞木綿持ちあざね結ひたり。大倭の黃楊の小櫛をおさへさすしき栲の子。其ぞ、吾が妻

反歌

3296 母父に知らせぬ子ゆゑ、三宅路の夏野の草を、なづみ來るかも

3294 雪の降つてゐる吉野の高い峯に、懸つてゐる雲ではないが、側へは寄れないで、遠くから見てゐる人に、焦れ續けてゐる事だ。

3295 三宅の原をば、地面にぶす〳〵と足を突き込んで、夏草を腰で押し分けて、はかどらないが、進んで行き、さうして一體、どうした家の娘さんか知らぬが、苦心して通うて行きなさるのだ。坊つちやん。

おつかさんの知らないのも、無理はない。お父さんの知らないのも尤だ。眞黑な髮をば、木綿で以てかゞつて、結び垂し、黃楊の櫛をおさへにして、さしてゐる美しい娘は、卽自分のいとしい人だ、と思うてください。

3296 お父さんや、おつかさんに隱して、知らさないで通うてゐる人の爲に、三宅への路に生えてゐる夏野の草をば、分けなやんで、やつて來た事だ。

○

3297 玉だすき懸けぬ時なく、我が思ふ妹にし逢はねば、茜さす晝はしみらに、ぬば玉の夜はすがらに、寢も寢ずに妹を戀ふるに、生けるすべなし

反歌

3298 よしゑやし、死なむよ。吾妹。生けりとも、かくのみこそ、我が戀ひ渡りなめ

○

3299 見渡しに妹らは居らし、この方に我は立ちて、思ふ心安からなくに、歎く心安からなくに、さ丹塗りの小舟もがも。玉纏きの小楫もがも。漕ぎ渡りつゝ語はましを

3297 心に思ひ浮べない時とてはなく、焦れてゐる人に逢はないので、晝は一日、夜は夜通し、寢もしないで、いとしい人に焦れてゐるので、生きてゐるにも、やるせない事だ。

3298 まゝよ、一層死んで了はうよ。生きてゐた處で、こんな風にばかり、私が焦れ續けてゐる事だらう。いとしい人よ。

3299 遙かに見渡す遠方に、いとしい人は立つて居り、こちらの方に、私が立つてゐて、間が隔つてゐる爲に、思ふ心持ちが落ちつかず、歎いてゐる心持ちが落ちつかない。何卒丹で塗つた小さい舟でもあればよい。玉を飾つた楫でもあればよい。さうすれば、始終漕ぎ渡つて行つて、語り合ふのに。（此は、七夕の歌に違ひない。）

異本の歌

隱國の泊瀬の川の彼方に、妹らは立たし、この方に我は立ちて、（以下同じ）

○

3300 おしてる難波ノ崎に、引き上る朱のそほ船。そほ船に綱引きかけ、ひこづらひあり無みすれど、言ひづらひあり無みすれど、ありなみ得ずと、言はれにし。我が身

○

3301 神風の伊勢ノ海の朝風に、來よる深海松。夕凪に來よる股海松。深海松の深めし我を、股海松の復行きかへり、妻と言はじとかも、思ほせる。君

3300 難波の崎の邊をば、綱で引いて上る丹で塗つた眞赤な船よ。其眞赤な船に綱懸けて引く樣に、人の噂に對抗して、無い事だと言はうと思ひ、言ひ爭うて、無い事だと言はうと思ふけれど、とう〳〵否定する事が出來ない迄に、評判を立てられた事だ。自分は。

3301 伊勢の海の、朝の波の立たぬ時分に、海岸に寄つて來る深海松。それから又、日暮れの波の無い時分に、寄つて來る股海松。其深海松で、心に深く思うてゐた私なのに、其股海松で、復まう一度とは私の方へ戻つて來て、私を妻と言はうまい、と思うていらつしやるのですか。恨しいお方よ。

○

3302 紀ノ國の牟婁ノ江の邊に、千歳にさはる事なく、萬代にしかもあらむと、大船の思ひ憑みて、出で立ちし清き渚に、朝凪に來寄る深海松。夕凪に來寄るなは海苔。深海松の深めし子らを。なは苔の引けば絶ゆとや。里人の行きの集ひに、泣く子なす行きとりさぐり、梓弓々腹振り起し、鳴の羽を二つ手挟み、はなりけむ人し悔しも。戀ふる思へば

○

3303 里人のわれに告ぐらく、汝が戀ふるうつくし夫は、もみぢ葉の散りのまがひに、神南備のこの山邊から、ぬばば玉の黒馬に乘りて、川の瀬を七瀬渡りて、うらぶれて夫は逢へりと、人ぞ告げつる

反歌

3304 聞かせずして默もあらましを。何しかも、君がたゞかを人の告げつる

問答

3305 もの思はず路行きなむも。青山を振りさけ見れば、躑躅花匂へる處女。櫻花榮ゆる處女。汝をぞもわれによすとふ。吾をぞも汝によすとふ。荒山も人しよすれば、よそるとぞ言ふ。汝が心ゆめ

反歌

3302 紀州の牟婁の入り江の海岸に、何時々々迄も、二人の間に障碍なく、何時々々迄もかうして居らうと信じて、始終表に出て見た、清らかな波うちぎはに、朝の靜かな時分に寄つて來る深海松、夕の穩やかな時分に寄つて來る繩海苔。其深海松ではないが、心に深く思ひ込んでゐた人だのに、なは苔が引いたら切れる樣に、二人の間も切れる事があるといふ訣で、こんな事をなされたのか。近邊の人々が、澤山集つて、わや〳〵と評判する時分に、嬰兒の樣に遺つて來て、取り付いて、しやくり上げて、泣き悲しんでゐるのに、まるで其矢は、梓弓の中程を振り立てゝ、鳴の羽根の矢を二本迄手に挾んで放つ、其樣に離れて、二人の間を引きわかれて了うた、人の心の程が、思へば、遺憾に堪へない。これ迄、自分が焦れて居つた事を思ふと。

3303 近處の人が、自分に言うた事には、お前が焦れてゐる、大事のつれあひは、紅葉が目を紛す樣に、ひどく散る神南備山の山の麓を通つて、黒い馬に乘つて、川の淺瀨をいくつもいくつも渡つて、悄然とした風をして、自分に行き逢うた、と私に話しをした。（此は挽歌ともとれるし、又配流に逢うた人に、妻などの詠んだものと見ても、わかる樣である。）

3304 私の耳に入れないで、其儘居つたらよかつたのに、何うして、いとしい方の容子をば、人が告げた事だらう。

3305 せめて路を歩くのに、物思ひをせずに歩きたい事だ。青々とした山を遥かに見渡すと、其處に咲いてゐる躑躅の樣に、華やかな處女で、櫻の花の樣に、今が女盛りの頂上である、娘であるお前さんを、人が私と竝べて、評判を立てゝゐると言ふ事だ。私をば、彼の人の名と竝べて、評判すると言ふ事だ。心のない險しい山でも、人が評判を立てると、よつて來ると言ふ事だ。お前の心も精々ゆるめないで、評判にまけて、人にあらはさないで居つてくれ。

3306 如何にして戀ひ止むものぞ。天地の
神を祈れど、吾は思ひます
3307 しかれこそ、年の八歳を、切る髪の
吾がよちを過ぎ、橘の秀枝を過ぎて、
この川の下にも長く、汝が心待て
反歌
3308 天地の神をも、われは祈りてき。戀
ひとふもののはかつてやまずけり
○
3310 隱國の泊瀬小國に、さよばひに吾が
來れば、たなぐもり雪は降り來ぬ。
さ曇り雨は降り來ぬ。野つ鳥雉子は
とよみ、家つ鳥鶏も鳴き、さ夜は明
け、この夜は明けぬ。入りて朝寢む。
この戸開かせ

3306 どうすれば、焦れる心が止むのであらう。天地間のあらゆる神樣を祈つて、この心をば無くして下さい、と祈つても、愈思ひ募るばかりである。

3307 あなたの仰つしやるとほり、私が此樣に思うてゐればこそ、この八年以來と言ふもの、おかつぱに切つた髮の、同じ年頃の人達より、脊が高くなり、果ては、橘の枘の枝よりも、脊が高くなる迄、此處を流れる川ではないが、心の底に久しく、あなたの事を思ひつめて、あなたの、心をうちあけて下さるのを、待つてゐるのです。

3308 天地間のあらゆる神樣さへ、自分は祈つて、戀ひを止めて貰はうと思うてゐたが、これ迄につひぞ、戀ひと言ふ心が、無くなつた事はなかつた。

3310 泊瀬の國に、妻を探しに私が來た處が、空一帶に曇つて、雪が降つて來た。空が曇つて、雨が降つて來た。野に住む鳥の雉子が、邊を震動させて鳴き、家に飼ふ鳥の鷄も鳴いて、あゝ夜は明けた。夜は明けた。さあ這入り込んで、朝寢をしようと思ふ。此戸を開けて下さい。

反歌

3311 隱國の泊瀬小國に、妻しあれば、石は蹈めども、なほぞ來にける

3312 隱國の泊瀬小國に、よばひせす吾が夫の君よ。奥床に母はい寢たり。外床に父はい寢たり。起き立てば母知りぬべし。出でゝ行かば父知りぬべし。ぬば玉の夜は明けぬべし。こゝだくも、思はぬ如き隱妻かも

反歌

3313 川の瀨の石蹈み渡り、ぬば玉の黒馬の來夜は、常にあらぬかも

○

3314 つぎねふ山城路を、人夫の馬より行くに、己天の陸路より行けば、見る

3311 石の上を蹈んで、通らなければならない道だけれども、泊瀨の國には、妻が居るので、何とも思はずに、やつて來た事だ。

3312 泊瀨の國へ、妻を探しにいらつしやつた懷しいお方よ。私を眞中に挾んで、奥の方の床には、おつかさんが寢てゐます。表に近い床には、お父さんが寢てゐます。起きあがつたら、おつかさんが悟るでせうし、出て行つたら、お父さんが悟るだらう、と憚つてゐる。其中に、夜が明けさうになつて來ます。非常に思うてゐながら、まるでかうした容子では、思うてゐないのと同じ樣な、隱れて逢うてゐる、いとしい人である事よ。

3313 川の淺瀨の石を蹈み渡つて、いとしい方を乘せた黒馬が、遣つて來る夜は、常住不變であればよいが。

3314 山城へ通ふ路を、よその人の夫は馬で行くのに、自分の夫が地面を歩いて行くので、それを見る毎に、泣くばかりで

毎に哭のみし泣かゆ。そこ思ふに心し痛し。たらちねの母がかたみと我がもたる眞澄鏡に、蜻蛉領巾おひ竝め持ちて、馬かへ。吾が夫

反歌

3315 和泉川渡り瀬深み、我が脊子が旅行き衣、裾ぬれむかも

異本の歌（二首の中）

3316 眞澄鏡持たれど、我は效なし。君が陸路よりなづみ行く、見れば

3317 馬買はゞ、妹陸路ならむ。よしゑやし、石は蹈むとも、吾は二人行かむ

○

3318 紀ノ國の濱に寄るとふ、鰒玉拾はむと言ひて、妹の山脊の山越えて行きし

ある。其事を思ふと、心がつらくなつて來る。（それで）お母さんの身代りとして、私が大事に持つてゐる澄みきつた鏡に、蜻蛉の羽の樣に薄い領巾。此二品をば一處に抵當にして、（金を借りて）さうして、馬をお買ひなさい。あなたよ。

3315 和泉川は渡る瀬が深いので、いとしいお方の著物の裾が、濡れるかも知れない。

3316 澄みきつた鏡は持つてゐるけれど、私には、何の役にも立たぬ。大事のお方が、地面を徒歩で、難澁しながら行かれるのを見ると。

3317 自分が馬を買うたら、自分だけはよいが、二人行く時には、いとしいお前が、地面をひろひで行く事になるだらう。まよ、石の上を蹈んで行つても、かまはない。二人歩いて行かう。

3318 紀州の海岸に寄つて來る、と言ふ眞珠を拾うて來よう、と言うて紀州境に在る、妹山や脊山を越えて行かれたお方が、何時歸つてお出でにならう、と路傍に出懸けて、日暮れの

君、何時來まさむと、玉桙の路に出で立ち、夕占を吾が問ひしかば、夕占のわれに宣らく、吾妹子や。汝が待つ君は、沖つ波來よす白玉、邊つ波よする白玉、求むとぞ、君が來まさぬ。拾ふとぞ君は來まさぬ。久ならば今七日ばかり、早からば今二日ばかり、あらむとぞ、君はきこしゝ。な戀ひそ。吾妹

反歌

3319 杖つきも、つかずも我は行かめども、君が來まさむ路の知らなく

3320 直は行かず、茲從巨勢路から、石瀨蹈み、とめぞ、わが來る。戀ひてすべなみ

辻占を自分がとうた處が、その辻占が、私に告げた事には、いとしい人よ。お前が待つてゐるお方は、沖の方の波に乘つて、寄つて來る白玉やら、海岸の波が寄せて來る白玉を探すとて、其爲に歸つてお出でにならないのだ。其を拾ひ取る爲にお出でにならないのだ。長ければ、まう七日ばかり、早ければまう二日ばかり、間があるであらう、とあの方は、仰つしやつた事だから、其樣に焦れるな。いとしい人よ。（と辻占が告げた。）

3319 在處が訣つてゐれば、杖をつかなければならない山路は、杖をつき、つかずともよい平地は、つかずに、平地山地の區別なく、私は尋ねて行かうが、あの方の歸つていらつしやる路が、訣らない事だ。

3320 都に歸るのは、すぐな道もあるが、其すぐな路は通らないで、此處即、巨勢街道をば、石の多い川の淺瀨を越えながら、あなたの在り場所を突き止めて、遣つて來た事だ。焦れて遣る瀨なさに。（此は、男の歌。）

○

3321 さ夜更けて、今は明けぬと、戸開きて紀へ行く君を、何時とか待たむ

3322 門にゐる處女は、宇智に至るとも、いたくし戀はゞ、今歸り來む

譬喩の歌

3323 しなたつ筑摩狹額田、息長の遠智の小菅。編まなくにい苅り持ち來、敷かなくにい苅り持ち來て、置きて吾を偲ばす。息長の遠智の小菅

挽歌

3324 かけまくもあやに畏し。藤原ノ都しみみに、人はしも充ちてあれども、君はしも多くいませど、行きかへる年の緒長く、仕へ來し君が御門を、天の如仰ぎて見つゝ、畏けど思ひ憑みて、何時しかもひたしいまして、望月のたゝはしけむと、吾が思へる皇子の尊は、春されば殖槻が上の、遠つ人松の下路從登らして、國見遊ばし、長月の時雨の秋は、大殿の砌しみゝに、露置きて靡ける萩を、玉だすきかけて偲ばし、み雪降る冬の朝は、さし柳根はり梓を、大御手にとらし給ひて、遊ばしゝ我が大君を、けぶり立つ春の日暮し、眞澄鏡見れどあかねば、萬代にかくしもがもと、大船の憑める時に、吾が涙目かも惑は

3321 夜が段々更けて、もう夜が明けたと言うて、戸を開いて、紀州へ出かけて行くお方をば、何時お歸りにならう、と思うて待つてゐようか。

3322 門に出て、私を送つてゐるあの娘が、家の内へ這入る其宇智郡迄行つて了うて後も、おまへが、ひどく焦れるやうな事であつたら、今に歸つて來ようから、待つてゐてくれ。

3323 筑摩の里の狹額田の邊、息長の遠智の地に出來る菅よ。編むと言ふ訣でもないのに、刈つて持つて來、敷くと言ふ訣でもないのに、刈つて持つて來て、手もつけずにうつちやつて置く樣に、手もつけさせないで自分に焦れさす、あの息長の遠智の小菅の樣な、（近江の娘よ）。

3324 口に懸けて申すのも、畏れ多い事だ。けれども藤原の都一杯に、人は充滿してゐるけれど、そして其中で、又皇子諸王は澤山いらつしやるけれど、どん〳〵たち代る歳月長くお仕へ申して來た、我が皇子の御所の御門を、空を見る樣に、ふり仰いで見ながら、勿體ない事だが、此方にこそ、と信賴申し上げて、早く大きくお成りなされて、十五夜の月の樣に、圓滿にお榮えなさる事であらう、と私が思うてゐた皇子樣は、春が來ると、殖槻の岡の松の下を通る路をば、お登りなされて、國の容子を眺望してお遊びになり、時雨の降る九月の秋の頃は、御殿の雨落ち石の邊に、露を受けて靡いてゐる萩をば、心の中に描いて惜しんでお出でなされ、雪の降る冬の朝には、弦を張つた梓の弓を、お手にお取りなされて、お遊びなされた皇子樣をば、霞の立つてゐる春の日、一日中見ても見飽かないので、何時々々迄も、此樣にして仕へて居りたいものだ、とおたより申し上げて居つた最中に、自分の目から落ちる涙の爲に、目が見間違うたのか知らぬが、遥かに御殿の方を見遣ると、御殿を白栲で眞白にお飾り申し上げて、其にお仕へ申してゐる舍人たちは、眞白に麻の著物を著てゐるので、此は夢であらうか、正氣であらうか、と惘然としてゐる時分に、城ノ上への路を通つて、磐余を遥かに見ながら、葬列が行つて、尊い葬りの式でお葬り申し上げたので、路を歩いても何う行つて宜いか目的も立たず、いくらお慕ひ申し上げても、其效がなく、いくら歎いても、歎く果てがないので、せめてお袖で以つて、始終觸つてゐられた殖槻の岡の松をば、物を

す。大殿をふりさけ見れば、白栲(シロタヘ)に
飾りまつりて、うち日さす宮の舎人(トネリ)
は、栲のほに麻衣著(アサギヌケ)れば、夢かも、
現(ウツ)つ、曇り夜の惑へるはしに、
あさもよし城(キ)ノ上の路(ミチ)従、つぬさはふ
磐余(イハレ)を見つゝ、神葬(カムハフ)り葬(ハフ)り奉(マツ)れば、
行く路のたづきを知らに、思へども
しるしをなみ、歎けどもおくかなみ、
御袖もち觸(フ)らしゝ松を、言(コト)とはぬ木
にはあれども、あら玉の經(タ)つ月毎に、
玉だすきかけて偲ばな。畏かれども

反歌

3325 つぬさはふ磐余(イハレ)ノ山に、白栲に懸かれ
る雲は、大君ろかも

○

3326 敷島の大和ノ國に、如何さまに思ほし
めせか、つれもなき城(キ)ノ上ノ宮に、大
殿を仕へまつりて殿ごもり籠りいま
せば、朝(アシタ)には召して使はし、夕(ユフベ)には
召して使はし、使はしゝ舎人の子ら
は、行く鳥の群れて侍(サモ)らひ、あり待
てど召し給はねば、劍大刀磨ぎし心
を、天雲(アマグモ)に思ひはふらし、こいまろ
びひづち泣けども、飽き足らぬかも

○

3327 もゝしぬの三野(ミヌ)ノ王(オホキミ)。西の厩(ウマヤ)建てゝ飼
ふ駒。東(ヒムガシ)の厩建てゝ飼ふ駒。草こそ
は取りて飼ひなめ。水こそは汲みて
飼ひなめ。何(ナニ)しかも、葦毛の馬の嘶(イバ)
え立ちつる

3325 磐余の山に、白栲の布を引いた様に、白く懸つてゐる雲は、
皇子様であるのか。

言はぬ木ではあるけれど、何時も〳〵、月日の變つて來る
度毎に、大空遙かに見やつて、其に依つて、お姿を心に浮
べて、お慕ひ申し上げて居らうよ。畏れ多い事だけれども。

3326 此大和の國で、土地も澤山あるのに、何うお思ひなされて
か、淋しい城ノ上の宮の地に、御殿をおこさへなされて、御
殿の奥にお這入りなされて、出ていらつしやらないので、
何時も朝になると、呼んでお使ひなされ、日暮れになると、
呼んでお使ひなされして、使はれた舎人の人たちは、澤山
集つて、伺候してさうして待つてゐるけれど、お呼びなさ
れないので、磨き立てた様に元氣な心も、空の雲の様に發
散して了(シマ)うて、弱つてころげ廻つて、涙にぼと〳〵になつ
て、いくら泣いても滿足の出來ない事だ。

3327 三野ノ王が、西の厩東の厩を建てゝ、其處で餌を遣つてゐら
れた馬は、草をば取つて來て喰はしてゐようのに、何が不
足で、こんなに、西東の厩に飼うた葦毛の馬が、鳴き立て
てゐるのであらうか。(王が亡くなられて、餌を與へる者も
なくて、ひもじさに泣くのだ。)

反歌

3328 衣手を葦毛の馬の嘶え聲。心あれかも、常ゆけに鳴く

○

3329 白雲のたなびく國の、青雲の向伏す國の、天雲の下なる人は、妾のみかも君に戀ふらむ。妾のみかも夫に戀ふれば、天地に言ひたらはして、戀ふれかも、胸の病める。思へかも、心の痛き。吾が戀ひぞ日に日にまさる。何時はしも戀ひぬ時とはあらねども、此長月を我が脊子が偲びにせよと、千代にも偲び渡れと、萬代に語りつがへと、始めてし此長月の過ぎまくを、いたもすべなみ、あら玉の

月のかはれば、せむすべのたどきを知らに、岩がねのこごしき路の、岩床の根はへる門に、朝には出でゐて歎き、夕には入り坐戀ひつゝ、ぬばたまの黒髪敷きて、人のぬる熟睡は寢ずに、大船のゆくらゆくらに思ひつゝ、吾が寢る夜らは、よみもあへぬかも

○

3330 隱國の泊瀨の川の、上つ瀨に鵜を八つ潛け、下つ瀨に鵜を八つ潛け、上つ瀨の鮎を喰はしめ、下つ瀨の鮎を喰はしめ、美し妹に、香魚をあたらし。なぐるさの遠ざかりゐて、思ふ心安けなくに、歎く心安けなくに、衣こそは其破れぬれば、縫ひつゝも

3328 三野ノ王の飼うてゐられた葦毛の馬の嘶く聲が、動物ながら心があるかして、常よりは變つてゐる事である。

3329 此白雲の懸つてゐる國の中で、青い雲が遠く其方を向いて、懸つてゐるだけの廣さの國で、空の雲の懸つた其雲の下の人では、私ばかりが、此樣思ひをして、あの方に焦れてゐるのだらうか。私ばかりがあの方に焦れてゐるので、こんなに天地間に充ち滿つ樣に、思ふ心を十分焦れ言うてゐるので、其焦れてゐる爲に、此樣に胸が病ましいのであらうか。思ひ込んでゐる爲に、心が痛むのであらうか。處が、私の戀ひは、一日々々と募つてゆく。何時だつて焦れてゐない時はないけれど、今さし當つた、此九月と云ふ時を、いとしいお方が、偲び出す種にせよと言はれ、何時迄も思ひ續けて居れと言はれ、又何時々々迄も續けて行けと言うて、二人の關係を始めた、此九月と言ふ時が、過ぎようとするのが遣る瀨なく、月が變つたら、何としてよいか、やり方の目的も訣らないで、岩のごつ〳〵とした路で、大きな廣い岩が根を引いてゐる表に、朝は出て坐つて歎き、日暮れは家に這入つて坐つて、焦れながら髮を敷いて、他の

3330 泊瀨川の上の瀨に、鵜を八つ水に潛らせ、下の瀨にも鵜を八つ水に潛らせ、そして上の瀨の香魚を喰はしめ、下の瀨の香魚を喰はしめるのではないが、くはし妹即美しい妻に、評判のたつのが大事だと言ふので、殘念にも遠のいてゐるので、思うてゐる心が落ち付かない。一體著物と言ふ物は、其が破れたら、又縫ひながら、一つに合せる事も出來ると言ふ。其から玉と言ふ物は緒が切れた節には、それを括つて再、一つに合せる事が出來ると言ふが、二度と逢ふ事の出來ないのは、妹である事よ。

人の寢る樣に、熟睡しては、えう寢ないで、心が動搖して、思ひ續けながら私の寢る晩は、數へきれない事である。

復も逢ふと言へ。玉こそは緒の絶えぬれば、括りつゝ復も逢ふと言へ。復も逢はぬものは、妹にしありけり

○

3331 隱國の泊瀬ノ山、青幡の忍坂ノ山は、走り出のよろしき山の、いでたちのまぐはし山ぞ。惜しき山の、荒れまく惜しも

○

3332 高山と海こそは、山の故かくもうつしき。海の故然も直ならめ。人は脆物ぞ。現身の世人

○

3333 大君の命長み、秋津島大和を過ぎて、大伴の三津ノ濱邊從、大船に眞楫繁貫き、朝凪に水手の音しつゝ、夕凪に楫の音しつゝ、行きし君、何時來ますむと、幣置きて齋ひわたるに、たは言や人の言ひつる。吾が心筑紫の山の、もみぢ葉の散りて過ぎぬと。君がたゞかを

反歌

3334 たはごとや、人の言ひつる。玉の緒の長くと、君は言ひつるものを

○

3335 玉桙の道行く人は、足引きの山行き野行き、たゞ渡り川行き渡り、鯨取り海路に出でゝ、畏きや神の渡りは、吹く風ものどには立たず、立つ波もおほには立たず、頻波の立ち障ふ路

3331 泊瀬の山。其山脈の中の忍坂山は、門の前のよく叶うた山で、表に出て見るに、美しい山である。そのあたら惜しい山が、荒れて行くのは、惜しい事だ。（これは、美しい人の死んだのを、其葬つた山に寄せて、惜しんだ歌である。）

3332 高い山と海とは、山は其に就いて言ふと、つまらぬ山乍ら、此様に何時迄も正身不變であるのであらう。つまらぬ海乍ら、そんなに迄何時迄も、ぢつと其儘であるのであらう。處が人と言ふものは、もろいものだ。肉身を持つた世界の人は。

3333 天皇陛下の御命令を畏つて、此大和の國を通り過ぎて、難波の、大伴の三津の濱から、大舟に楫を一杯さして、朝の靜かな海面に、船頭の聲がし、日暮れの靜かな海面に艣の音がして、そして旅に行つたお方が、何時歸つていらつしやるだらう、と神樣に供へ物をして、謹んで祭りつゞけてゐるのに、自分の心を盡させる、と言ふ語に縁のある、筑紫の山の紅葉の樣に亡くなつてしまはれた、とあの方の御容子を言うたが、あれはたはけた、馬鹿の事を言うたのであらう。さう言ふ事はない筈だ。

3334 馬鹿なたはけた事を、人が言うたのであらう。あの方は、何時迄も長く二人は居よう、と言はれた事だのに、死なれたと言ふ事があるものか。

3335 道中をする人は、山を行き、野を行き、眞直に通つて川を渡つて行き、海路に出で、恐しい荒神のいらつしやる渡り場處は、吹く風も、のんびりとは吹かない。立つ波も、竝み〳〵には立つてゐない。さう言ふ風に、しきりなくおし寄せる波が、邪魔をする道を、まあ誰がいとほしくも決心して、そんな處を渡つたのだらう。（そして、溺れ死んだのであらう。）

を、誰が心いとほしとかも、直渡りけむ

○

3336 鳥が音の聞えぬ海に、高山を隔てになして、沖つ藻を枕に枕きて、鯨の衣濯ぎも著ずに、鯨取り海の濱邊に、うらもなく宿れる人は、母父に愛子にかあらむ。若草の妻かありけむ。思ほしき言傳てむやと、家問へば、家をも宣らず。名を問へど名だにも宣らず。泣く子なす言だに問はず。思へども悲しきものは、世の中の常

反歌

3337 母父も、妻も、子どもゝ、たか〳〵に、來むと待ちけむ人の悲しさ

3336 鳥の鳴き聲の聞えない海で、高い山をば、寢床の風よけとし、沖つ藻を枕として、絹の著物も著よごれたなりで、洗うて著ないで、海の濱邊で、何の心もなく宿つてゐる旅人は、おつかさんやお父さんには、大事の子であらう。家を出て來る前には、女房があつた事であらう。言ひたいと思ふ事を、ことづてゝあげようか、と家を問ふと、家も言はず。名を問ふと、名さへ言はずに、嬰兒の樣に、物も言はない事だ。いくら考へて見ても、悲しい事は、死ぬといふ世の中の道理である。

3337 わかれた時に、兩親も、女房子も鶴首して、もうやつて來るだらう、と待ちうけてゐたらうその人が、氣の毒にも死んでゐることだ。

3338 足引きの山路は行かむ。風吹けば、波のさやれる海路を行かじ

備後ノ國神島ノ濱で、調ノ某死屍を見て作つた歌。竝びに短歌。四首

3339 玉桙の路に出で立ち、足引きの野行き山行き、みなぎらふ川行き渡り、鯨とり海路に出でゝ、吹く風もおほには吹かず、立つ波ものどには立たず、長きや神の渡りの頻波の寄する濱邊を、高山を隔てに置きて、入り淵を枕に枕きて、うらもなくこやせる君は、母父の愛子にやあらむ。若草の妻もあらず。家問へど、家路も言はず。名を問へど、名だにも宣ら

3338 道中するなら、山路を行かう。風が吹いてゐるので、波が邪魔をする路は、行かないで置かう。

3339 道中に出懸けて、山を歩いたり、野を分けたりして行つて、水煙を立てゝ流れる川の邊までも、旅をして行つて、とう〳〵海に出て見た處が、吹く風もよい加減には吹かず、立つ波ものんびりとは立たず、恐しい所の荒神のいらつしやる渡り場處の、しきりなく波の寄せて來る濱邊に、高い山を隔てに置いて、入り込んだ淵をば枕にして、何の心もなく倒れていらつしやるお方は、おつかさんやお父さんの大事の子であるだらう。女房もあるだらう、と家を問うたが、家へ行く路も言はず、名を問うたが、名さへも言はないでゐる事だ。何うして、氣の毒にも、恐しい海を眞直に越えたのであらうか。

ず。誰が言をいたはしとかも、しき波の長き波を、たゞ渡りけむ

反歌

3340 母父も、妻も、子どもゝ、たか〳〵に來むと待ちけむ人のかなしさ

3341 家人の待つらむものを。つれもなき荒磯を枕きて臥せる君かも

3342 入り淵にこやせる君を、今日々々と、來むと待つらむ妻し、かなしも

3343 浦波の來よする濱に、つれもなくこやせる君が、家路知らずも

○

3344 この月は君も來まさむと、大船の思ひ憑みて、何時しかと吾が待ち居れば、もみぢ葉の過ぎて行きぬと、玉

梓の使ひの言へば、螢なすほのかに聞きて、大土を足蹈みかけり、立ちて坐て、行方もしらに、朝霧の思ひ惑ひて、杖足らず八尺のなげき、なげゝども效をなみと、何處にか君がまさむと、天雲の行きのまに〳〵射ゆしゝの行きも死なむと思へども、道の知らねば、一人ゐて君に戀ふるに、哭のみし泣かゆ

反歌

3345 葦邊行く雁の翼を見る毎に、君がおはしゝ投矢し思ほゆ

右一組みの長短歌、或人は、短歌の方は、確かに防人の妻の作つたものだと言うた。さすれば、長歌の方も、同じ人の作つたものであ

3344 もう今月は、あの方が歸つてみえよう、と信頼して、早く
早くと私が待つてゐるのに、紅葉の様に亡くなつてしまう
た、と使ひが言ふので、其を只ほんのり聞いたゞけで、廣
い地面に、ぢかに足を蹈みつけて走り廻り、起ち居につけ
て、何うすればよいか、そのあてもわからず、思ひ迷うて、
長い溜め息を吐いても、其效能がないと言ふので、何處に
いとしいお方がお出でにならう、と空の雲が行く通りに從
うて行つて、行き當りばつたり、道で死んで了うてもよい
と思ふけれど、道が訣らないので、只一人ゐて、焦れるに
つけて、泣くばかりである。
3345 葦邊を泳いで行く、雁の羽を見る毎に、何時も、あの方が
身につけていらつしやつた、なぐ矢が思ひ出される事だ。

らう。

○

3346 見が欲(ホ)れば雲居に見ゆる、はしきやし鳥羽(トバ)ノ松原。若子(ワクゴ)ども。いざわ出で見む。ことさけば、國に避けなむ。ことさけば、家に避けなむ。天地(アメツチ)の神しうらめし。草枕この旅の日(ケ)に妻避くべしや

反歌

3347 草枕この旅の日(ケ)に、妻離(サカ)り、家路思へば、生けるすべなし

3346 若い子どもだちよ、地平線の空の邊に見える、立派な鳥羽の松原に來た。どれ〳〵出て見よう。此樣に二人の間をはなす位なら、國に居る時分に、はなしてくれゝばよい。此樣に、二人の間を、離す位なら、家に居る間に、はなしてくれゝばよい。其に、天地間の神樣たちも、うらめしい事だ。此旅に出てゐる最中に、懷しい妻をば、引き離して死なすと言ふ事が、能く出來た事だ。（此歌は、違うた歌が二首、一つになつた樣に見えるが、景によつて、亡妻を偲んだものと見るがよい。）

3347 旅に出てゐる此眞最中に、妻と別れて、遙かな家の方を思ふと、やるせがなくて、生きてゐる氣がせないことだ。

萬葉集　卷第十四

東歌(アヅマウタ)

雜の歌

上總ノ國の歌

3348 夏麻(ナツソ)ひく海上(ウナカミ)潟の沖つ洲(ス)に、船はとどめむ。さ夜更けにけり

下總ノ國の歌

3349 葛飾(カヅシカ)の眞間(マヽ)の浦曲(マヽ)を漕ぐ船の、船人騷ぐ。波立つらしも

常陸ノ國の歌（二首）

3350 筑波嶺(ネ)の新桑繭(ニヒクハマヨ)の衣(キヌ)はあれど、君が

3348 海上(ウナカミ)の遠淺の海に在る沖の洲は、此邊であらう。此邊にもう、舟をとめよう。夜が更けたことだ（から）。

3349 この葛飾の眞間の、海岸の入り込みを漕いでゆく舟の、舟乘りどもが、騷しくあわてゝゐる。波が立つてゐるにちがひない。

3350 筑波山地方の蠶の、新しくひいた、絲でこしらへた著物は

御衣し、あやに著欲しも

3351 筑波嶺に雪かも降らる。否諾かも。
愛しき兒等が布乾さるかも

信濃ノ國の歌

3352 信濃なる芽賀の荒野に、杜鵑鳴く聲
聞けば、時すぎにけり

相聞

遠江ノ國の歌（二首）

3353 麁玉の伎倍のはやしに名を立てゝ、
行き敢つましゞ。寢を先立たに

3354 伎倍人の斑衾に綿さはだ、入りなま
しもの。妹が小床に

駿河ノ國の歌（五首）

3355 天の原富士の柴山、このくれの時移
りなば、逢はずかもあらむ

3356 富士ノ嶺の彌遠長き山路をも、妹がり
言へば、けによはず來ぬ

3357 霞ゐる富士の山邊に、わが行なば、
いづし向きてか、妹が歎かむ

3358 さ寢らくは玉の緒ばかり、戀ふらく
は富士の高嶺の鳴る澤のごと

一說に、「ま愛しみ、寢らくしまらく、さ寢らくは、伊豆ノ高嶺の鳴澤なすよ」

又一說に、「逢へらくは玉の緒如けや、戀ふらくは富士ノ高嶺に降る雪なすも」

3359 駿河ノ海。磯邊に生ふる濱つゞら、汝
を憑み、母に違ひぬ

一說には、「親にたがひぬ」となつてゐる。

3356 富士の山の裾を通る、非常に遠くて、長い山道さへも、可愛しい人の家へ行くのだ、と言ふ（元氣で）、ちつとも息切れしたり、呻いたりしないで、越えて來た。

3357 斯うしてだん〳〵遠くへ、私がやつて行つたら、あの來た方に聳えてゐる、霞のかゝつた富士の山のあたりで、いとしい人は、どの邊に私がゐるとも訣らずに、どちらを向いて、溜め息をつくことだらう。

3358 こんなに、引き合はないことはない。焦れてゐることは、富士の山の上の噴火口が、年中ひどく鳴つてゐる樣に、休む間もないのに、さて逢うて、寢るのはほんのちよつぴり、玉を差す紐ほどしか、時間がない。

3359 此駿河の海の磯ばたに生えてゐる、濱つゞらではありませんが、おぬしを信頼して、大事にして下さるお母さんに、そむいたことだ。

伊豆ノ國の歌

3360 伊豆ノ海に立つ白浪の、ありつゝもつぎなむものを。亂れ初めゝや

一説に、「伊豆ノ海に立つ白雲の、絶えつゝも、つがむともへや、亂れ初めけむ」とある。

相摸ノ國の歌（十三首）

3361 足柄の彼面此面にさす笠の、かなる間靜み、子等あれ紐解く

3362 相摸嶺の小嶺見遙し、忘れ來る妹が名呼びて、吾をねし泣くな

一説に、「武藏嶺の小嶺見かくし、忘れゆく君が名かけて、吾をねしなくる」とある。

3363 我が夫子を大和へやりて、まつりだす、足柄山のすげの木の實か

3360 伊豆の海に立つてゐる波が、始終立つてゐるやうに、此儘で、二人の間を續けてゆかう、と思うてゐるのに、もうそんなに、心がわきへ散りかける、といふことがあるものか。（と男をとがめた歌。）

（此は、男の答へた歌であらう。）伊豆の海に立つ雲ではないが、きれても復、仲を續けよう、と私が思うてゐる爲かしてやら、こんなに亂れかけたことなのだらう。

3361 足柄山のあちら側や、こちら側に澤山かけてある、罟ではないが、其罟に、獲物がうまくかゝつた樣に、うまく二人のみとが適ふ迄の間、ぢつと靜かに、いとしい人も、自分も、下裳の紐を打ち解いて、寢てゐる。

3362 自分は防人に召されて、故郷相摸を立つて、遠く都へ上る。故郷の相摸山の高い頂上も、だん〳〵、遠くに見える樣になつて、連れて來るのを忘れた可愛しい人をば、（仲間の者が心なく、）其女房の名前を言ひ出して、自分を泣かせることよ。

3363 可愛しいお方を都へ行かせてあるので、幸便に言傳てゝ、差し上げさせる、足柄山の麥門冬の實であるよ。これは。

（これは、防人などに召されたのでなく、地方官が都へ歸つた後から、任地で逢うた女の、贈つたものであらう。）

3364 足柄の箱根ノ山に粟蒔きて、實とはなれるを、逢はなくもあやし

一説に、「足柄の箱根の山に這ふ葛の、引かば寄り來ね。下なほなほに」

3365 鎌倉の見越ノ崎の岩崩の、君が悔ゆべき心はもたじ

3366 ま愛しみ、さ寢に吾はゆく。鎌倉のみなのせ川に潮滿つなむか

3367 百つ島足柄小船あるき多み、目こそかるらめ。心はもへど

3368 足柄の土肥の河内に出づる湯の、よにもたよらに、兒等がいはなくに

3369 足柄の眞間の小菅の菅枕。あぜか枕かさむ。兒等爲。手枕

3364 足柄山脈の箱根山に、粟を蒔いておいたのが、もう實になつて、秋も暮れてゆくのに、その實の粟の、逢ひにもやつて來てくれないのが、變だ。

3365 安心して、私に心を許して下さい。此鎌倉の見越の崎の、岩の大崩れになつた場處ではないが、あなたが今許したが爲に、後で悔いねばならん、といふ樣な薄情な心は、決して持ちますまい。

3366 可愛しさに、泊りに自分は出掛ける。併し、あの道に在る、鎌倉のみなのせ川には、今頃、滿ち潮で潮がさしてるだらうよ。

3367 足柄山でこしらへた舟が、澤山の島に寄る樣に、お前さんの思うてる人も、行く處が多いので、其爲事にまぎれて、心には戀しく思うてゐながら、逢ふ間があいてゐるのであらう。心配することはない。（情人を怨む女を、他の女が慰めた歌。）

3368 足柄山の土肥川の流域に、涌き出る溫泉ではないが、實際、眞にきれてしまひ相に、可愛しい人が言うた訣ではない。だから、幾分望みはあるのだ。失望するには當らない。

3369 何を不自由らしう、そんな足柄の眞間の里の、小菅でこさへた菅の枕を、する必要がありませうよ、いとしい人よ。爲なさい、私の此手枕を。

3370 足柄の箱根の嶺ろのにこ草の、花妻なれや、紐解かず寝む

3371 足柄の御坂恐み、隠湯の吾が下ばへを、言出つるかも

3372 相摸路の餘綾の濱の眞砂なす、兒等し愛しく、思はるゝかも

武藏ノ國の歌（十首）

3373 玉川に晒す調布、さら〳〵に、何ぞ、この兒の、こゝだかなしき

3374 武藏野に卜へ象灼き、まさでにも、宣らぬ君が名、卜に出にけり

3375 武藏野の小岫が雉子、立ち別れいにし宵より、夫ろに逢はなふよ

3376 戀しけば袖も振らむを。武藏野の白尨が花の、色に出な。ゆめ

3370 足柄山脈の箱根の嶺に生えてゐる、にこ草の花でこしらへた、姉様人形ならば、それは、下裳の紐も解かないで寝ようが、さうではないあなたを、どうしてこの儘で、おかれようか。

3371 足柄の峠にいらつしやる神様は、心に隠してゐることを、言うて通らねば通さない、といふ道祖神であるから、其神慮の恐しさに、心の底に思うてゐた自分の思ひを、とうとう口に出して、告白したことだ。

3372 相摸地方のよろぎの濱に在る、美しい砂の様な、美しい人が、いとしう思はれることだ。

3373 玉川で晒す、晒布ではないが、幾ら思ひかへして見ても、何うしてこの人が、ひどく可愛いのだらう。

3374 親達が不思議を立てゝ、武藏野の卜ひ方で卜うて、龜の甲を焼いて、その象で見ても、はつきりとお告げがなかつた、いとしいお方の名が、自然と自分の容子に現れて、評判になつた事だ。

3375 武藏野の小山に寝泊りした雉子が、朝になると、其處を出て行く様に、（あの日）別れて、出て行かれてから、いとしいお方に逢はない事よ。

3376 戀しくなつたら、袖を振つてゞも、思うてゐれば宜いのだのに、この武藏野に咲く白尨の花ではないが、色に出さない様にして下さい。きつと。

異本の歌

如何にして戀ひばか、妹に、武藏野の尨が花の、色に出ずあらむ

3377 武藏野の草葉兩むき、かもかくも、君がまに〳〵吾は寄りにしを

3378 入間路の大家个原のいはゐ蔓、引かばぬる〳〵、吾にな絶えそね

3329 吾が脊子を、あどかも言はむ。武藏野の尨が花の、ときなきものを

3380 埼玉の津に居る船の風をいたみ、綱は絶ゆとも、言な絶えそね

3381 夏麻引く、うなひをさして飛ぶ鳥の、至らむとぞよ、吾が下ばへし

上總ノ國の歌（二首）

3382 望多の峰ろの笹葉の、露じものぬれ

3382 3381 3380 3379 3378 3377

〔異本の歌〕（戀しくなつたら、袖だけ振つてをれと言ふが、其様な事は出來ぬ。）どう焦れてゐたなら、いとしい人に對して、此武藏野に咲いてゐる尨の花の様に、色に現す事なしに、居られようか。（其様な事は出來ない。）

3377 武藏野に生えてゐる草の葉が、何方へでも向く、それではありませんが、あなたのお心通りに、何方へでも從うて、私はお頼り申して參つたのです。

3378 入間地方の大家の原に在るいはゐ蔓が、引くとずる〳〵と續いて、抜けて來る様に、あなたも私に、何時迄も途切れないで下さいよ。

3379 いとしい方をなんと言へば、私の心持ちが現れませうか。武藏野に生えてゐる尨の花ならば、よく著物に著くが、あの方は私には、つきない即、似合はないお方なのですもの。

3380 埼玉の船泊りに泊つてゐる船が、風の激さに、綱の切れる事があつても、あなたは私に、音信を途切らして下さるな。

3381 うなひの里を目懸けて、飛んで行く鳥が、その里へ著く様に、自分もうなひの里の娘の家へ、行き著きたいものだ、と心の中で、長く思ひ込んで來た事だ。

3382 望多山の笹の冷たい露の、濡れてゐる様にぬれて、（そつと

て吾來なは、汝は戀ふばぞも

3383 望多の峰ろに隱り坐、斯くだにも、國の遠かば、汝が面欲りせむ

下總ノ國の歌（四首）

3384 葛飾の眞間の手兒名を。誠かも、われに寄すとふ。眞間の手兒名を

3385 葛飾の眞間の手兒名がありしかば、眞間の磯邊に、波も轟に

3386 鳰鳥の葛飾早稻を饗すとも、そのかなしきを、外に立てめやも

3387 遙音せず行かむ駒もが。葛飾の眞間の繼橋、止まず通はむ

常陸ノ國の歌（十首）

3388 筑波嶺の嶺ろに霞み坐、過ぎかてに、息づく君を。率寢てやらさね

拔けて）私が遣つて來たのは、お前をば焦れてゐるからこそだよ。

3383 望多の峰に立ち隔てられたゞけで、此樣にお前の顏が見たい樣では、是から先、國が遠くなつたら、定めて、お前の顏を見たく思ふだらう。

3384 あの葛飾の眞間の里の手兒名よ。其がまあ誠か知らん。私に賴つてゐる、と言ふ事だ。その眞間の手兒名がね。

3385 葛飾の眞間の手兒名が居つた時分に、眞間の岩濱の邊に、寄せて來る波も、どん〳〵と寄つて來た事だ。（波さへ、手兒名の美しさに。）

3386 今日は、新嘗だ。それで人を拂うて、神樣に、葛飾の早稻をお供へ申してゐるのだ。（誰も內へ入れる事は出來ない。）としても、あの可愛いお方をぢつと、表に立たして置かうか。

3387 足音がせずに歩く、駒が欲しい事だ。（餘り通うたので、人が彼是評判をする。）さうすれば、あの葛飾の眞間の繼橋をば、途切れないで、始終通はうと思ふ。

3388 筑波山の峰に霞が懸つて、通り過ぎて了はない樣に、思ひ切つて了ふ事が出來ないで、あなたの爲に歎息を吐いて、焦れてゐるあの人をば、まあ共寢して、それで滿足して、旅に出かける樣にしてお遣りなさいよ。（これは、仲介者の歌。）

3389 妹が門彌遠ざきぬ。筑波山隱るゝ程に、袖は振りてな

3390 筑波嶺にかゞ鳴く鷲の哭のみをか、泣き渡りなむ。逢ふとはなしに

3391 筑波嶺ゆ吞向に見ゆる、葦穗山、あしかるとがも、さね見えなくに

3392 筑波嶺の岩も轟に落つる水、よにもたゆらに、吾が思はなくに

3393 筑波嶺の遠面此面に、守り部すゑ、母はもれども、夫ぞ逢ひにける

3394 狹衣を小筑波嶺ろの山の崎、わすらえ來ばこそ、汝をかけなはめ

3395 小筑波の嶺ろに月立し、逢ひた從は、さはだなりぬを。また寢てむかも

3396 小筑波の繁き木の間從立つ鳥の、も

3389 いとしい人の門が、段々遠くなつて來た。あの筑波山が隱れかけてゐる樣に、家が隱れて、見えなくならない內に、も一度、袖をば振らうよ。

3390 筑波山にがあ〳〵と鳴いて居る、鷲の音ではないが、泣いてばかり居り續けねばならぬのだらうか。逢ふと言ふ事なく。

3391 筑波山からは向うに見える、あの足穗山ではないが、惡い缺點も、實際、少しも見えない事だ。（實に美しい人だ。）

3392 筑波山の岩さへ、鳴り響かせて落つる水ではないが、實際私は、あなたを倦んで思うては居りませぬ。

3393 筑波山の彼方側此方側に、獸の番人を立てゝ置くのではないが、おつかさんは、ぢつと目をはなさないでゐるが、いとしい人は、忍んで出逢うて下さつた事だ。

3394 小筑波山の山の突き出た崎のまがつた囘の樣に、自然と忘れて來る事があつたなら、其處で、お前の事を心に浮べないで居らうが、其樣な事は出來ない。

3395 筑波の峯に月が出た樣に、此月も代つて逢うてからは、長くなつた事だが、復共寢をしたい事だ。

3396 筑波山の一杯生えた木の隙き間から、飛び立つ鳥を番して

りか、汝を見む。さ寝ざらなくに

3397 常陸なる波逆ノ海の玉藻こそ、引けば
断えすれ。あどか絶えせむ

信濃ノ國の歌（四首）

3398 人皆の言は絶ゆとも、埴科の石井ノ手
兒が言な絶えそね

3399 信濃路は新の墾り路。かりばねに足
蹈ますな。履はけ。吾が兄

3400 信濃なる千曲ノ川のさゞれ石も、君し
蹈みてば、玉と拾はむ

3401 なかま沼に浮き居る船の、漕ぎ出なば、逢ふ事難し。今日にしあらずば

上野ノ國の歌（二十二首）

3402 日の暮に碓氷の山を越ゆる日は、夫なのが、袖も、さやに振らしつ

ゐるのでないが、あなたをぢつと、見てばかり居られませうか。共寝もすると言ふ事がなくて。

3397 常陸にある波逆の浦の玉藻ならば、如何にも引くと切れるかも知れぬ。私はなんとして、通ふ事を途切らしませうか。

3398 誰も彼ものたよりが、途切れて了うてもかまはない。あの埴科の石井の里の娘の音信が、とぎれてくれるな。（何等の情癡、何たる素朴。傑作。）

3399 信濃街道は、新規に開通した道よ。木や草の切り株に、足を蹈みつけなさるな。履をはいていらつしやい。あなたよ。

3400 信濃なる千曲ノ川のさゞれ石も、あなたが蹈んでお行きなさつたなら、玉と思うて拾ひませう。

3401 なかま沼に浮いてゐる船が、漕ぎ出て了うたなら、逢ふ事はむつかしい。今日逢うて置かねば、逢ふ事は出來まい。

3402 碓氷の山を越ゆる日には、いとしいお方が、其袖もはつきり見える程、ひどく振つて行かれた事だ。

3403 吾が戀ひは、まさかもかなし。草枕
多胡の入野の、おくもかなしも

3404 上つ毛野安蘇の眞麻群掻き抱き、寝
れど飽かぬを。あどか我がせむ

3405 上つ毛のをどのたどりの川路にも、
兒等は逢はなも。一人のみして

3406 上つ毛野佐野の菜立、折りはやし、
吾は待たむ。今年來ずとも

3407 上つ毛野まぐは島門に、朝日さし、
まぎらはしもな。ありつゝ見れば

3408 新田山。峰にはつかなゝ、吾によそ
り、はしなる子らし、あやにかなしも

3409 伊香保ろに雨雲いつぎ、鹿沼づく。
人ぞおたばふ。いざ寝しめとら

3403 私の焦れてゐる心は、目の前にさし當つた今も、悲しい事ばかりだし、此多胡の入野の奥の方ではないが、奥即、是から先も、何うやら悲し相である事よ。（佳作。）

3404 いとしさに、上野國の安蘇の里の眞麻の生えたかたまりを刈る樣に、引き抱へて寝ても、滿足が出來ない。何うすれば、私は滿足するのだらう。（放膽な歌。傑作。）

3405 上野のをどの里の、たどりと言ふ川の、川原を行く道でゞも、いとしい人が逢うてくれゝばよい。連れなしに、只一人で遣つて來て。

3406 今年は歸つて來られなくとも、私はあの方を、此上野の里に出來る野菜の莖立ちを折つて、それで、あへ物なんかをこしらへて、待つて居ようよ。

3407 この上野のまぐはの川の、川島の渡り場所に、朝日がさしたのではないが、ほんとに眩しい事だ。かうして、いとしい方と、向ひ合うてゐると。

3408 新田山はひとり悄然と、平野の中に立つて居る。其新田山が、何の高い山にも、近寄らないでゐる樣に、立派な人にはつかないで、此賤しい自分に賴つて、半端な身の上になつてゐる人が、無上に可愛い事だ。

3409 伊香保の山からどん〳〵と雨雲が出て、それが鹿沼の里に下つて、かぬまづくではないが、姦しかつた人の噂が、穩やかになつた。さあ寝なさいと言ふことよ。

3410 伊香保ろの岨の榛原。ねもごろに奥をなかねそ。まさかしよかば

3411 多胡ノ嶺によせ綱はへて、寄すれども、あにくやしづし。その子は寄らに

3412 上つ毛野黒檜の嶺ろのくずはがた、かなしけ子らに、いや離り來も

3413 利根川の川瀬も知らず、たゞ渡り、波にあふのす、逢へる君かも

3414 伊香保ろの八尺の堰に立つ虹の、あらはろ迄も、さねをさねてば

3415 上つ毛野伊香保の沼に植ゑ小水葱、斯く戀ひむとや、種子求めけむ

3416 上つ毛野かほやが沼のいはゐづら、引かばぬれつゝ、吾をな絶えそね

3410 伊香保山の岨路の王孫の、澤山生えた原ではないが、ねもごろ卽、くよ〳〵と將來の事迄、かけて心配する事はありませんではないか。目の前さへよければ。（佳作。）

3411 多胡の山に八十綱を引いて、引き寄せる事は出來るけれども、嗚呼殘念な事だ。いとしい人は、自分に寄つて來ない。

3412 上野ノ國の黒檜山の葛の葉の様に、段々、遠くなつて行く事だ。いとしうある人に。

3413 利根川の川の渡り場も知らないで、滅多無上に渡つて、波に出會した様に、私に出會してくれたあなたゞ事。

3414 伊香保の山の八尺卽、幾尺とも知れぬ高い用水濠の邊に立つてゐる、虹ではないが、あの様に、人の目に付いて現れる迄も、滿足する程寢たならば、見つかつてもかまはない。

3415 上野の伊香保の沼に植ゑた小水葱ではないが、自分は此様に焦れる爲にか、種子を求めてゐたのだつけ。

3416 上野ノ國のかほやと言ふ沼に生えてゐる、いはゐづらを引いたのではないが、根が拔けて寄つて來る様に、私に寄つて來て、とぎれて下さるな。

3417 上毛野いならの沼の大蘭草。よそに見し從は、今こそ勝れ

右、人麻呂集に見えて居る。

3418 上つ毛野佐野田の苗のむらなへに、ことは定めつ。今は如何にせも

3419 伊香保夫よ。なか〳〵にしも、思ひとろ。夫戀しけと、忘れせなふも

3420 上つ毛野佐野の船橋取りはなし、親は離れど、吾は離るがへ

3421 伊香保嶺に雷な鳴りそね。吾が家には、ゆゑはなけども、子らによりてぞ

3422 伊香保風。吹く日吹かぬ日ありといへど、吾が戀ひのみし、時なかりけり

3423 上つ毛野伊香保の嶺ろに降る雪の、

3417 上野のいならの沼に生えてゐる大蘭草ではないが、側から見て居つたよりは、今の方が却つて、近まさりして立派だ。

3418 上野ノ國の佐野の田に生えてゐる群苗ではないが、下はせて、ちやんと口約束も固めて了うた。もうかうなつた上は、何の心がはりなどしようか。

3419 伊香保に居るいとしいお方よ。此迄は、あなたを宜い加減に思うてゐましたが、其夫なるあなたを、忘れる事が出來ません事ですよ。

3420 上野の佐野の船橋ではないが、二人の間を取り離して了うて、親は間を引き離くが、私は何うして、引き離されてよいものですか。

3421 伊香保の峰に、雷よ鳴るな。私の方には、何う言ふ訣もないが、いとしい人が、嫌ひだからして。

3422 伊香保山から吹きおろす風は、吹く日と吹かぬ日とがあると言ふ事だが、自分の戀ひばかりは、何時と言うて、きまつた時がなく、べつたりだ。

3423 上野の伊香保の峰に降つてゐる雪ではないが、行き過ぎて